

3

boy meets girl and girl and girl.

Presented by Noritake Tao Illustration by Proemizu

Volume :

イラスト・ヒロ水

田尾典丈

彼女と僕と  
[Heroine : 001] [Heroine : 002]

かのじよ  
[Heroine : 004]

カズミと  
[Heroine : 003]

OVERLAP

boy meets girl  
and girl and girl.  
Presented by Neritake Tao  
Illustration by Pirozku

Volume :

3

イラスト・ピロ水  
田尾典丈

僕と彼女とカブジヨとかのじよ

Copyright ©  
2004 Neritake Tao  
All Rights Reserved.  
Pirozku



「ひゅー……！」

黒恵ちゃんが妙な声を漏らす。  
目を開けると、目の前に白くもとい  
黒恵ちゃんのお尻があった。

嬉しいハッピーニング、  
頻発中!?

僕の上に銀花ちゃんに乗っていた。

そして、僕の左隣に金恵ちゃん。

右隣には黒恵ちゃんだ。揃いも揃って下着姿である。

白で揃えられた下着と肌色の前衛芸術が

目の前に描かれていた。



五百野さんが小さく囁く。

「社も街も幸せになれる世界があるんだよ」

と僕の耳に囁いた。



Bokuto  
Kanojoto  
Kanojoto  
Kanojo

# 3

## C O N T E N T S



|                       |             |             |             |             |                       |
|-----------------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-----------------------|
| エ<br>ピ<br>ロ<br>ー<br>グ | 第<br>四<br>章 | 第<br>三<br>章 | 第<br>二<br>章 | 第<br>一<br>章 | プ<br>ロ<br>ロ<br>ー<br>グ |
| 238                   | 193         | 150         | 098         | 007         | 005                   |



**boy meets girl and girl and girl.**

Presented by Noritake Tao Illustration by Piromizu

# 目次

[プロローグ](#)

[第一章](#)

[第二章](#)

[第三章](#)

[第四章](#)

[エピローグ](#)

僕と彼女とカノジョとかのじよ 3

田尾典丈



# Character Profile & Story

Bokuto Kanojoto Kanojoto Kanojo



## 神座木 社

Kanzaki Yashiro

神社の跡取り息子。

少し不幸な普通の高校生のはずが、泉の女神によって分裂した黒恵たちとともに不思議な出来事に巻き込まれる。



## 小野 黒恵

Ono Kuroe

社の幼馴染み。

ある出来事がきっかけで小さい頃から社をこき使っていた。女神のいる泉に落ちたことで、黒恵から金恵と銀花が分裂してしまう。



## 小野 金恵

Ono Kanae

分裂した金髪系女子で元気な方。

黒恵に似た部分も多いが、最大の違いは「社が大好き」と公言すること。



## 小野 銀花

Ono Ginka

分裂した銀髪系女子で静かな方。

大人しめな性格だが過激な発言も多い。



高校生の社は幼馴染みの黒恵になぜかこき使われる日々を送っていた。そんなあるとき、黒恵が女神の住むと言われる泉に落ちてしまい、金恵と銀花という2人の少女が分裂し、その世話を押し付けられてしまう。

黒恵とは違った形で社にアプローチする2人によって、社と黒恵の関係にも少しずつ変化が起こっていた。

黒恵たち3人の少女と騒々しいながらも楽しく日々を過ごしていた社だが、あるきっかけから、さらなる不思議な現象に巻き込まれる。泉の女神が協力してくれたこともあり、解決したかと思いきや、原因と思われる謎の少女が社たちのクラスに転校してきたのだった。





# プロローグ

prologue

Bokuto  
Kanojeto  
Kanojeto  
Kanojo

かの者の眼下には営みがあった。

家があり、人がおり、文化、技術——そこには人々の生活がある。

そんな生活を遥か上空から眺める者がいた。

人ではない。

人のような形を取っているが、それは決して人ではない。

翼もなく、科学でもなく、それは浮いていた。

かの者は街を眺めて、忌々しそうな雰囲気いまいましきを漂わせる。

「忌々しい……」

かの者と街の間には、薄い膜のようなものがある。

人には決して見えない、不可視の膜。

かの者はそれを感じ取る術すべを持っていた。

薄い膜は街全体を覆っているということが、かの者にはわかる。

それは何かから守るように張られているようにも見えた。

また、何かを外へと出さないためにも見えた。

人は何も知らない。

知ることはない。知る術もない。

知るのは、ごくごく一部の——神々のみ。

ドーム状に張られた不可視の膜に向けて、そのかの者は腕のようなものを伸ばした。しかし、それは拒まれ、中へ入ることは叶わ<sup>かな</sup>ない。

侵入を拒否するように、膜はパチリパチリと音を立ててその腕を弾<sup>はじ</sup>き飛ばす。

弾き飛ばされた腕を見て、かの者は呻<sup>うめ</sup>いた。

「少しは弱<sup>よ</sup>まつてるが……もう少し時間はかかるか」

口惜<sup>くや</sup>しそうな雰囲気<sup>ふんいき</sup>を醸<sup>か</sup>し出して、かの者は場所から遠ざかる。

しかし、その声色<sup>あき</sup>に諦<sup>あきら</sup>めた色は見えない。

かの者は出雲<sup>いずも</sup>の<sup>い</sup>一柱<sup>いちちゆう</sup>。

爪弾<sup>つまはじ</sup>きにされ、ある神を追いかけて来た哀れな神である。

# 第一章

1

Bokuto  
Kanojeto  
Kanojeto  
Kanojo

五百野 薔薇

ざわざわと興奮冷めやらぬ教室。

黒板には、白いチョークでそう書かれていた。

それが、転校生である彼女の名前のだろう。

名前を書き終えた彼女は、身体からだを軽やかにターンさせて僕らに顔を向ける。

前に見た時もあったけど、一見すると黒恵ちゃんくろえと似たような顔立ち。よく見るとま

ったく違うのだけど……。

銀花ぎんかちゃんの銀髪よりもさらに色素が薄い白髪。雪のような白さと表現できる、純白

さ。

白百合しらゆりよりも白い肌。ほっそりとした体付きは、触れただけでも崩れ落ちてしまいそ

うなほど儂いはかな。まるで絵本の中から飛び出してきた人形——そんな不思議な雰囲気を目

然に醸し出している。

彼女の私服は血のような赤いコートと赤いブーツで、紅白のコントラストが強いのだけど、今着ているのは学校指定の制服だ。

こんな時になんだけど、とても似合っている。

親しみやすいその顔付きは、クラスにも好意的に受け止められていた。クラスの中に漂う雰囲気と、囁かれて<sup>ささや</sup>いる言葉でよくわかる。

「これで、イホノ ショウビと読みます。五百と書いてイホ。薔薇<sup>ばら</sup>と書いてショウビ。

まあ、漢字の読みが難しいから、イホノって呼んでくれていいんだよ」  
そして、彼女はクラスメイトたちにニッコリと友好的な笑みを向けた。

何の悪意もなさそうな、無邪気な笑顔。

ただ、僕は彼女がその仮面の下に持っている心を知っている。

悪戯心<sup>いたづらこころ</sup>というには少々控えめで、邪悪<sup>じあく</sup>というには少し大袈裟<sup>おおげさ</sup>で。

笑顔で、僕らに三猿<sup>のさ</sup>の呪いをかけてくるような少女だった。

「五百野<sup>いはの</sup>さんは家庭の事情でこちらに引っ越してきたそうです。皆さん、仲良くしてあげてくださいねー」

担任の先生がいつも通りのほんわかした表情でクラスを見渡す。

「「はい」」

あまり深く考えないうちのクラスは、それをいとも簡単に受け容<sup>う</sup>れる。

まったく疑っていない。

まあ、疑われても困るというか、説明に苦勞するし、非常に面倒なんだけど。

「じゃ、五百野さんへの質問タイムね。時間いっぱい使っちゃって。でも突っ込んだ話はホームルーム終わった後にしてねー」

教室の中で次々と手が挙がる。

長い黒髪を靡かせて、ひとりの女の子が自発的に前に出た。前世は監獄の看守かもしれない、うちの委員長だ。

「はい、まず最初に男子の九番」

「どこから引っ越してきたんですかー」

意気揚々と佐村君がスタンダードな質問をする。

すると、五百野さんは何やら不満そうな表情を浮かべた。

「えー、知りたいのはそんなことー?」

唇をわざとらしく尖らせて、答える気はないという雰囲気をつくり出している。

その瞬間、佐村君に対してクラスメイトたちからブーイングが起こる。

「そーだよ、通り一遍な質問しやがって!」「ほら、五百野さんが早くもクラスに不信感持つてるぞ!」「引っ込め引っ込め、SA・MU・RA!」

「イジメか!」

哀れ、佐村君はすぐごと手を下げた。

彼はそこまで酷いことをしてないと思うんだけどなあ。まあ、ノリで敵味方の変わるクラスだし、仕方ないのかもしれない。諦めが肝心だ。

「次！ 女子の十二番」

「タンポンとナプキン、どっち派ー？」

いきなり何聞いてんの、この娘！

照れもせず、まるで目玉焼き、醤油か塩かみたい！

男子とか何も言えない空気になっちゃったし、女子の一部も微妙な顔してるよ！

先生に、止めてよ！ と言おうとしたけど、先生は首を傾げているだけだった。

「交互に使うよー。ナプキンだけだとかぶれちゃうし」

その上、五百野さんも五百野さんだった。

なぜ、あっけらかんと答えられるのか。

そういうのって女子のアンタツチャブルなところじゃないの！

……引っ越してきた場所よりは五百野さんの琴線に触れた質問ということなのか。意味がわからない。

「はーい、質問」

「女子、十五番承認する」

「アイドルとか、好きー?」

その質問に五百野さんはにっこりと笑って、

「うーん、アイドルも素敵<sup>すてき</sup>だけどー。私、もっと素敵<sup>すてき</sup>な人知ってるから」

「えっ、もしかして恋人いるの!？」

「ううん、まだだよ」

「誰<sup>だれ</sup>!？」

ガンガン攻めるなあ。

そんな凄い<sup>すごい</sup>答えにくい質問に対して、五百野さんは視線をゆっくりと動かす。まる

で、今から答えを言う、と言わんばかりに。

その瞳<sup>ひとみ</sup>は、最前列の僕を見下ろしていた。

「ふふっ」

と、小さく笑う彼女はこうして見てみるととても可愛<sup>かわい</sup>い。

だけど、そんなことを考えている暇はなかった。

「「「またお前か!」」」

クラスにそんな声が響き渡る。

後ろを見遣<sup>みや</sup>れば、黒恵ちゃんはあからさまに機嫌が悪かった。イライラが収まらないように机を指でトントントントン叩<sup>たた</sup>いている。

銀花ちゃんもむすつとしていた。唇が真一文字に結ばれている。

金恵ちゃんだけは仕方なさそうに笑っていた。でも、あんまり納得はしていないだろう。彼女の説明もまだしていないし……。

でも、ただひとつわかることがある。

「はあ……」

ごく自然に溜息ためいきが出た。

まだまだ騒動は終わらなそうだ。

一時間目の授業が始まるまでの休み時間。

五百野さんはクラスメイトたちから質問攻めを受けていた。ホームルームが終わるなり囲まれたようで、五百野さんも動けなかったみたいだ。

「ねーねー、下着どこの使ってる?」「一週間に何回するー?」「神座木君かんざぎと知り合  
い?」

碎けすぎた質問だなあ……。

最初の質問コーナーでの受け答えが原因だろうけど、このクラスの倫理観はどこへ旅立ってしまったんだろう……。

ちなみに五百野さんの席は、よりにもよって黒恵ちゃんの隣だ。

居心地が悪くなったのか、黒恵ちゃんは僕の方へとやってくる。金恵ちゃんと銀花ちゃんも珍しくそれについてきた。

「おい、何があった」

黒恵ちゃんは開口一番、機嫌悪そうにそんなことを聞いてくる。

「いや、何があったのかって言われても」

「随分と仲よさそうじゃねえか。『素敵な人』とか言われて」

「僕も初耳なんだけど……」

何で僕がいきなりそんなことを言われたのかもよくわからない。

すると、銀花ちゃんも僕に顔を寄せてきた。

「……ぎんかとのデート中にわりこんできたよね」

そういえばデート中突然、五百野さんが乱入してきたんだよね。

そのおかげかどうかはわからないけど、それと同時に銀花ちゃんに入っていた言わ猿は消えたんだっけ。

「これ以上、ライバルが増えるのはやだなあ」

金恵ちゃんも腕を組んで複雑そうな顔をしていた。

でも、ライバルって……。これ以上、誤解を招く前に解いておかないと。

「そもそもそんな話にはなっていないよ。最初に会った時も猿を見せてきて、これ落とした？ とか言ってきたぐらいで……。あとは銀花ちゃんとの時に乱入してきたのと、銀花ちゃんがなくなった時に会ったぐらいで」

「どうだかな。お前は妙にそういうところを言うてそうだけど」

「誤解だつてば……」

黒恵ちゃんが信じてくれない……。

疑わしそうな顔をしている。

何かあったのか言え、と言わんばかりの表情だ。だから、言うようなことは何もなかったんだつてば……。

「結局、正体もわからないままだしねえ」

「……ん。まったくふめい」

困った顔で黒恵ちゃんと銀花ちゃんが溜息を吐いた。

正体、か。

女神さまにもわからなかったみたいだしね。

僕に事実などわかるはずがない。

ただ……。

「ちよつと思つたんだけど、銀花ちゃんが池に落ちた後に初めて会つたんだよね」

そう言う、銀花ちゃんが首を傾げた。

「……でも、とくにへんなことはなかったよ？」

「まあ、そうなんだよね。だから、今言ったのはただのこじつけだよ」

「池に落ちた後ねえ。要するに銀花が落ちて、またあの駄女神が分裂させたってことか？」

「う、うん。あの時も女神さまと一言二言話したけど、銀花ちゃんを助けてもらっただけだったかな」

あの時、女神さまが現れたけど、特におかしなことは言っていなかったよね。

また分裂させる？　みたいな冗談は言ってきたけど。

……いや、待てよ？

『……ところでさ、今、誰か出て行った？』

とは言ったつけ。

でも、それぐらいは女神さまも把握してるよね。

もし、五百野さんが銀花ちゃんから分かれた人ならさすがに気付くそうだし、それと言わないってことは女神さまが分けたってことではないだろう。

たぶん……。

「また騒動を起こされるようなら、絶対に締めてやる」

黒恵ちゃんが物騒なことを言い始めた。

「あんまり暴れないようにね……」

僕としても、何も起こらないことを祈るばかりだ。

授業が始まると五百野さんはその優等生っぷりを見せつけた。

「第二次世界大戦以降の英国は、世論に従って植民地を手放したと言うよりも、手放さざるを得なかったとも言われています」

先生の質問にはしっかりと答えるし、

「はいっ！ その答え、わかります」

率先して手を挙げるし、

「教科書の四十六ページですね。了解しました！」

受け答えもハキハキしている。

委員長が歯ぎしりをしてしまうほど隙すきがない。いや、対抗意識燃やさないでもいいと思っただけど。

体育の授業では黒恵ちゃんや金恵ちゃんに一步譲ったらしいけど、運動神経も充分いようだった。

「小野金恵には負けるけど、スタイルも悪くないよな」。特にあの白い髪が儼おのそうでた

まらなくいい」

佐藤君は相変わらず。

でも、僕が言うのもなんだけど、確かにスタイルはいいと思う。バランスが取れている感じた。

「でも、お前のお手つきなんだよなあ」

「お手つきとか言わないでよ。違うから……」

そうして過ごしているうちに、ようやく午前中の授業が終わってお昼休みになる。

購買学食組と弁当組に分かれ、弁当組は仲間内で机を並べてお昼の準備を始めた。

黒恵ちゃんたちは僕の机に集まって、席をくつつけ合う。

「さてさて、今日のお弁当は何かなー」

「昨日の残りもんだろうに」

金恵ちゃんと黒恵ちゃんが他愛のないやり取りをしながら、弁当の蓋を開けた。中には色取り取りのおかずと白米が、半分ずつ入っている。黒恵ちゃんのお母さんの料理って、うちとはまた違う味で美味しいんだよね。うちは薄味主体だし。

僕と銀花ちゃんも続けて弁当箱を開ける。銀花ちゃんのお弁当は黒恵ちゃんや金恵ちゃんと同じだ。

僕のお弁当の中身は……鶏肉、牛肉、豚肉と肉尽くしだ。こんなに食べられないんで

すけど。量も多いし。

たぶん、皆に食べてもらいたいんだろなあ。

「誰か、少し食べる？　僕、こんなに食べられないし」

「じゃ、わたしもうー」

金恵ちゃんが即座に僕のお弁当から肉を取っていった。

「お前太るぞ」

「わたし、食べても太らないから。黒恵でしょ」

「……ないぞうしぼうがつく」

「ちよつと銀花、怖いこと言わないでよ……。あ、おいしー」

お肉を食べて、金恵ちゃんのご満悦だ。

「じゃあ、私ももらっちゃうー」

と、横合いから突然箸はしを持った手が伸びてきて、お弁当から鶏肉を持っていく。

「あ、ホントだ美味しー」

犯人は五百野さんだった。

「五百野さん、ど、どうしたの？」

ちよつと声が震えてしまう。

何を企たくらんでいるのか、さっぱりわからないから警戒してしまふ。

「一緒にいい？」

彼女は僕の心中などお構いなしに、フレンドリーに話しかけてくる。

しかし、黒恵ちゃんは眉をまゆ擧ひめて、

「断る」



即座に一蹴<sup>いつしゅう</sup>した。

まったく躊躇<sup>ちゅうちよ</sup>がない。

「まーまー、そんなこと言わずにさっ」

だが、五百野さんはそれにめげることなく、僕たちの席へと強引に割り込んできた。後ろから空いている椅子<sup>いす</sup>を引っ張ってきて座る。

「色々あったけど、水に流してくれると嬉しーなー」

「あの三猿のせいであたしらがどんだけ酷<sup>ひど</sup>い目に遭ったと思ってるんだ」

「えー。でも、悪いことばっかりじゃなかったでしょー」

五百野さんはまったく悪びれない。

彼女は黒恵ちゃんを見て、

「黒恵は理想の社<sup>やしろ</sup>を見られたし」

次に金恵ちゃんに視線を移し、

「金恵は社の本当の気持ちを聞けたし」

最後に銀花ちゃんへと。

「銀花は自分の気持ちを社に伝えられたでしょ？」

なぜ悪く言われるのかわからないと言わんばかりに、寂しそうな表情を作る。いや、拗<sup>す</sup>ねていって言うてもいいかもしれない。

「限度つてものがあらあ。いきなり社があんな言葉をかけてきても、こつちとしては心臓に悪いだけだ」

「じゃあ、社は少しずつカッコいい言葉を言えるようにならないとね」

五百野さんがニコツとした表情で、僕に水を向けてきた。

「いや、そういうのはちよつと僕の性格じゃ……。そ、それはともかく、君は一体何なの？」

「えー。別にいいじゃん、そんなこと。それよりも私のスリーサイズとか気になったりしないの？」

五百野さんは胸元に指をかけ、それを引っ張りその中を見せるように身体を少し倒してくる。

僕は即座に目を逸らした。

「お前も恥知らずか！」

だけど、すぐに黒恵ちゃんが腕を掴んで、五百野さんの行動を止める。

よかった……。

というか前々から思ってたけど、五百野さんは妙に浮き世離れしているというか。

常識に疎いというのだろうか？

僕らとは別の時間を過ごしてきた感がある。

「つーか、あたしらはお前の個人情報なんかに興味はない。正体は何者かってことと、何をしに来たのか、目的とか、そういうことを聞きたいだけだ」

「んー。私は四人を幸せにしたいだけなんだけどなあ。一番は社だけど」

「<sup>ばか</sup>馬鹿も休み休み言えよ、この野郎」

「野郎じゃなくて女なんですー」

べーっと五百野さんは黒恵ちゃんに向かって舌を出した。

五百野さんはゆるりゆるりと黒恵ちゃんの質問を<sup>かわ</sup>躲し続けている。

重要なことは絶対に言わないぞ、と思っっているようだった。

「まーまー、黒恵。抑えなさいよ。怒ってばっかじゃ<sup>しわ</sup>皺が増えるだけよ」

金恵ちゃんが黒恵ちゃんの怒りを鎮める。

だが、黒恵ちゃんはずっとそれに同意しなかった。

「また、三猿みたいなことがあったらたまらんだろうが。あと皺とか余計な御世話だ。

まだできたりしない。まだつるつるだ」

そう言いつつも、ちょっと指でこの周りを触ったりする辺り、気にならないわけではないらしい。

「そりゃ黒恵の言うことももつともだけど。でも、わたしたちがどれだけ言っても、無駄っぱいし」

そうすると、五百野さんはこつと笑う。

「いいねー。金恵はわかってるね」

それに金恵ちゃんもニツコリと笑顔を返した。

「でも、別に許したわけじゃないからね」

だけど、笑顔から出た言葉はちよつと怖い……。

金恵ちゃんも静かに怒ってるみたいだ。

それでも金恵ちゃんは怒鳴ったり、暴力に訴えるようなことはしないけど。

「あなたの目的が何かは知らないけど、今度迷惑かけられたら、さすがにこつちにも考えがあるから」

「おー、こわっ。金恵だけは怒らせないようにしないとねー」

五百野さんはわざとらしくのけぞる。

「……んー、暖簾のれんに腕押しって感じ」

「あははっ。まあまあ、みんな仲良くやろーよ。私ももうちよつと考えて四人を幸せにするからさ」

性格も目的もまったく掴めない。

これから彼女がうちのクラスメイトか。

そろそろ心安らぐ学校生活を送りたいな。

「結局、あいつは何しに来たんだ」

空に綺麗な夕日を映し出す、夕暮れ時の帰り道。

黒恵ちゃんは唇を尖らせて不満げだった。

市街地の中を歩きながら、その歩き方は乱暴でイライラしているのが一目でわかってしまう。

こういう時の黒恵ちゃんは昔だと怖かったけど、今はそうでもなくなっていた。僕の心境の変化だろうか？

「わたしたちと仲良くなりに来たとか？」

黒恵ちゃんがぼつりと呟く。

樂觀的だけど、そうだったらこっちも気楽なんだけどな。

「……そんなわけない。悪意ありまくりだったし」

銀花ちゃんは黒恵ちゃんと同じく不機嫌そうな顔になっている。

以前直接会ったこともあるからなおさらだろうな。

彼女の正体もわからないし、目的もわからない。

三人の後ろ姿を眺めながら僕は考え込む。

ひとつだけ言えるのは。

金恵ちゃんと同じように、仲良くなりに来たと考えることは、とてもできないということだ。

『次は絶対に………、幸せにしてやるから』

あの言葉に、善意があつたとは思えない。

蓮ちゃんれんがくれたお土産から端を発した騒動は彼女の仕業しわざであり、彼女は四猿よんざるを使つて、僕らを弄もてあそんできたのだ。

銀花ちゃんの心が、僕に伝わるようになって。

金恵ちゃんに、僕の心が伝わるようになって。

黒恵ちゃんが、僕の理想像を見るようになって、僕もそれを演じる羽目になった。

僕自身も、し猿——そんな猿のせいで、黒恵ちゃんたちの下着姿が見えるとか、そんな状態に陥って、心の安らぐ暇もなかったわけで。

なんだかんだあつて解決したわけだけど、そしたらまさか五百野さんが転校してくるなんて……。

「つか、あいつどこに住んでるんだ？」

「……それに、おやはいるの?」

「そもそも、戸籍つてあるの? わたしたちが言うことじゃないけど」

そういえば結局、金恵ちゃんと銀花ちゃんの戸籍はどうなっているのかわからないままだしなあ……。黒恵ちゃんのご両親に聞いても笑って誤魔化されるし。

ただ、区役所には怪談で出てくる口裂け女の戸籍があるらしいから、どうにかなっているのかもしれない。

今更だけど、本当に変な町だ……。

「謎が一杯だね……」

僕は深々と溜息ためいきを吐きながら呟いた。

「まあ、今は女神さまもいるわけだし、なんとかなるんじゃない?」

金恵ちゃんはとても軽い口調で言う。

「あの駄女神、本当に頼りになるのかよ」

黒恵ちゃんは女神さまに対して懐疑的だ。

金恵ちゃんや銀花ちゃんを生み出したわけだし、凄すごい力を持っているのは確かなんだろうけど。

「今悩んでも仕方ないじゃない。まだ何もしてない以上、彼女をどうにかできるわけじゃないんだし」

「今までどうにかされてきた分で、すでに印象は底値なんだが」

「……しんらいがあるわけでもないし」

「第一、常識があるかどうかすら謎だぞ。なんというか、妙に常識がないっつーか。あの作ったような笑顔のまま刺されそうだし」

三者三様の意見を聞きつつ、色々と考えていると――。

ふわっと、下から掬い上げるような風が吹く。

「うおっ」「きゃあっ！」「……わ」

三人のスカートが一斉にめくれ上がった。

黒恵ちゃんは白、金恵ちゃんも白、銀花ちゃんが薄い水色。

彼女たちはすぐにスカートを押さえるが、僕の目にははつきりと見えてしまった。皆がゆつくりと振り返る。

「見た、よな？」

「見た？」

「……みちやったよね？」

黒恵ちゃん是不機嫌そうに、金恵ちゃんと銀花ちゃんは恥ずかしそうにしていた。明らかに不意な風だった。



「見・た・よ・な!?」

黒恵ちゃんが凄んでくる。

僕だって顔を背けられなかったし、皆もスカートを押さえられなかったわけで。

「見ました……」

正直に告白する。

デコピンが飛んでくるかと思ったら、黒恵ちゃんは溜息を吐いただけだった。

「まあ、素直なことはいいけどよ……お前の呪い<sup>のろ</sup>、まだ続いてるんじゃないだろうな」

「え、もしかしてわたしたちの下着姿が見えてる?」

「……まさかはだかまで?」

「見えてないよ! 見えてたら、早々と離れてWIREで伝えてるから!」

例の四猿の騒動の時も、コミュニケーションアプリのWIREで伝えているのはわかっているはずなのに……!

あの時、僕は皆の下着姿がモロに見えてしまっていた。だからこそ、直接的な会話が困難だったわけで……。

でも、とんだ濡れ衣<sup>ぬれぎぬ</sup>だった。

ただ最近、こういうことは多い気がする。

前回の四猿騒動も妙にエッチなことが多かったような……。

「とはいえ、見たのは事実だしな」

ピシッとデコピンが僕のおでこに炸裂する。

とてもいい音が響いた。

痛い。

「ちよつと黒恵、減るもんじゃないのに何してんの!？」

「……ほーりよくはんたい」

「うるせーな! 減るとかさそういう問題じゃねーし、暴力でもねーよ!」

「相手に痛みを与えたら、それだけで暴力よ。まったく、ちよつと収監されて更生してきた方がいいんじゃないの?」

「……へんなところで、くろえはがんこ」

いつもの何気ないやり取り。

普段と何も変わらない……と思う。

だというのに、何故だろう。

妙な違和感を覚えるのは……。

「……やしろ、どーかした?」

不安な顔をしていたせいか、銀花ちゃんが心配そうに僕の顔を覗き込んでくる。

「いや、なんでもないよ」

気のせいだよな。

黒恵ちゃんの乱暴さも。

金恵ちゃんの過保護っぷりも。

銀花ちゃんの抜け目のないところも。

いつも通りのはずだ。



今日もいつも通り、学校が始まる。

一時間目から体育だった。今日はちょっとどんよりとした天気で、風も強めで肌を突き刺す寒さがキツイ。

制服の中に体操着を着込んでいるようなクラスメイトも多く、その場で制服を脱ぎ始めたような女子もいる。

まあ、すぐにジャージを羽織るんだけどね。ただ、うちはジャージ登校禁止だから、中に体操着を着込むのが限界だった。

男子は外に出てから着替える——んだけど、トイレ行ったら完全に出遅れた。

おかげで教室の中で悠々と着替えることができるけど。

「……って、あれ。短パンがないぞ」

鞆かぶとの中を漁あさったけど短パンだけがない。上着とジャージの上下はあるのに。

「もしかして、これ？」

いきなり聞こえてきた声は、とても透き通っていて逆にビックリした。

「い、五百野さん？」

僕のすぐ近くで彼女が僕の短パンを手に持ってゆらゆらと揺らしている。

すでに着替えており、体操服姿だった。ジャージを着ていないけど、寒くないんだろうか……。

「あ、僕の、だけど……。というか、男の短パンを女の子がそんな手に持ったりしない方が」

「いやいや、いい匂においするしいんじゃないかな？」

「嗅かがないでよ!? 恥はずかしいから!」

物珍ものめづしそうに短パンを鼻に近づけて、すんすんと息を吸っている。

いや、洗濯した後だから洗剤の匂いしかしないだろうけど……まるで変態じゃないか! 背筋がちよっと不思議な感覚でぞわつとしてくる。

「あ、じゃあ、代わりに私の嗅かぐ?」

すると、五百野さんが突然、自分の短パンを脱ぎ始めた。



その奥にあるショーツがちらりと見えて――。

「だ、ダメだってば！ なにしてんの!? もう!」

慌ててその手を押さえにかかる。

五百野さんはすぐに短パンから手を放した。

「あははっ。冗談だってば」

とてもそうは思えないんだけどなあ。

僕が止めなかったら、確実にあの短パンを脱いでいた気がする。

「何でそういう真似まねをするのさ。もう少し恥じらいを――」

「だって、女の子の下着姿とか、裸を見られたら、男の子は幸せになれるでしょ?」

「それはまた随分、偏った意見のような……」

「だから、コンピニとかにもエッチな本が置かれてるんじゃないの?」

「そりゃあ、コンピニにあるということは需要があるというわけで……」。

僕の部屋にも、うん、ちゃんとあるけどさ。

「だ、だからって、だ、誰だれでもいいってわけじゃないから!」

「あー、じゃあ、私を好きになってももらえればいいのかな?」

「いやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいや」

僕は隙すきを衝ついて、五百野さんから短パンを奪い返した。

「は、早く行かないと遅れるよ?」

そう言つて暗に五百野さんを教室から出て行かせようとするが、五百野さんは出て行かない。

これじゃ、着替えられないんだけど……。

「社はさ」

ふと声のトーンを落として、いつもと違う調子で五百野さんが問うてくる。  
雰囲気もまるで違う。

からかうような雰囲気もないし、おちよくっているような空気もない。

「恒久の幸せは欲しくないの?」

そして、そんなことを**つぶや**いた。

表情も真面目で、真剣に聞いてきているのがわかる。

「恒久の幸せ……って言われてもピンと来ないけど」

「社はさ。不幸なんでしょ?」

「……自分ではあんまりそう思つてないよ」

「でも、それは黒恵たちがいるおかげだよね?」

それは間違いなくそうだろう。

もし、黒恵ちゃんが——今では金恵ちゃんと銀花ちゃんもだけど、彼女たちがいなか

ったら、どんな思いで今を過ごしているのか想像もつかない。

元々僕は崖崩れに巻き込まれたり、ベランダから鉢植えが落ちてきたり、走る車に擦られたり、細かいところで運がない。

ただ、黒恵ちゃんは過保護気味に僕を見守ってくれているから、それに巻き込まれたりしていない。

おかげで安全な道を歩けている。

「ねえ。五百野さんは……」

僕は逆に尋ねた。

「なんでそこまでして僕らに構うの？ 僕は現状に不満なんかないよ。黒恵ちゃんたちがいるからこそ、僕は穏やかに過ごせてると思ってる。前も言ったけど、僕は皆で幸せになればそれでいいんだ」

「それが、叶わ<sup>かな</sup>ないとしても？」

突然、五百野さんが悲しそうな顔で言う。

「叶わないって……そんなこと——」

「あるんだよ。そんなことが」

「なんでさ。何で叶わないのか、僕にはわからないよ」

そして、彼女は黙り込んだ。

しばらく教室に備え付けられた時計の針の音だけが響く。

今にもチャイムが鳴りそうな時が進んで――。

「私はこの街の異常を直したいだけだよ」

五百野さんはそう小さく呟いた。

「この街の、異常？」

「この街がありとあらゆるものを幸福にする。でも、それはおかしいことなんだよ。絶対に、ね」

寂しそうな、あるいは怒りか、僕には読み取れない複雑な表情になる。

ただ表情どころか、僕には言っている言葉の意味すらわからない。

「ありとあらゆるものを、幸福に？」

「この街の不慮の事故による死亡はゼロってのは知ってる？ 怪談や都市伝説ですらハッピーエンドになる、この現象。そして、それに違和感を抱かせないという奇妙。これが異常と言わずして、何を異常と言えればいいの？」

「え？」

確かにこの街の怪談や都市伝説は、他の街とは違う。<sup>ほか</sup>

だけど、不慮の事故による死亡はゼロというのは今初めて知った。

「不思議？」

五百野さんは不思議な目で、そんなことを言ってくる。

「でも、それが事実なんだよ」

「それっていったい――」

詳しく聞こうとしたところで、タイミング悪くチャイムが鳴り響いた。

「じゃあね、社っ！」

そして、五百野さんは背中を向けて走って行ってしまう。

掴まえる暇もなかった。

……いったい、どういうことなんでしょう？

体育の授業も終わって、僕は教室へと戻る。

一旦、<sup>いったん</sup>五百野さんの言ったことを考えないようにして体育に臨もうとしていたんだけ

ど、無理だった。

意味はわからないのだけど、気になってしまっただよなあ。

ただ、隣を歩く佐藤君は僕以上に気難しい顔をしていた。

「神座木、あそこは決めろよなー」

「う、申し訳ない……」

今日の体育はサッカーをやっていたのだけど、得点チャンスで僕は空振りをしてしまった。ふわっと浮いて向かってきた球に合わせて、身体からだに当たれば点が入るという恵まれた環境下で。

外した時の切なさとか悔しさとか恥ずかしさったら……。

考え事をしていたせいかもしれないけど。

昇降口で運動靴から上履きへと履き替え、教室へと向かう。

「あー、もう女子の着替え終わったのか」

「みたいだね」

廊下の先で、教室の中に続々と男子が入っていく。

普段は女子が着替え終わるまで、僕らは廊下で待つんだけど。今日の着替えは早かったみたいだ。

僕らも続けて教室に何気なく入ろうと、開いていた扉のレールを踏み越える。

そこには下着姿で着替えている女の子たちがいた。

「え……？ え？」

黒恵ちゃんや金恵ちゃん、銀花ちゃんも。

他の皆がほとんど着替え中だ。

赤黒青白緑黄紫白赤桃黄水白緑白白白。

色取り取りな下着が見える。

そして。

先に入っていったはずの男子がひとりもいなかった。

な、何これ？

どうなってるの……？

僕は確かに、みんなのあとに続けて入ったはず。隣のクラスに入っていたとかいうオチであるはずもない。

間違いなく、みんなはこの教室に入っていったはずなのに……！

「何やってんだアホォ！」

黒恵ちゃんから筆箱が飛んでくる。

箱というか筆入れ。僕の額にスマッシュヒットした。

痛かったけど、痛いとか思ってる場合じゃない。

「ご、ごめんなさい！」

やるべきことを思い出し、僕は一步引いて慌てて扉を閉める。

振り返ると、廊下ではクラスメイトの男子たちが「おお」と口を開けて間の抜けた顔になっていた。

まるで敬いすら感じるような、妙な目つきをしている。

「お前、着替え中の教室に堂々と入るなんて……すげえな」

佐藤君が手を合わせて僕を拝んできた。

……なんで、佐藤君が僕の後ろにいるの？

「えっと……佐藤君、僕と一緒に教室の中に入らなかった？」

「んなわけねえだろ。明らかに着替え中だったじゃん。そこに入るなんて勇氣は持ち合わせていない」

「扉開いてなかった？」

「何言ってるんだ、お前」

頭を抱えるしかない。

僕は間違はなく教室の中に入る男子を見ていた……と思う。

それを見て女子の着替えが終わった、そう発言したのは佐藤君だ。

佐藤君に責任を押しつけるわけじゃないけど間違はなくおかしい。

「隙間<sup>すきま</sup>からいいものを見せてもらった」「神座木、男だな」「いや、神だ」「仏だな」

クラスメイトたちは好き勝手言ってくれている。

僕はそんなことをするつもりじゃなかったのに。

だからといって、それを弁明したところで信じてはもらえないだろう。

実は僕を担いだドッキリ……？

「神座木の勇気に乾杯だ！」

……でもなさそうだ。

この空気は明らかに『はめてやったぜ』というものじゃない。

中学校の頃に毘わなにはめられた時は、もっと見下すような笑いだった。

もっとも、その後毘を仕掛けた人たちは黒恵ちゃんにボコボコにされたんだけど……。

「着替え、終わったよー」

そんな話が終わって、僕らは教室の中へと入る。

教壇の前に行って、僕は頭を下げた。

「みんな、ごめんなさい！」

どういう形であれ、僕は彼女たちの下着姿を見ちゃったわけで。

その事実是不変わらない。

僕が謝ると、女子のみんなは揃そろって「仕方ないなー」って表情になった。

「事故だから仕方ないよー」「まあ、神座木君だし？」「わざとじゃないもんね」

どうにか許してくれるらしい。

心の底から安堵あんどする。

残りの学園生活が灰色になる可能性もあったわけだしね。

「女子の着替え覗いて許されるなんて……」「マジかよ、神座木」「次も頼みたい」  
男子の方は妙な話になってるけど。

もう二度としないから。

それからはいつも通りの空気になって、僕もホッとした。

ただ、この異常事態だけは報告しておかないと……。

「あー、社っちの覗き事件は意図的じゃなかったかー」

お昼休み。

友人の蓮ちゃんが来たので、お弁当を食べながら事情を話す。

今日も蓮ちゃんは白衣を着て、まるで科学者のような風采だ。ふうさい

左目にかかったモノクルといい、理科室に籠こもってピーカーや試験管片手に怪しげな  
実験をしてても違和感がなさそうだ。

マッドサイエンティストとか言われてもおかしくない。

白いリボンで結ったポニーテールはとも女の子らしいんだけど。

「覗きが意図的なわけじゃないじゃないか……」

それよりも僕はあらぬ疑いを掛けられそうだったので、すぐさま否定した。

どうも僕の覗き事件はWIREを通じて、蓮ちゃんに伝わっていたらしい。

そこからこの学年にはあつという間に伝わったようで、知らない男子からよくやったといわんばかりにサムズアップを決められた。そんなことされても困る。

それにしても、もしあそこで女の子たちに許されていなかったら、本当に学校に居場所がなくなっていた。

女の子の情報網ってちよつと怖い。

「まあ、意図的なわけないわよねえ。それに社っちは着替えぐらい見ようと思えば見られるわけだし?」

「な、何のこと?」

着替えを見ようと思えば見られるって……。どういう理屈なんだろう。

もう僕はあのおくわからない下着姿が見えちゃう目にはなっていないぞ。

「かなちーと銀の字は、社っちに『見せて』って言われたら、見せるっしょ?」

とんでもないことを言いながら、蓮ちゃんは隣にいる金恵ちゃんと銀花ちゃんに目をやる。

「んー、できればふたりきりの方がいいけど」

金恵ちゃんは腕を組みながらそう答えた。

「……やしろ、もしかしてたぎ、いる?」

銀花ちゃんは色々と発想をすつ飛ばして、スカートの中に手を入れてショーツを脱ごうとしている。

「ちよつと止めてよ!?」

慌てて腕を掴んで止めた。

「……ほかほかだよ?」

「だからダメなんだよ!?」

たまにはまともな会話のキャッチボールがしたい。

銀花ちゃんは暴投しかしてこないしなあ……。

「お前ら、もうちよつと良識ってもんをだな」

「事ある毎に社にデコピンする黒恵に言われたくない。ね、社?」

黒恵ちゃんが呆れたように言うのと、すぐさま金恵ちゃんが受けて立つ。何気に金恵ち

ゃんは手で僕のおでこを覆って、デコピンから守ろうとしてくれていた。

でも、僕に振られても困るんだけど……。

「ああん!? お前は教育が暴力とでも言う気か!?」

「あれが教育で罷り通るなら、日本の教育の終焉よ!」

そこから特に関係ないことで言い争いを始めた。

しょうもない口喧嘩が少し続いて、

「昨日あたしのプリン食ったの、どこのどいつだ!」

「賞味期限ギリギリだったじゃない! もったいないと思っただけよ!」

いつの間にか、話の本題が変わっていた。

なんで昨日の冷蔵庫のプリンに言及されたんだろう?

展開が早すぎてついていけない……。

「はいはい、仲がいいのはわかったからストロップストロップ、どうどう」

蓮ちゃんが無理矢理ふたりを引き剥がす。

「で、社っちの言い分としては、すでに着替えは終わってて、教室に男子が入っていったと」

「うん。だけど僕が入った瞬間、着替え中だったし、先に入ったはずの男子はいないし……」

隣にいたはずの佐藤君もいなかった。

廊下で普通に待機してたからなあ。

「状況見てないから何とも言えないわねえ」

「そりゃそうだよね」

蓮ちゃんもお手上げだろう。

「黒っちたちのには、社っちはどんな感じだったの?」

御飯を食べるお箸で指しながら、今度は女の子の方に水を向けた。

……蓮ちゃん、お行儀悪いなあ。足も組んでるし。

こんな女の子だったっけ？

「んー。あたしは最初扉に背中向けてたから、あんまりわかってねーんだけど。振り向いたら、出入り口から一歩ぐらい中に踏み込んでたかな。一瞬、意外すぎて社だって認識できなかったけど、すぐに気付いて筆箱投げた」

黒恵ちゃんの話はこんな感じだった。

……まあ、あの時の僕はフリーズしてたし、筆箱を当てられたのも止むなしろう。当たったおかげで再起動できたわけだし。

場合によってはまじまじと見てしまった——いや、事実なんだけど、そういう風に見えると思うし。

「わたしは出入り口の方に社の気配を感じたから、扉が開く前から振り返ってたんだけどね」

「怖えよ、お前」

黒恵ちゃんのツツコミを無視して、金恵ちゃんは続ける。

「普通にガラッと開けて入ってきたよ？　で、一歩進んで、そこで『はっ!?』と気付いた感じだったかな」

仔細がわかったのはありがたいけど、僕そんな感じだったのか。

いや、着替え中だつてわかった時は驚いたしね……。

「……ぎんかも似たようなかんじだと思う……。のぞきでながめてるっていうよりは、だれかをさがしてみたいだった」

まあ、覗きなんてもっと隠れてやるものだろう。扉を開けて堂々と見るものではない、と思う。

銀花ちゃんが探してるっていうのは、男子を探していた時の行動だろう。

何しろ僕の視点では扉は開いていたし、男子も数人が中に入っていた。

それは僕の中では確実な話だ。幻でも見てなければ、なんだけど。

あの後、佐藤君に聞いてみたけど、教室に来るまで話していた内容はまったく同じだった。

戻ってくる途中までは、佐藤君と僕とで完全に一致している。

ただ教室のある階まで上がってきてからが、ちよつと違っていた。

『あー、もう女子の着替え終わったのか』

彼がそう言ったところは違っていた。

『あー、まだ女子の着替え終わってないのか』

だったという。

それで僕は『みたいだね』と返したらしい。

ところが、僕はそう言っても止まらず、まるで普段と同じように堂々と教室に入ったという。

何というか、狐か狸きつねに化かされたような気分だった。

「ま、何にせよ、様子がおかしかったからすぐにわかったけど……気をつけろよ」  
黒恵ちゃんが、ぴしと軽くデコピンしてくる。

大して痛くない、指を押しつけるようなデコピンだった。

「第一、それこそ五百野の仕業じゃねーのか」

まあ、それが一番、わかりやすいんだけどね。

何しろ、僕を幸せにするって名目で以前、服を透けさせた女の子だ。

女子の着替えを見させることも幸せに繋つながると考えていたのかもしれない。

そりゃ、目は幸せだけど……やっぱり罪悪感の方が勝るよなあ。

絶対に気まずさの方が強いよ。

「えー、ひどーいー。私、今回何もしないもーん」

幼く、拗すねたような口調。

振り返ると五百野さんがお弁当箱を片手に立っていた。もう片方の手には箸を持っ  
ている。

立ちながらお弁当を箸で突いて口をもぐもぐしていた。

お行儀悪いなあ、五百野さん……。

「……ホントに？」

銀花ちゃんがまるで信じていないような冷たい目で睨む。

「おおっ、こわーっ」

五百野さんはその瞳に恐れを成したかのように身震いした。……そんな肝っ玉の娘じゃないと思うんだけど。

「ホントだよー。あの女神にも聞いてみたらいいよ。だって、私の目には社に何か仕掛けられたような形跡は見えないもん」

自信満々な表情だ。

本当のことを言っているようにも見える。

でも、どれだけ言葉を尽くされても、前科があるから信用できなかった。

「ホントに今の私じゃないからね！ もっともこれからやるかもしれないけど？」

そんなことを言うだけ言って、自分の席に戻ってしまった。

これからやったりもしないで欲しいんだけど……。

とはいえ、こっちが何かできるわけでもなかった。

そう考えると、とても歯痒い。

黒恵ちゃんがフンと鼻を鳴らす。

「まったく……信用できるわけねえだろう」

銀花ちゃんもこくこくうなず頷いていた。

珍しく黒恵ちゃんと銀花ちゃんの意見が一致している。

「でもさ。かばうわけじゃないけど、やってるとしたら一々、あんな風に突っかかってこないんじゃない？ あれじゃ疑って下さいって言ってるようなもんだし」

しかし、そこに金恵ちゃんが頭を悩ませながらつぶや呟いた。

蓮ちゃんは「確かにねー」と言って同意している。

「何か起こったら、あの子に疑いが行くのは間違いなく自覚してるでしょ。だとしたら、誤魔化しのためとかじゃなくて意外に本当かもよ？」

うーん。

言われてみれば、もし五百野さんが原因だとしたら、さっきの発言はあまりにもうさ  
んくさすぎる。

でも、なにかしらかふ関わっているような気がするんだよなあ。

誰かに任せて、自分はやってない、みたいな。

「ま、家に戻ったら女神さまに聞いてみるのが一番早いんじゃない？」

結局はそういう話に落ち着くよね。

女神さまだったら一発だろう。たぶん。

あれでなかなかすごい人——女神さまだし。

「さて、そろそろ昼休み終了だし——」

と言って蓮ちゃんが空になったお弁当箱を茶巾袋ちやきんの中に入れて立ち上がる。

そして——ガクンと頭が落ちた。

倒れそうになる蓮ちゃんの身体からだ。

僕の方にのし掛かってくる蓮ちゃんの肩を、僕は両腕で必死に支えた。

「ちよ、ちよっと蓮ちゃん、大丈夫!？」

「あ、あはは、なんか立ちくらみが——……あん」

蓮ちゃんの口から今までに聞いたこともないような艶つやっぽい声が響く。

「ちよ、ちよっと杜つつち、そういうのは黒くろっちたちにやるもので……」

……蓮ちゃんが最初、何を言っているのか僕には理解できなかった。

僕は肩を支えた……と思ったはず。

それがいつの間にか、僕の腕は胸に移っていた。

蓮ちゃんの中ぐらいの胸を、手の平を広げて完全に掴んでいる。

白衣越し、ブレザー越し、Tシャツ越し、下着越し——と隔たる壁は多いものの、そ

こが膨らんでいることは手に伝わる柔らかさが証明していた。

「う、あ、うわあ!？」



しかし、このまま手を放せば蓮ちゃんがさらに倒れ込んでしまう。

「ちよつと何やってるの、蓮も社も」

金恵ちやんが蓮ちやんの身体を起こしてくれた。

それですよ、やく僕の手が蓮ちゃんの胸から離れる。

「ご、ごめんね、蓮ちゃん」

「あはは、まあ、こつちが立ちくらみ起こしたからね、事故よ事故」

でも、なんでだ？

僕は肩を掴んだと思ったのに……。

ただ、こればかりは蓮ちゃんが倒れてきた時の衝撃で、僕もはつきりとした自信がない。

「や  
し  
ろ

$$\vdots$$

怨嗟えんさの聲が耳に届く。

「お前、いい加減にそのエロい体質どうにかしろっ！」

理不尽なことを言われつつ、僕は額にこの日一番のデコピンを喰らった。

エロい状況になってるのは、僕のせいじゃないはずなのに。

本当に何が起こってるんだ……。

四十四段の階段を上りきると、鳥居と境内が見えてくる。

僕の家がある神社、神座木神社だ。

大して有名ではないが、それなりに古い歴史を持っている……らしい。

この階段を毎日上り下りしていれば、体力も付く——と昔は思っていたけど、やっぱり運動は意識的にしないとダメらしい。

いつも何の気なしに上り下りしているからなあ。

そもそも付くべきところに筋肉が付かないみたいだしね。

まだ日の落ちる時間じゃないからか、今日は何人かの参拝客が来ていた。

父さんが対応しているようで、邪魔しちゃうマズい。

さっさと社務所の方へと行こう。

僕ら家族が住んでいるのはここなのだ。

親戚が泊まり込むこともあって、部屋もたくさんある。

「ただいま」

「おかえりー」

母さんの声が玄関にまで響いてきた。

どうも台所にいるらしい。たぶん晩ご飯の準備をしているんだろう。特に何も言われないってことは、用事はないってことだ。

手早く部屋に行って着替えてから、僕は上着を羽織ってまた玄関へ。

「どこか行くのー？」

「御神木さまのところー」

「はいはい。気をつけてねー」

もはや庭に等しいのに、気をつけても何も無いと思うのだけど……。

掃除も兼ねて行くのが日課のようなものだ。

外に出てから、さっそくち取りと箒ほうきを持って家の裏手に回る。

うちの神社は麓ふもとから頂上の中腹より少し上らへんに建てられていた。山の頂上には一本の巨大な木がある。学校からでも見える大きな木で相当に古い木だ。もはやいつからあるのかは資料がないからわからないけど。

立ち入り禁止のロープを乗り越えて、山の中へと入る。

木の葉が自然とアーチ状になった土の階段を上って頂上へ向かう。

「ふう……」

そして、視界が開けて頂上へ出た。

その広場となった場所に、巨大な御神木さまが今日も鎮座している。

で、その上には――。

「お、また今日も来たの。飽きないねえ」

枝葉に止まっていた蜜のような――もとい妖精ようせいが御神木さまの周囲を飛び回りながら降りてきた。

その身体は僕の人差し指ぐらい小さい。透明な羽を生やし、全身からキラキラと光を放つ妖精。

光色の髪を伸ばし、それがゆらゆらと意思を持ったかのように動いていた。

相も変わらず、小さくても美人さんに見える顔立ちだ。ただ、人間サイズになったら僕よりも大きそう。

ファンタジーに出てくる妖精さん、そっくりに見える。

「まあ、別に小さければ何だっていいんだけど、この方がそれっぽく見えるでしょ？  
虫になって踏み潰つぶされるのもやだし」

とは、妖精ふんに扮している女神さまの弁だった。

元々泉の女神さまなのだけど、五百野さんの件が行き詰まった時に出てきてもらっている。

どうも、うちの御神木さまとも何か関係があるようで……御神木さまが女神さまにお願いしてくれたらしいけど、よくわからない。

「飽きないとかそういうんじゃないで、日課なんで」

「結構、結構。なんだかんだで、ここの祭神も社には感謝してるみたいだしね」

「わかるんですか？」

「何となくってぐらい。こつちが気合い入れないと、私も正確には読み取れないよ」

御神木さまの枝をぐるぐると回る。

「御神木さまに気合いなんてあるんですか……」

そんな会話を交わしながら僕は箒で地面に散らばっている葉っぱを集める。

色々あって、もう女神さまが何を言ってもあまり驚かないようになっていた。

ちり取りで集めて、ビニール袋の中へと入れる。また正月には火にくべる神さまの葉として使われるだろう。

「ところで女神さま」

「あん？」

「今日、おかしな事がいくつか起こったんですが」

そう前置きして、今日のことを話す。

覗き事件と、これは違うかもしれないけど、蓮ちゃんのがのし掛かってきた時の話だ。肩を掴んだはずなのに、なぜか胸を掴んでいた。

「まあ、覗きぐらい男子だったら健全なことじゃない？」

「そういうのを言ってるんじゃないです」



「ほんの冗談よ。まったく生真面目なんだからね。もっと肩の力抜きなさいな」女神さまは適當すぎる気がするんですが……と思っただけ、黙っておく。

「ま、沈黙は金なり、だからね？」

バレているのかもしれないけど。

ただ、女神さまは首を傾げた。難しい顔をしている。小さい妖精さんではあるけど、それぐらいはわかった。

「特に何かされたって形跡は見当たらないわね。至って健全よ」

「……ですか」

「納得できないって顔ね」

「まあ……。蓮ちゃんの時は自分も咄嗟だったから自信がないんで確信を持って言えないですけど、覗きに関しては間違いないとおかしいって思いましたし」

女神さまは掃除をする僕の周囲をぐるぐる回りながら、何かをチェックしていく。女神さまが羽ばたくたびに光がキラキラと散っていつて綺麗だ。

「現状だと、まったく形跡がないから、それは少年の幻覚だった……としか言えないわねえ……」

「そんな……。その形跡を消すことと違ってできないんですか？　そうすればバレないわけですよ？」

「無理ねえ。そんなもん時間を戻さなきゃ無理だわよ。前回の呪い<sup>のろ</sup>みたいなことするのって、人間に喩<sup>たと</sup>えれば、外科手術するようなものだもの。患部摘出したら何かしら痕<sup>あと</sup>が残るっしょ？ それと同じで神威の力を使ったら何かしら痕<sup>あと</sup>が残るわけ」

「神威？」

「神様が使う力の総称みたいなものよ。別に重要じゃないから覚えなくても良し」

「あ、はい」

なににせよ、女神さまが言う以上、僕は何もされていない……っということか。

「じゃあ、五百野さんってわけじゃないんですね」

「五百野、か。まあ、何やってきてもおかしくないけど。あいつは何者なんだか」

「黒恵ちゃんに似てる気がするんですが……」

「……さてね」

五百野さんを初めて見た時、一瞬だけ黒恵ちゃんに見えたんだよね。

でも、似てると言えば似てるとい程度なんだけど。

女神さまは知っているのか知らないのか……よくわからないけど、興味はなさそうな態度だった。

「彼女の正体って、女神さまにもわからないんですか？」

「……五百野をけしかけてきたヤツには心当たりがあるんだけどねー。ただ、その気配

が見えないのがね」

何か今、凄いことを聞いた気がする。

「……え、誰だれです？」

「厄神って呼ばれる神さ。でも、あいつはここに入ってこれるわけないしねえ。五百野ほどの力を発揮させられ——」

厄神って、また何か嫌な響きが……。神さまではあるのかな？

そこで女神さまは最後まで言おうとしたところで口を噤つぶんだ。

「っと、言い過ぎたね。なんにせよ、あいつは今、何もやってないはずよ。たぶんね」

「そうですか……」

「ただ、可能性があるとすれば」

「あ、やっぱり何かあるんですね？」

「うむ」

女神さまは空中でふんぞり返るように胸を張った。

全体が小さいから、いまいち反り返りが様にならないけど。

「ま、あんた自身にかけられてなくても、他の人間ほかにかかっている可能性はゼロじゃないって辺りかな」

「僕以外？」

「そ。要するに、あんた以外の誰かが何かの力を發揮して、それに偶然巻き込まれたって形ね」

「偶然、なんですか？」

「まあ、偶然ね。だって、社を巻き込みたいならマークしておく必要があるわけだし。マークしたら、それが痕に残る。偶然、巻き込まれたなら、痕は残らないからね」

そういうものなのか。

だとすると、巻き込まれた人を捜した方がいいのだろうか。

でも、僕を目標にしてないってことだしなあ。

「だけど、そういうことってあるんですか？」

「んー……ないとは言いきれない……ってレベルね。そういう不可思議なことって、神様の力が漏れて、指向性を持たさずに放置されてたら、何か起こっちゃった……って感じだし」

「軽いですね……」

「仕方ないのよ。その辺りは管理も面倒だしね」

結局、結論としては偶然、か。

女神さまがここまで言う以上、それは本当なのだろう。

仮に、女神さまが見えないものを仕掛けられていたら、僕にはどうしようもない。

「まあ、あんたが心配だって言うならとりあえずマーキングしといてあげるわよ」

「マーキング？」

「そ。仮に変なところに飛ばされても居場所がわかるって代物ね。死の世界でも異世界でも居場所をこっちに教えてくるから」

「……今、さらっと死の世界とか異世界とか言いましたけど」

「え、聞きたいの？」

「興味はあります」

「面倒だからイヤ」

「そうですか……」

じゃあ、言わなきゃいいのに……とは思ったけど口にはしなかった。

そんなことを話しているうちに掃除が終わる。

「ふう……僕、そろそろ戻りますけど、女神さまどうします？」

「私はここにいますよ。ここが特等席みたいなもんだしね」

女神さまは御神木さまと踊るように回りながら上っていく。

そして、最初に座っていた枝にちょこんと腰をかけた。

「じゃ、失礼します」

広場に背中を向けて階段を下りようと足を踏み出す。

そこに、

「少年。今、あんた幸せ？」

と、女神さまはそんなことを尋ねてきた。

僕は振り返って見上げる。

小さくてよく見えないけど、女神さまは物憂げな表情をしているように見える。

「どうなの？　幸せ？」

「うーん、あんまり実感があるわけじゃないですけど……以前に比べれば幸せだと思いません。たぶん……」

ずっと黒恵ちゃんに虐げられていると思っていただけ、それには理由があった。

夢でしか見ていないし、黒恵ちゃんが直接言ってきたわけじゃないけど。

それに最近は金恵ちゃんや銀花ちゃんもいつも一緒にいて、騒がしくも楽しい日々を過ごせている。

こんな日々がずっと続けばいいと思えるぐらい。

「……そっか。ならいいか」

ちよつと溜息混じりに、そんなことを呟く。

女神さまはそれきり顔を上げて空を仰いでいた。

質問は終了したのだろう。

僕はまた階段に目を向けて、山を下りる。

階段を下りきったところで、街についての話をするのを忘れたと気づいたものの、今日はもう遅いし、明日にすることにした。



今日は昨日よりも暗く、灰色の厚い雲が空を覆っており、太陽の光がかなり遮られている。そして昨日と同じく、肌を突き刺すような寒さだった。

まだ十二月だから、来月……年が明ければもっと寒くなるんだけど。

登校中の朝はマフラー、手袋、カイロが手放せない。

銀花ちゃんは相変わらず手袋をしていなくて寒そうだ。

そんな銀花ちゃんに、なにやら、じー……と期待された目を向けられている。

いや、わかるけど、なんというか毎回やるのは恥ずかしいというか……。

黒恵ちゃんが怒るし。

金恵ちゃんも拗ねるし。

というわけで、心苦しいけどスルーした。

スルーされたことがわかったのか、銀花ちゃんの口が尖る<sup>とが</sup>。

胸が締め付けられるなあ……。

「で、結局、何かわかったか？」

歩きながら黒恵ちゃんが尋ねてくる。

「ううん。少なくとも僕に何かされた形跡はないって」

「……じゃあ、やしろがまじでノゾキ？」

「ちよっと銀花ちゃん!? いや、銀花ちゃん視点ではそうなるかもだけど！ 違うからね!？」

「わたしは社のこと信じてるけど、見たいんだったら言ってくれていいからね？ 場所を選びたいけど、いつでも見せるよ？」

「金恵ちゃんもそういう発言は控えてくれると嬉しいんだけど……」

そんなやり取りをしていると、黒恵ちゃんが瘴気でも混ざったかのような深い溜息を吐いた。

かなり呆あきれているようだった。

「でも、何かに巻き込まれた可能性はあるって。要するに誰かが巻き込まれて、僕がそれに巻き込まれたとか……」

「巻き込まれたねえ。それで覗のぞきかよ」

「いや、覗のぞきは結果的に起こっただけで僕が意図してやったわけじゃ……」

ただ、あんな事がもしもう一度起こったら、今度こそ身の破滅だ。  
少なくとも教室に入る前に確認をしないと。

……そうそう起こらないってことだけど、起こったらマズいしなあ。

「きゃっ」

突然、背中越しに可愛い悲鳴が響く。

一定のリズムを刻んでいた足音が、歪な間隔に変化した。

振り返った瞬間、僕の肩が体勢を崩して転びそうだった金恵ちゃんの手<sup>つか</sup>に掴まれる。

そして、勢いのまま押され、僕は地面に押し倒される形になった。

それと共に僕の視界が真っ暗闇<sup>くらやみ</sup>に。

ドタンと鈍い音。

背中にちよつとした衝撃。

幸い大した衝撃じゃなかったから大した痛みはないんだけど。

金恵ちゃん、大丈夫だろうか。

「や、社、大丈夫？」

僕の上にいるであろう金恵ちゃんが心配そうに声を掛けてくれる。

ただ、金恵ちゃんの身体<sup>からだ</sup>に圧迫されてしまい、僕は息ができなくなっていた。

声を出すこともできない。

空気を求めて僕は顔を動かす。

「んっ……………」

妙に蠱惑的な声が耳から脳へと入り込んだ。

でも、それに構えるほどこちらにも余裕がない。

酸素！ 酸素が欲しい！

「や、社お…………あんまり動くとお…………あいたたた…………あんっ」

ああ、金恵ちゃん、もしかして怪我してるのか？

それで動けないのかもしれない。

でも、こっちも少しでいいから隙間が欲しい……………！

というか、さっきから考えないようにしてたけど、僕の顔に乗ってるこの柔らかいのって、もしかして…………とか考える余地もなく。

金恵ちゃんの豊富な胸だった！

「おい、金恵。大丈夫か」

「…………かなえ、立てる？」

金恵ちゃんの胸が僕の顔から離れる。

なんとなく後ろ髪を引かれるような柔らかさだったけど……………！

「ぶはっ！」

肺に行き渡ってなかった空気を求めて、大きく息を吸い込んだ。

「ご、ごめんね、社。大丈夫？」

「だ、大丈夫……ふうー……」

呼吸が落ち着いたところで、僕も立ち上がる。

「金恵ちゃんも大丈夫？」

「う、うん……。ちよつと痺<sup>しび</sup>れて動けなかったけど、怪我はないみたい」

金恵ちゃんの顔が妙に赤い。

……いや、まあ。

金恵ちゃんからすれば胸をまさぐられたようなものだろうしなあ。

こっちも気恥ずかしい。

「女の身体ぐらい、しっかり支えろよ」

黒恵ちゃんから叱<sup>しつ</sup>責<sup>せき</sup>が来る。

いや、まったくその通りで。

突然すぎたけど、もうちよつと踏ん張れた方がいいよなあ。

「もうちよつと僕の身体が強ければよかったんだけど」

「わたしこそ、本当にごめんね。怪我がなくてよかったけど……なんで転んだのかしら」

「今更ドジっ子アピールをされても困るぞ」

黒恵ちゃんが冷たく言う。

「そんな真似<sup>まね</sup>しないわよ！」

「何もないところで転んでる時点で相当ヤバいんじゃないの？」

「うぐぐぐぐぐぐ……」

珍しいことに金恵ちゃんがやり込められていた。

反論しようにも何もないところで転んだのは事実だしね。

長い人生、そういうこともあると思うけど。

「……てやつ、どーん」

いきなり身体に衝撃が来る。

銀花ちゃんが僕の身体にタックルしてきたのだ。

そこまで大した力じゃなかったから、倒れることはなかったけど。

「え、な、何。銀花ちゃん……。危ないよ？」

「……ぎんかも、たおれてちちくりあいたかったのに」

「朝から何言ってるの!？」

本気そうなところがまたちょっと怖い。

銀花ちゃんは努めて真顔なことが多いからなあ。

「……ざんねん」

「危ないからやめようね……。せめて怪我するかもしれないことはやめようよ」

「……ん」

わかってくれたのならいいんだけど。

「というか、社。お前最近、そういうの多すぎだろ」

「そ、そうかな……？」

「昨日も蓮であつたじゃねえかよ」

……あつたけど。

「でも、別に蓮ちゃんのも金恵ちゃんのも、僕が原因ってわけじゃ……」

「……まあ、そうなんだけどよ」

黒恵ちゃんは納得したような、していないような、半々といった中途半端な顔だ。

でも。

まだ二回だけなんだけど、どうにも似たようなことが多いと思ってしまうのは確かなんだよなあ。

偶然だと思いたい。

普段と同じように学校が始まり、二時間目。

教壇では数学の先生が熱弁を振るっている。

教室には暖房が入っているせいか、ぽかぽかと暖かい。

こう心地よいと少し眠くなってくる。

午後になったら、お弁当を食べた後だから相当な睡魔に襲われそうだ。まあ、今心配するようなことじゃないけど。

それに最前列にいるから、寝たりしたらすぐにバレるしね。

「はい。では、小野黒恵さん。この問題を」

黒板には今やっている箇所の数式が書かれている。

「はい」

黒恵ちゃんは教壇にのぼり、黄色のチョークを受け取ってから、その数式を解いていた。

解法も答えも合っている。

完璧かんぺきだった。高校に来てから、何気によく勉強してるんだよね、黒恵ちゃん。

……置いていかれないようにしないと。

「よくできました。戻ってよいですよ」

先生に促されて、黒恵ちゃんが教壇から下りる。

ガリッと教壇の角を擦るような音が響いた。

見れば黒恵ちゃんが完全に体勢を崩している。僕が見た一瞬の構図では、どう考えても自分自身では身体を立て直せない。

「黒恵ちゃん！」

咄嗟に、倒れそうな黒恵ちゃんに向かつて横から腕を出す。

どうにか黒恵ちゃんの身体を腕の中に入れたものの、横から出しただけでは僕の細腕だと支えきれない。

呆気なく僕は黒恵ちゃんごと倒れ込んでしまった。

机や椅子、床に背中を打つ音が、静かだった教室に響く。

僕の方が下になって、背中を打ち付けてしまったらしい。背骨がじんじんしているような気がした。

「ひう……！」

黒恵ちゃんが妙な声を漏らす。

目を開けると、目の前に白——もとい黒恵ちゃんのお尻しりがあった。

僕の口と鼻が完全にその中に埋没するかのように密着している。

純白の下着越しに危ない感触が僕の顔に押し込まれていた。

「ふ、ふおえひゃん、ひゃやくはにやれて……！」

「ばっ、ばか、口を動か——あ、んっ！」

逆に黒恵ちゃんの頭が僕の足の方にある。

黒恵ちゃんの腕と僕の足が、まるで関節技のように絡まっているようで、  
無闇に動かすことができなかった。  
むやみ

「だ、だいじょうぶですか？」

先生も心配したような声で僕らに声を掛けてくる。

「だ、だ、大丈夫です……。お、おい、社。息をするんじゃない……！」

「しょ、しょんなほによ、ひあへへも」

「だああ！ 喋るなしゃべっての！」

まともに喋れないからどうしようもない。

「……プロレスごっこ？」

佐藤君、見てないで助けてよ！

皆もそれに納得したように頷うなずいてないで！

結局、この状況から授業を再開させるまで二分ぐらしかかった。

それから黒恵ちゃんにデコピンを喰くらったのは言うまでもない。

三発連続は痛かった……。

「いくら何でもおかしいと思うんだよ！」

「お前がエロいからだ！」

お昼休み。

僕たち四人は校内でも人気のない、屋上へ続く階段の上でお弁当を広げていた。

すぐ近くに南京錠なんきんじょうと鎖の付いた扉がある。ここから屋上に続いているけど、今の時季は寒いだろうから、仮に南京錠がかかっていたとしても出る気にもなれない。

で、お弁当を食べ始めてから、僕は先程のことがおかしいととても強く訴えたつもりなんだけど。

黒恵ちゃんに蹴いっしゅうされてしまった。

「ひ、人の大事なところに顔面押しつけて……！　こ、声我慢するのに、ひ、必死だったんだぞ……！」

「で、でも」

「デモもストもない！」

微妙に古くさいことを言ってデコピンしてくる。

今日だけで何回目なんだ……。

そろそろおでこが腫れ上がってそう。

痛みがなかなか引かない。

「ちよつといい加減、怒りを鎮めなさいよ。事故でしょ、事故」

金恵ちゃんが僕をいたわるようにおでこをさすりながら黒恵ちゃんを見る。

ちよつと優しく触ってくる感触が、とても気持ちいい。

「なーに、甘えさせてんだ。お前らはまさぐられても平気かもしれねーけど、あたしはこれでも一般的な羞恥心しゆうちしん持ってたんだよ」

「だって社は黒恵を助けようとしたんじゃない。そもそもあんなところで倒れるのが悪いでしょうに」

「そ、そりゃ、あたしの不注意かもしれねえけど。それにしたって、あの仕打ちはねーよ！　なんであんな体勢になったのかわけがわかんねーし」

目を瞑つぶってたからなんとも言えないけど、不幸な事故だったとしか言いようがない。

「……やしろ」

「ん？」

銀花ちゃんが興味津々な目をしている。

「……チーズのおいだった？」

「え、なんのこと？」

銀花ちゃんが何を言いたいのか、僕にはよくわからない……。

銀花ちゃんも「……あれ？ おかしいな、通じない……」と首を傾<sup>かし</sup>げている。でも、大したことじゃなさそうだ。うん。忘れよう。

「くっだらねーこと言ってんじゃねーぞ。中年のセクハラか。ったく……」

黒恵ちゃんは眉<sup>まゆ</sup>を顰<sup>しか</sup>めて、おかずを口の中へと放り込んで、豪快に咀嚼<sup>そしゃく</sup>していた。見るからに不機嫌だ。

あんなことになったから、当然と言えば当然なんだけど……。

とはいえ、ここ数日でああいう出来事が起こりすぎているせいで、いくらなんでももう偶然とは思えない。

ただ、じゃあ女神さまもわからないというこの現象にどう対処すればいいのかわからなかった。

学校休んだ方が良いのかなあ。

「でも、さすがにこうも立て続けに起こると変じゃない？」

「……さすがにいいじょー。やしろがへんたいになっちゃう」

「ならないからね……」

もし、このままこんな状況が続けば銀花ちゃんの言うことも冗談ではすまなくなる。傍から見ると実際にただの変態にしか見えなそうだし。

妙な誤解を受けつつあるけど、それでもみんなはおかしいとは思ってくれてるんじゃないかな。黒恵ちゃんも含めて。

「でもなあ……」

黒恵ちゃんは、それでも認めたくないかのように懐疑的だ。

さっきの出来事は相当、黒恵ちゃん的にはアウトだったらしい。

お尻の方に顔が当たって……ただ、どこに当たってたの？ とか、そんなことは言及してないのだけ。

「連続して起こってるからおかしいとは思うけどよ。なんというか、社の行動が自然すぎてこっちとしては、社を疑うしかないんだが」

自然すぎるって……。黒恵ちゃんにはそう見えてるのか。

「あー」

「……あー」

でも、これに関しては金恵ちゃんも銀花ちゃんも同意してしまった。

ふたりにも自然に見えてたってことか。

「着替え中に入ってきた時もごく自然だったしねえ。ただ、社が入ってきてからすぐに着替え中だってことに気付いたってぐらい？」

「それだって寝ぼけてたとか、注意力散漫だったで済む話だしな」

うーん。僕としてもあからさまにおかしいと思ったのは、教室に入った時だけなんだよなあ。

金恵ちゃんとは転びそうになったところを掴つかまれて、支えきれずにそのまま倒れちゃっただけだし。

黒恵ちゃんとは教壇で体勢を崩したところを、僕が助けようとして失敗したに過ぎないんだよね……。

蓮ちゃんが倒れ込んできた時も肩を掴んだつもりだったのが、胸にいったのは慌てていたせいなのか僕も自信がない。

ああいう結果になっちゃったのは、偶然としか言いようがないんだけど。

「それにしても……金恵ちゃんも黒恵ちゃんも、妙なところで転んだよね。そっちの方で何か感じたりしなかったの？」

逆に僕の方から金恵ちゃんと黒恵ちゃんに質問を振ってみた。

「うーん、特には感じなかったかなあ。急に足が止まってバランスを崩したってだけだし。踏み出す場所をちよつと間違えちゃった、みたいな？」

「いや、別に。ちよつと注意力散漫だったかな、ってぐらいだな」  
ふたりの答えは不自然なものではない。

この程度で異常と言ってしまうのも、さすがに無理があるよね。

もつと明らかにおかしいものでないと、僕も納得できないし、金恵ちゃんや黒恵ちゃんも納得できないだろう。

「とりあえず、様子見るしかねえだろ。わかりやすい異常ならいいけどよ」

ひとまず、話はそんな結論になった。

蓮ちゃんに相談できればよかったんだけど、今日は蓮ちゃんは風邪のようでお休みだ。WIREで話しかけても反応がない。

既読にもならないから見てもいないのだろう。

もしかしたら、昨日倒れたのも風邪気味だったのかな？ お見舞い行った方がいいの

かも……。

「まあ、さっさと弁当食ってようぜ。話ばかりしてたら午後の授業までに全部食えねえしな」

黒恵ちゃんがそう言うって以降は他愛のない話をしてお弁当を突<sup>つ</sup>く。

教室に戻ってもよかったんだけど、まあ、今更だし。

自分のお弁当を食べながら、皆の話を聞いていると銀花ちゃんが箸<sup>はし</sup>からおかずっぽい何かを落とした。

「銀花ちゃん、溢<sup>こぼ</sup>れたよ」

「……え、どこ？」

「いや、何か見えなくなっただけだ。豆っぼいのが一個」

銀花ちゃんはお弁当を置いて、服の上から手をばたばたと上から順に押さえる。

しかし、見つからないらしい。

まあ、落ちた物は小さかったしね。

「……うごいた……?」

すると、銀花ちゃんは妙なことを言い出した。

「……虫?」

銀花ちゃんが小さくつぶや呟くと、その顔が見る見るうちに青ざめていく。

「いや、虫が入ったようには見えなかったんだけど」

「……ううう」

僕の言葉だけでは安心できなかったのか、銀花ちゃんは心底嫌そうな顔でブレザーを脱いだ。

しかし、虫も、そして落ちたおかずも見当たらない。

「……どこ?」

涙目になっている。

助けてあげたいのは山々だけど、溢れてしまった物が銀花ちゃんの服の中にあるわけ  
で……。

慌てたようにセーターを脱いで、金恵ちゃんに放り投げる。

まだ何も見つからない。

「おい、銀花。落ち着けて」

「……う、うごいてるかんじがする。虫だもん」

その身体は微かに震えていた。虫は本当に嫌いらしい。

銀花ちゃんはずいぶんワイシャツを脱ぐ。

白いＴシャツと、その下に着られている下着がうつすらと見えた。そして、滑らかな肌色まで。

ただ、そこまで脱いでも何もない。そのことに絶望した顔をしながら、銀花ちゃんはずいぶんＴシャツを脱ぐ。

僕がその事実気付いた時には、あつという間に下着姿になっていた。

「ちよつ、銀花ちゃん!？」

慌てて後ろを向こうとしたが遅かった。

銀花ちゃんはさらに下着まで脱ぎ始める。

間に合わず、僕の視界に銀花ちゃんの慎ましやかな胸がピンク色な部分も含めて納まった。

すぐに顔を逸らしたけど、しっかりとそのすべてが僕のワーキングメモリを通じて、

脳内HDDに記録されてしまっている。

「……あった。虫じゃない」

どうやら発見できたようだ。

まさか下着の中にまで入ってるとか、どういうことなのか……。

それからいそいそと下着や服を着る音が響く。

ようやく終わって僕は後ろを向いていた身体を元に戻した。

「ふう……」

まともに胸を見てしまったのは、初めてかもしれない。

今までは下着までしか見えなかったし。

銀花ちゃんは見られたことが恥ずかしいのか、ちよつとだけ頬ほおを赤く染めている。

「……さむい」

「そりゃ、上半身全部脱いじゃったらね……」

事がすべて終わって落ち着くと、黒恵ちゃんは僕に呆あきれたような目を向けていた。

どちらかというときわしいという目つきだった。

「やっぱり、どう考えてもお前がエロいからのような気がしてきた」

「ご、誤解だつてば……！」

とはいえ、振り返るのが遅れたのは確かだし。

いや、でも、まさか上全部脱ぐとは思わないし！  
事故だと思いたいような、そうでないような。

何が起きているのかわからないから、不安は募るばかりだ。

五時間目の終わった辺りで、蓮ちゃんから連絡が来ていた。

WIREのメッセージを読んでもくれたらしい。

休み時間の中、僕はそのメッセージを読んだ。

「【蓮】

ごめんごめん。今日はちょっと風邪引いててさあ

(-\_-)ゞ  
」

「【蓮】

にしても、社っちのそれ、ラッキースケベみたいね

(°▽°)=3  
」

「【社】

何それ？」

ラッキースケベ？

言葉の言わんとする意味がわかるような、わからないような。

『【蓮】

意図せずに、よくエッチなことになったりすることよ

(「▽」\*)」

『【社】

それは呪いのろいか何か？」

『【蓮】

違うわよ。物語での話。お約束ってヤツね

(「△」)

『【蓮】

ラブコメの主人公とかは特にだけど、そういう目に遭いやすいのよね  
(。。。。)

『【蓮】

着替えを覗くのぞことになったり、目の前で着替えをしたり

(\*/ω/\*)

『蓮』

押し倒して胸揉んだり、お尻に顔を挟んだり。色々エッチなことが起こる

(/▽\)

まさしく今の僕じゃないか。

全部経験したと思うんだけど……。

『社』

でも注意すればいいんじゃないの？ ノックとかさ』

『蓮』

社っちは注意してなかったの？

(o・w・o)

うっ……。そう言われると確かに。

『社』

し、してたつもりだったよ』

確かに僕は注意していたはず。

でも、そんなこと関係なしに起こったんだよね。

「【社】

どうすれば解けるの？」

「【蓮】

だから呪いじゃないっての  
)´ε´(

「【蓮】

むしろ、体質？

o(´-`)o

体質とか言われても困るなあ。

ラッキースケベ体質とか言われてもピンと来ないし。

「【蓮】

ま、でも。着替えを覗いたところだけは、ちょっと不可解ね  
(´・`・´)

「【蓮】

社っちが幻覚を見てたわけじゃなければ、だけど  
(。・`・´)σ

う、うーん。幻覚、だったのかなあ……。

段々自信がなくなってきたぞ……。

何にせよ、風邪を引いているのであれば無理をさせるわけにもいかない。

『社』

わざわざ、ありがとうね。蓮ちゃん、お大事に』

『蓮』

しーゆーん』

とりあえず、お礼を言ってから会話を切り上げた。

にしてもラッキースケベって。

佐藤君辺りなら知っているかもしれないけど……帰って自分で調べようかな。

だれ誰かに話したら、誤解されそうだし。

それからの午後は特に何事もなく授業が終わり、僕は学校を出た。

ホッとしたけど……。

まだ家に帰るまでは安心できない。

「社」。そんなに難しい顔していると、顔が引き<sup>ひ</sup>攣<sup>つ</sup>っちゃうよー」

「……やしろ、ちょっとこわい」

金恵ちゃんと銀花ちゃんふたりが不安がっていた。

「ご、ごめん」

でも、何が起るかわからない以上、油断するのもよくないよね。

偶然か、故意か。

それはまだわからないけど、注意していればいいんだとは思うし。

すると、僕の頭がコンツと小さく叩たたかれた。

「あんま気負うな。まあ、お前がエロくても変態でも、まあいいんだよ。怪我けがさえしな

きゃ」

「黒恵ちゃん……」

なんだか黒恵ちゃんが優しい。

ちよつと涙ぐんでしまいそうだった。

でも。

「僕はエロくも変態でもないと思ってるんだけど……」

「男はみんなそうなんだろ」

「いやいやいやいやいやいやいや。それは男子高校生として否定したいんだけど。

変態じゃないよ。さすがに……」

エッチなことに興味津々なのは事実だけど。

佐藤君なんか毎日のようにエッチな動画を夜な夜な探しているらしいし。いや、僕の部屋にもエッチな本は幾つかあるけど。

かなり奥深くに。

母さんにバレたりするのも気まずいから、色々と隠している。

「つーか、なんだかんだお前ってあたしらの裸、よく見てるよな」

「ふ、不可抗力だからね?」

「反応が遅いのは気になるんだが……」

「だ、だって予想外のことばかり起こるんだもの」

それでも、僕がうっすらとでも期待していないのか? と問われれば、ちよつと疑問符が付くかもしれない。

男だったら当然と開き直るのもどうかと思うけど、見たいものは見たい。

ただ不意に覗いちゃった場合は、罪悪感の方が勝るんだよね。

罪悪感抜きに女の子の裸を見るって、結局エッチな本とか動画とか。

あるいは、恋人になる……とか?

「どうすりゃ満足して、エロくなくなるんだよ」

黒恵ちゃんは無茶を言うなあ。

「何言ってんのよ。男の子ってずっとエッチだって言うわよ」

「……むしろ、このとじてエロにキョーミなくなるほーがしんばい」

金恵ちゃんと銀花ちゃんが揃って黒恵ちゃんに反論した。

反論する余地はないんだけど、そういうことを言われるとなんだかこっちが気恥ずかしい。

「というか、エッチじゃなくなるなら、何でもするの？」

「ケースバイケースだろ。ここまでならやる、ってラインがあるはずだ」

「じゃあ、抱かれたらエッチじゃなくなるとしたら？」

「……………な、何言ってんだ、お前は!？」

「……………よーはセックス」

「アホか！ 知ってるよ、それぐらい！ だからってなんで、噓えがそれなんだ！」

「あの、皆……声大きいから……」

止めないと、もっと凄まじい話題になる気がする。

あと、せめてこういう話は僕抜きでやって欲しい……。

「はあ」

つい溜息が出てしまう。

油断していたのかもしれない。

その瞬間、僕は躓いた。思いつきり体勢が崩れてしまう。

「あわ、わっ！」

目の前には、前を歩く金恵ちゃんのスカートが！

これは間違いなく、このスカートを掴んでしまう流れだ！

僕は倒れそうな上体を無理矢理捻って、方向修正する。

これで金恵ちゃんには最悪、僕の頭が当たるぐらいで済むはず……！

「えっ」

だけど。

何かが起こった。

何が起こったのかはわからないけど。

上体を捻って、視界からも外した金恵ちゃんのスカートが目の前にあった。

捻ったはずの僕の体勢は変わっていない。

ただ、金恵ちゃんが僕の前に、まるで瞬間移動でもしてきたかのようなだった。

手を引っ込めようにももう間に合わない。

絶対に絶対に絶対にスカートを掴んだり、引っかけたりはしまいと、中途半端に曲げている指をピンと伸ばした。

しかし。

金恵ちゃんのスカートに、僕の手の平をちよつと押しつける形になる。

外れやすくなっていたのか。

その衝撃でスカートのホックは外れ、金恵ちゃんのスカートはずり下がった。目の前にはお腹と、太もものなめらかな肌色の間に、ピンク色の下着がある。金恵ちゃんは、何が起こったのかよくわからないように突っ立っていた。

「ご、ごめん！」

またなんか不思議現象が起こったけど、とにかく僕のせいなので謝る。

「も、もう社ってば……」

気を取り直した金恵ちゃんは慌ててスカートを穿き直す。

「大胆だなあ」

頬をほんのりと染めた金恵ちゃんが僕のおでこを指で突つついた。

何があだかわからない。

「社ッ！ お前、今、確実に金恵のスカートを脱がしにかかってなかったか!？」

「ご、誤解だってば……!」

でも、絶対におかしいということだけは確信した。

泉の女神は普段は池にいる。

池にいる理由は、そこが一番心地よかったからだ。

しかし今、女神は池を離れていた。

目の前にあるのはいつも変わらない、祭神の宿る御神木。

この山の木々は、御神木も含めて枯れている木が少ない。

それもまた、この祭神の御利益というものだろうか。

「まったくねえ……」

溜息のようなものを吐きながら、女神は面倒くさそうに御神木の様子を注視する。

と言っても彼女自身の姿は人には見えない。唯一、社には見えるのだが、それも社が

いない時は見えないようにしている。姿を持たない神が人に見えるようにするために

は、人の網膜に対して介入する必要がある、それは地味に力を削るのだ。

そんな彼女にとって神座木神社の御神木は居心地が悪いため、今その御神木の枝にい

るのは例外だ。

彼女がいるのは、その祭神に頼まれたからである。

正体不明の少女が、神座木神社の跡取り息子である神座木社にちよつかいをかけてきたということ、やむなく女神は御神木の監視をしているのだ。

ましてや五百野が社のいる学校にやってきたこともあり、一層離れるわけにはいかなかった。前回のような呪いをかけられたら、また面倒なことになる。

この木も含めた一帯は、非常に神の力が溢れている場。

正体不明の少女——五百野がここに来た理由も、その力を抜き取るためだったのだ。

呪いをかけさせないためにも、ここを監視し、また社を守るために彼女は居心地の悪いここにいます。

「あの女——どう考えても、あいつが放ってきた刺客なんだろうけど、アレはまだ正常に働いてるはずなんだよねえ」

独りごちた。

女神は次に空を注視する。

そして、彼女の存在が御神木から離れていった。

しばらく空に向かって上昇していると、彼女は何かにぶつかる。

それから何度かぶつかって、この街から出られないことを確認した。

それはこの街を覆うシステムが正常に働いている証拠だ。

女神は未だ、ここから出ることは叶わない。

まるでこの街に囚<sup>とら</sup>われているかのようにな。

「ま、私が出られないってことは……あいつも入れないし、ちよつかいも出せないってことだね」

残念そうな、安心したような、そんな雰囲気<sup>まど</sup>を纏<sup>まと</sup>わせ、女神は再びその存在を下へと下ろしていった。

## 第二章

2

Bokuto  
Kanojeto  
Kanojeto  
Kanojo

おかしいということを自覚しても、女神さまから見れば僕に何かをされたような形跡はやっぱりないらしい。

「特に巻き込まれてるような形跡も見えないけどねえ」

とは、女神さまの弁。

僕としては反論をしたいのだけど、何も言えなかった。

女神さまも黒恵ちゃんたちも、僕が嘘を言っているとは思っていないようだけど、理解まではしていないから対策することもできない。

むしろ、まだ話を聞いてくれるだけありがたかった。

結局は、もっと気をつけるしかないということだよね……。

「今日もあんまりいい天気じゃないわねえ」

次の日の登校中、金恵ちゃんかなえは空を見上げてしみじみと言う。

寒いし、ここ三日ほど太陽を見ていない。雲は相変わらず空を覆っている。心なしが昨日よりも暗い気がした。

最近、天氣がよくないよね。雨や雪は降らないけど……。

空氣が淀<sup>よど</sup>んでいるのか、晴天の時はここからでもはっきりと見える山に鎮座する御神木さまが霞<sup>かすみ</sup>がかったように見えなくなっている。

山の方から視線を戻して前を見ると、歩行者信号の青が点滅していた。

それなりに遅刻ギリギリの身としては渡っておきたい。

「黒恵ちゃん、信号赤に——ぐえっ」

走り出そうとしたところを黒恵ちゃんに襟<sup>えり</sup>を掴まれ、首が絞まる。

「く、黒恵ちゃん……」

「まったく、いきなり走り出すなっ。ここで待っても学校にや充分間に合うだろが」襟から手を外して僕に不機嫌そうに言ってきた。

「何も襟を掴まなくても……」

「掴みやすいんだから仕方ないだろ。そもそもただでさえ鈍くさいんだから、周りを見て行動しろよ。事故るだろ」

「黒恵つてば過保護ねー」

「……そのぐらいよかったんじゃ」

金恵ちゃんと銀花<sup>ぎんか</sup>ちゃんは呆<sup>あは</sup>れた顔をしている。

「よかねーし、過保護でもねー。大体、お前らはこいつの不運を実感してないから

「そんなことを言い合っていると、ドン！ とお腹なかに響くような音がした。少しずつ周囲も騒がしくなる。

音がした方に視線を向けると、逆側の道路で車が信号機の鉄柱に突っ込んでいた。

「おいおい……」

黒恵ちゃんが冷や汗を掻かきながら眩つぶやく。

車のフロントがボロボロになっているのが、ここからでもわかる。

幸い、エアバッグが作動していて、ドライバーは無事のようだった。車に乗っている人もドライバー以外誰だれもない。

「ねえ、今、もし黒恵が止めなかったら……」

「……あたってたかも？」

金恵ちゃんも銀花ちゃんも声が震えていた。

「……………だから言っただろ。事故るって」

黒恵ちゃんもそう言いつつ、信じられないという面持ちだ。

僕としてもゾツとする。

車側の信号が青になる瞬間に突っ込んでいた。

黒恵ちゃんが止めてなかったら、確実にあの車は僕の近くを過ぎ去ったはずだ。それ

こそ、当たってもおかしくない。

そうなれば、僕と一緒に行動していた黒恵ちゃんたちまで……。

「おいしい、事故なんて珍しいな……」

「まあ、死者が出なかったただけ不幸中の幸いだな」

周囲の誰かがそう言った。

確かに事故は珍しい。

というか、この街で事故なんて、僕が物心付いてから聞いたことがなかった。

猫が溝にはまったとか、犬が買い物したとか、そんなことが重大ニュースになるよう

な街だ。

もう一度車をよく見ると車は微かに煙を噴いている。

すぐにパトカーがやってきて、見分を始めていた。レッカー車も来ている。

「事故……か」

いつの間にか僕の肩には妖精ようせいに扮する女神さまが乗っていた。

僕以外には見えないらしいけど、ビックリする。

「……女神さま、いつのまに。何かあったんですか？」

周囲には聞こえない小さな声で聞いてみた。

「いや、別に」

しかし、女神さまは答えてくれない。

僕は遅刻のことも忘れて、暗い空の下、その事故現場に見入っていた。

事故のことは気にかかったけど、僕はそのまま登校した。

「おはよう」

「おーす、神座木」  
かんざき

さとう  
佐藤君と挨拶を交わす。

席は少し遠くなったけど、なんだかんだで話す機会は多かった。体育でもよく一緒に体操とかしてるしね。

「お前ってなんだかんだで遅刻間際に来ること多いよな」

「あはは……。そうだね」

黒恵ちゃんと金恵ちゃんが喧嘩けんかし始めると、遅くなる……とは言えないな。

それに今日の場合は事故のこともあったけど。

「そういうや、交差点で事故あったんだって？」

「よく知ってるね」

「そりゃ、すぐにWIREでメッセージも来たからな」

ネットって早いな。

だからこそ、すぐに拡散するんだろうけど。

「しかし、珍しいよな。事故なんて。隣町での事故はよく聞くけど」

「……」

佐藤君の言う通り、この街での事故は聞かない。

だからこそ、隣町の事故がよく聞こえてくるのかもしれない。

「火事もないし、殺人なんてもないし、平和な街だよな」

頬杖ほおづえについて佐藤君がしみじみと呟く。

そんな佐藤君の手をよく見ると、絆創膏ばんそうこうが貼はられていた。

「それどうしたの？」

「ああ、これ？ ちょっと昨日、有刺鉄線に引っかけてな」

「有刺鉄線って……」

「落とし物を拾いに仕方なくだよ」

どういう状況だったんだ。

佐藤君は「男にはやらねばならぬことがある」とか言ってるけど……。いや、何も言うまい。

「うひい、酷ひどい目に遭った」

猪之頭君<sup>いのかしら</sup>が慌てた様子で教室に入ってくる。

よく猪之頭君とつるんでいる友人たちがどうしたと笑いながら聞いていた。

「<sup>はと</sup>鳩の大群に襲われた」

猪之頭君の顔は大マジだった。

「うわ、ホントだ。背中にフンがいっぱいついてる」

「マジで!？」

「きったねーな、さっさと洗ってこいよ!」

猪之頭君は教室から追い出される。

「鳥のフンとは……猪之頭のやつもついてないな」

「そうだねえ」

何か今日に限って、皆にトラブルが多い気がする。

少しだけ胸騒ぎがした。

僕の胸騒ぎをよそに、今日の授業はすべて終わった。

トラブルが多いと思ったのは朝だけで、以降特にトラブルは僕の観測範囲では起こっていない。

僕の思い過ごしだったのかな？

「やつしろー。早くかーえろ」

「あ、うん。ちょっと待って、金恵ちゃん」

もう黒恵ちゃんも銀花ちゃんも帰り支度を済ませていた。

「おせーぞ」

「ご、ごめん……」

一緒に教室を出て下校する。

そして、朝にあった事故現場を通り過ぎた。

「もう全部、終わったみたいね」

「そりゃ、邪魔になるだろうしな」

金恵ちゃんと黒恵ちゃんが、他愛のない話をする。

「……きょうはみように車が少ない」

「そういえばそうだね」

銀花ちゃんの言葉で僕も気付いた。

いつもは何台も通るここの交差点の車がとても少ない。

「ああ、なんかこの街の西橋と東橋が一部崩れたとかで、緊急封鎖したみたいよ。老朽化してたのかなんとか」

「え、そうなの、金恵ちゃん」

「うん、お昼の時に友だちから聞いたけど。車が少ないのは、その橋が通れないせいじゃないかな?」

そうだったのか。

「ど、どれだけの被害だったの?」

「んー。わたしも又聞きになるけど、特に死者とか重傷者がいるわけじゃないみたいよ。崩れてすぐに通行止めになったらしいし」

「そ、そっか……」

それなら、まだよかったのか。

もし、一部崩れただけでなく、崩落してたら大惨事だったはずだ。

車ごと川に落ちたら、運がよくないと助からないだろうし。

「ホント、今日はトラブルまみれっばいな」

黒恵ちゃんが溜息ためいきを吐く。

「そんなにトラブルあったの?」

「あたしも、友だちからの又聞きだけど。蛇口から水が出ないとか、化学室で硫酸の瓶が割れたとか、体育倉庫に閉じ込められたとか、色々あったらしいぞ」

僕が知らないだけで、そんなにいっぱいあったんだ……。

大きな怪我をした人がいなくて何よりだけど。

佐藤君も猪之頭君もトラブルに見舞われてたし……。

事故が妙に集中するのは偶然なのかな？

今までにあまりないことだから、その辺りはよくわからない……。

「お前もちゃんと注意しろよ。特にお前は不運を招きやすいしな」

「う、うん。気をつけるよ」

そんなことを話しながら、僕と黒恵ちゃんたちは別れて帰宅した。

帰ると、父さんが疲れ切った顔をしていた。

「まったく看板が落ちるわ、参拝客が転んで病院に直行するわ、なんかヤクザが来るわ、なんだったんだ」

「そんなにいっぱいトラブルが？」

「隣のヤクザ……だと思っただがな、あの風体は。なんで戦勝祈願を頼んできたんだか。断ると凄んでくるし、危うく警察沙汰だ」

「お、お疲れ様でした……」

「今日は厄日か」

父さんの愚痴は珍しかった。

僕はまた胸騒ぎを覚えたまま、妙な疲れを感じて、そのまま寝た。



何か妙に身体が重い。

何かが僕の上に乗っかっているような、そんな感じだ。

その上、何か妙に暑い。

たつぷりと寝汗をかいている気がする。

気怠い<sup>けだる</sup>自覚を持ったまま、僕は目を開け——目を疑った。

視界を肌色が覆っている。

僕の上に銀花ちゃんが乗っていた。

そして、僕の左隣に金恵ちゃん。

右隣には黒恵ちゃんだ。

揃いも揃って下着姿である。

白で揃えられた下着と肌色の前衛芸術が目の前に描かれていた。

こんな状況にも拘わらず<sup>かか</sup>、彼女たちはすーすーと気持ちよさそうに寝息を立てていた。

銀花ちゃんなんか「むにやむにや」言っている。

「うわあああああああああああああああああああああああああああああああ  
!？」

なんだ？

なんだこれは？

周囲を見回す。

どう考えても僕の部屋だ。

落ちてこうにも、脳内の混乱が収まらない。

思い出せ。

昨日、僕はひとりで寝たはず。

それがなんでこんな退廃的なことに!？」

「……おー、やしろ、おはよー。よくねむれた？」

銀花ちゃんが目を覚ました。

まだちょっと眠そうで、目が閉じかけている。

「ぎ、銀花ちゃん、なんで、ここに？」

「……んー？ いっしょにねたから？」

だけど、それより問題なのは。

銀花ちゃんがこの状況にまったく動じていないことだ。

以前、家に泊まった時も銀花ちゃんは僕の布団の中に潜り込んでいたけど。

だからといって、その中に金恵ちゃんや黒恵ちゃんもいればおかしいと思うだろう。

「んー、どしたのー」

金恵ちゃんも目を覚ます。

上半身を起こすと、その胸がゆさゆさ揺れた。

ポリウムありすぎで、朝から目の毒だ。

下半身に血が溜<sup>た</sup>まるのを、理性で抑える。

「おはよ、社<sup>やしろ</sup>。よく眠れたかな？」

金恵ちゃんもまるで動じていない。

ここにいることも。

下着姿なのも。

「……かなえ、ねぞー悪すぎ。けられていたい……」

「あー、ごめんごめん。とはいえ、寝相は難しいわよ」

そんな、普段からしているような会話をしていると、ようやく僕の右隣に寝ていた黒

恵ちゃんが起き上がる。

寝起きのせいか、黒髪がほさほさだ。

「あーもー、うっせーぞ。お前ら、人が気持ちよく寝てるのに」

そして、黒恵ちゃんもまた……この状況を受け入れていた。

間違いなく騒ぐと思ったのに。

「ん？ どうしたんだ、社。朝から渋い顔しやがって」

黒恵ちゃんが僕に右手を近づけてきて、軽くデコピン。

「起きたんだったら、目え覚ませよ」

それだけで終わってしまった。

「え、えっと……つかぬ事を聞きたいんだけど」

「ん？」

三者三様、首を傾げられた。

「何でこんなことになってるの？」

恐る恐る尋ねると、

「そーいや、なんでだっけ？」

「んー……よく覚えてないなー」

「……そうしたいから？」

皆、答えが曖昧だ。

こうなったことを覚えていない。

でも、この状況に違和感は抱いていないんだ。

なんで？ 意味がわからない。

三人はのっそりと立ち上がって、傍に畳んであった制服に着替える。僕の目の前で。

何がどうなってるんだ？

「社、着替えさせてあげよつか？」

金恵ちゃんのそんな台詞に僕は乾いた笑いを返して、すぐに部屋を出て着替えが終わるのを待った。

着替えて下に行った黒恵ちゃんたちを見送って、僕は部屋の中に留まっていた。

下では「おはようございます」と金恵ちゃんたちが挨拶あいさつしており、母さんも父さんも機嫌きげん好さそうにそれに答えている声が聞こえる。

母さんも父さんも、まったく動揺していない。

昨日、泊まりに来たということになっているようだった。

「どう考えてもおかしいですね？」

「いや、特には……」

目の前の女神さまに強く訴えたものの、首を傾げられるだけで終わってしまう。

「い、いや、特にはって……。僕と黒恵ちゃんたちが寝てたんですよ!? 絶対おかしいでしょう」

「状況に多少の違和感は覚えるけど、あんたの中に何かされた形跡ってまるでないし」

「何かに巻き込まれてるんじゃないや……?」

「どうなんだろうねえ。少なくとも昨日今日で力が放出された気配は感じなかったけど」

「というか、僕昨日ひとりで寝たはずなんですよ!」

「いや、そこまでは知らないわよ」

ダメだ。

話を通じない。

まるで僕が一人相撲を取っているみたいだ。

いや、話を通じないのは黒恵ちゃんたちも同じ。

僕からすればこの状況は明らかにおかしいのに、僕以外はそれが自然だと受け入れてしまっている。

洗脳か何かされているのだろうか……。

「ただ」

首を傾げたまま、女神さまがつぶや呟く。

「ただ？」

「あんたの不幸、妙に減ってきてるわね」

「……不幸が減ってる？」

「ま、そうね。幸せになってるってこと。どういふことかしら」

女神さまが何を言っているのか、僕が知りたい。

不幸でないのはいいことだけど、今はそれよりもこの状況だ。

だけど、女神さまはそうは思っていないようで、睨むような表情で窓の外を見ていた。

「どうしたんです？」

「いや……なんでもないよ」

なんでもないとは思えない顔なんだけど……。

「社―。御飯できたよ―」

下から金恵ちゃんが呼ぶ声がした。

「ほら、行ってきなさい。私はちよつと調べ物があるから」

女神さまは窓の外から飛び立っていく。

僕はそれを見送ってから、居間に向かった。

まるで別世界に囚<sup>とら</sup>われたような不安を抱きながら、僕らは学校へ向かう。

いや、別世界なわけがない。

何も変わっていないのだから。

昨日から天気が変わっているわけでもないし。

父さんも母さんも、まったく変わっていない。

黒恵ちゃんも金恵ちゃんも銀花ちゃんも、妙なことがあっても雰囲気や関係は今までと同じなままだ。

昨日起こったこともちゃんと覚えている。

僕が覚えている内容とまったく変わらない。

「……ったく。社、お前、強張<sup>こわば</sup>った顔してるな」

「そ、そうかな？」

「もうちょっと気楽にしてろよ」

すると、黒恵ちゃんは両手で僕の頬<sup>ほお</sup>を摘<sup>つま</sup>んで引<sup>ひ</sup>っ張<sup>ひ</sup>る。

「ひよ、ひよっと！ ふおえひゃん！」

「相変<sup>あひ</sup>わらず、頬柔<sup>ほ</sup>らかいな、お前……」

半分目を閉じた黒恵ちゃんに、引<sup>ひ</sup>っ張<sup>ひ</sup>り続<sup>つづ</sup>けられた。

「もう！ 何羨ましいことしてるの？」

「……ぎんかも、ひっぱってみたい」

「ひよ、ひよっと！」

金恵ちゃんに銀花ちゃんが、黒恵ちゃんの身体からだを押しつけて僕のほっぺを引っ張ろうとする。

う、うん。やっぱり、変わらないよね。大して……。

そんなやり取りをしながら、通学路の途中にある交番の前を通る。

昨日の事故件数が十件……とあった。

今まで、ずっとゼロ件だったのに……。

「……いきなり事故が増えたな」

「そうね。昨日の事故も含まれてるんだろうけど」

「……きをつけないと」

予感がある。

何かが変わっていくような、そんな予感だ。

確証があるわけでもない。言うなれば、ただの当てずっぽう。

だというのに、心は不安でいっぱいだ。

でも、その不安の正体がわからない。

そんな気持ちになったまま教室に着いてしまい、僕らはそれぞれの席に散って先生が来るのを待つ。

その間に僕の近くで女子たちの会話が聞こえてきた。

「ねえねえ、聞いた？」

他愛のない噂話うわさばなしのようだ。

「口裂け女が出たって！」

怪談の季節ではないのに、彼女たちは楽しそうだ。

「えー。怪しいなー。で、どうなったの？」

「あのね。対処法を間違えて……殺されちゃったんだって！」

「あははは！ あーあー。恋人にはなれなかったかー」

本当に他愛のない噂話のはずなのだ。

だというのに、心に妙に刺さる。

というか、この街の怪談で殺されたとか、そんな物騒な話が何で出てきてるんだろ

う？

……いや、違う。

口裂け女の怪談は対処法を間違えたら殺されることの方が正しい。

だけど、この街だと恋人になる結末に至るはずなのだ。

「……………」

そこまで考えて首を振った。

都市伝説であり、ただの怪談だ。

本気で捉えてどうする。

話をしていた彼女たちだって、信じちゃいないだろう。

でも……。

ちよつと蓮ちゃんに話を聞いた方がいいかもしれないな。

興味深い話が聞けるかもしれない。

授業が進み、お昼の休み時間。

黒恵ちゃんたちとお弁当を食べながら僕はスマホを取り出した。

金恵ちゃんが興味ありそうに覗き込んでくる。

「ねえ、社。さつきから何やってるの?」

「う、うん。ちよつと調べ物を」

まあ、見られて困るものでもないけど。

僕はさつきから、この街の都市伝説を軽く調べていた。

うちの街に絞るのはなかなか難しかったけど、それでも今までは変わっている。ほとんどの都市伝説からハッピーエンドが消え失せていた。

大体は蓮ちゃんに聞いたような、うちの街以外の都市伝説と大差がない。

むしろ、酷ひどくなっているのもあった。

遭難した大学生と幻の五人目の話なんか、惨殺死体が見つかったとか書かれているし、なんだこれ……。

「ういーっす」

お弁当を半分ぐらい食べ終わったところで、蓮ちゃんがやってきた。

普段通りの白衣姿。ただ、いつもに比べてちょっと気怠けだるそうだった。

いつもなら、突撃するように向かってくるのに。

「蓮ちゃん、もしかして元気ない？」

「あー……ちよっとまだ風邪っぽいのが長引いているのかもしれないんだよねえ。だつるー……」

「感染うつすなよ」

黒恵ちゃん、容赦ない。

「もうちよっと労いたわってよねー。そもそも、私は社いたわつちに呼ばれてきたんだから」

「……やしろが？」

銀花が首を傾げた。不思議そうな顔だ。

まあ、僕から蓮ちゃんを呼ぶことってあんまりないからね。

大体、呼ばなくても蓮ちゃんの方から来ることが多いし。

今日は出席してることだったから、ちょっと来てもらったのだ。

「う、うん。体調悪いのにごめんね、蓮ちゃん」

「いいってことよ。都市伝説のことだしね」

すると、今度は金恵ちゃんが眉まゆを顰める。

「なんで都市伝説？」

まあ、ここで黙っていても仕方ないよね。

何かしら疑問に思っていることは伝えておかないと。

「なんというか、昨日辺りからちよつと不思議なんだよね。事故が起こったりして」

「いや、事故ぐらいふつー起きるだろ」

黒恵ちゃんがバツサリと言ってくる。

でも、それがおかしいのだ。

「そう。本来なら起こるはずなんだけど……これまでこの街って事故が起こってないんだよね。今まで意識が向かなかったけど」

僕がそう言うと、黒恵ちゃんたちは首を傾げた。

「……そうね。ここ数年、事故件数はゼロよ」

「でも、問題はそれだけじゃないんだ。今、この街の都市伝説や怪談にも変化が起きているんだよ」

そして、僕はスマホを見せたりして、バッドエンドになっている怪談や都市伝説を説明する。

「普通に戻ったってことかしら……？」

さすがに蓮ちゃんも僕と同じで、相当不思議に思っているようだった。

ただ、黒恵ちゃんたちはあまりピンときていないらしい。

そもそも都市伝説や怪談をそこまで調べていないからかもしれないけど……。

僕の異常。

事故の多発。

そして、この現象がどうしても僕の中で結びついてしまう。

偶然と片付けるのは簡単だし、楽だけど……。

「異常ではあるけど……だからこそ、ふとした瞬間に戻ってもおかしくはないんじゃないかない？」

蓮ちゃんが素っ気なくそう言う。

今までの蓮ちゃんなら、真っ先に「不思議ね！　どういうことかしら!？」とか言っ

てきそうなのに……。

風邪で怠い<sup>だる</sup>からだろうか。

事実、あんまり顔色もよくない。

「蓮ちゃん。保健室に行った方がいいんじゃない？ それか早退するか……」

「んー……そうするわ。ちょっとマジで微妙になってきた。無理して出てくるんじゃないかなー……」

「……れん、だいじょうぶ？」

「キツいなら付き添うよー」

「大袈裟<sup>おおげさ</sup>ねえ。そこまでじゃないから安心しなさいな」

白衣をはためかせるような余裕もないように、蓮ちゃんは身体を引き摺<sup>ひず</sup>るように教室を出て行った。

「あいつでも風邪引くんだな」

「そりゃ引くでしょ……。何だと思ってるのさ」

確かに風邪を引いたところを見たのは初めてだ。

「ほら、馬鹿<sup>ばか</sup>は風邪引かないって言うし」

「黒恵に言われるのは我慢ならないんじゃない」

黒恵ちゃんと金恵ちゃんが、またも口喧嘩<sup>くちげんか</sup>を始める。

溜息を吐きながら残りのお弁当を片そうとして――。

「きゃ――っ！　だ、大丈夫!?」

悲鳴が響く。

ただ事じゃない声だった。ざわつきが廊下から広がっていく。

教室から僕たちを含めた生徒が出て行った。

皆が集まっている方向へ向かう。

そして、階段の踊り場で目を疑うような光景が見えた。

蓮ちゃんが踊り場でぐったりと倒れている。

身動きひとつしなかった。

それよりも何よりも。

頭からは一筋の赤い線が、後頭部から首、鎖骨へと流れている。

それは明らかに血だった。

ざわつきは収まらない。

僕はそんな蓮ちゃんの姿を見て、情けなくも硬直してしまった。

蓮ちゃんはすぐに救急車で運ばれた。

意識はなかったけど外傷は小さかったようで、見た目ほど大きな怪我ではなかったらしい。

それに救急車に乗る頃には、微かに意識もあって喋っていたという話だ。

「蓮のヤツ、階段から落ちるとか気を抜きすぎだろ」

そう言いつつも、黒恵ちゃんの表情は心配そうだ。

「と言っても、現場を見た人は白い髪を見たって言ってるよね？」

金恵ちゃんの言葉に、僕は身体が震えてしまった。

「白い髪って……銀花ちゃんと一緒にいたから抜くとして、五百野さんしか」

「あいつが階段から落としたってのか？」

「そこまでは言わないわ。証拠もないし。ただ、その場からなんでもなくなったのかは……。それに見間違いかもしいって、見た人も言ってるし」

五百野さんが現場にいた……？

そこまでするような子じゃないって思っていたけど。

いや、金恵ちゃんも言っているし、僕からすれば又聞き之又聞きで、証拠はないんだ。早合点はよくない。

「……それよりも蓮ちゃんは大丈夫かな」

怪我が小さくても、後遺症だって考えられる。

階段から落ちて、壁に頭を打ったってことだし……心配だ。

「……きつと、だいじょうぶ」

銀花ちゃんが励ますように僕の肩をぽんぽんと叩いてくれる。

「ねえ、社」

「ん？ 金恵ちゃん、どうかした？」

「もしかして、蓮が怪我したのを……自分のせいだと思ってる？」

言い当てられてドキリとした。

実際、その通りだ。

もし、僕が蓮ちゃんを呼んでいなければ。

あるいは保健室に行くことを勧めなければ。

こんなことは起こらなかったわけだし。

「それは違うよ、社。これは不幸な事故だったただだからね？」

「でも……」

すると、金恵ちゃんはむすっとした顔で僕の頬ほおに手を伸ばしてきた。

「ああ、ホント社のほっぺって癖になりそう……」

「ひよ、ひよっと！ はなへひゃん！」

すぐに金恵ちゃんの表情が穏やかになる。

「そんなに重く考えないこと。偶然が重なっただけなんだから」  
金恵ちゃん的には、今のは罰だったようだ。

指を立てて、叱るしかるように言ってくる。

「う、うん」

僕としてはもやもやするけど。

今は金恵ちゃんの言葉を心の拠り所よこしろにしたい……。

帰って部屋に戻ると、女神さまが僕の机であぐらを掻かいていた。

目を瞑つぶってどっしりと座っている。

瞑想めいそうってわけじゃなさそうだけど……。

「戻ってきたね」

片目を開けて、女神さまを僕を見据えてくる。

怒っているような……いや、どちらかといえば困惑だろうか。

そんな感情が垣間かいま見える。

いつも余裕な表情を浮かべている女神さまにしては、とても珍しい。

「昨日、今日、学校で起こったことを教えてくれない？」

「え？……なんで？」

「なんでも」

有無を言わせない口調だったので、僕は女神さまに伝えた。

学校に行く前に事故が起こったこと。

怪談や都市伝説が変化したこと。

またラッキースケベみたいな現象が起きたこと。

そして、蓮ちゃんが怪我をしたこと。

「……チッ」

女神さまは表に出せないような不機嫌顔で舌打ちした。

女神さまらしからぬ顔だった。

宗教なら信仰が薄れそうだ……。

「何か失礼なことを考えてない？」

「い、いえ、そんなことは……」

咄嗟とつさに誤魔化したけど、何かバレてそう。

だけど、特に追及はしてこなかった。

「はあ……」

代わりに、重そうな溜息をひとつ吐く。

「どうしたんですか？」

「……街の結界が決壊しかねないんだよ、このままじゃ」

それがただのダジャレではないことは、女神さまの表情からすぐにわかった。でも、結界って……なんだ？

「あの、結界って？」

「……なんでもないよ」

「な、なんでもないってことはないでしょう？」

女神さまは腕を組んで天井を仰ぐ。

「今の結界は、まあ、ちよつとアレね。悪い神をこの街に入れないための結界ね」

「そんなものがあるんですか？」

「この街——尾敷おのしきに限らず、大なり小なりどこにでもあるさ。神社だってそういう役目を担っていることは多い。祭祀儀礼だって、祀られてる神の保つ結界の強化だったりするしね。まあ、結界の効果は場所によって様々だけど」

神社なんて全国に一杯あるけど本当だろうか？　いまいちピンと来ない。

いや、でも女神さまの言っていることだしなあ。

「それに悪い神さまって？」

「世の中にや時たまいるんだよ。自覚のないバカな神つてのがね。そして、それが正しいと思ってる」

女神さまはまるで自嘲するように笑う。

「僕に聞いたことと、何か関係があるんですか？」

「ま、ちよつとね」

そして、女神さまはそれ以上を語ろうとしない。

結局、重要なことはわかったけど、大事なことはわからず仕舞いだった。

女神さまの話はわからないまま夜が来る。

僕は忘れていた御神木さまの掃除をするために外に出た。

いつも通り、<sup>ほうき</sup>箒とちり取り、そして葉っぱを入れるためのビニール袋を手を持ち、山

へと入る。

すっかり日も暮れているせいか、階段とその周辺が暗い。

この辺りはまったく光が届かないしね。

月明かりもここまでは届かない。

葉っぱの屋根が遮っていた。

今日も空をずっと雲が覆っていたせいか、一層暗く感じる。

別に目を瞑っていても御神木さまのところまでは行けるけど……。

やっぱり周囲が暗いと、夜の山道は不気味なことは否めない。

「はろー」

そんな雰囲気にもすぐわかない明るい声。

階段の先に、すうっと赤い影が浮かび上がる。

赤い私服に身を包んだ五百野さんだ。

最近はずっと制服姿しか見ていなかったから、こうして見てるとホントに彼女は赤い。

そして、その赤の中に映える髪の毛の白。

周囲が暗闇だというのに、彼女だけがそれに負けないぐらい存在感が強かった。

その存在をはっきりと浮き彫りにしている。

「……もう君がどこにいても驚かないけど、何をしに来たの？」

いつでも逃げ出せるように少し構えた。

「あははっ。信用ないなあ」

「前に君がやったことを思い出せば、信用なんてできないんだけど」

「それでも、私は社のためを思っただけなんだよなあ」

「だとしたら、もうちょっと僕の意図を汲んで欲しかったなあ……」

彼女の幸せが、僕の幸せとは限らないんだから。

「でも、このままじゃ社は病んでいっちゃう」

「え……」

僕が何かを問う前に、彼女は続けて語る。

「今日、蓮が階段から落ちたでしょ？」

「っ!? あれ、まさか君が……!」

「えー、何言ってるのー?」

何がおかしいのか五百野さんは笑う。

そして、

「落としたのは、社だよ?」

と、囁くように言った。

……落としたのは僕?

「た、確かに僕が保健室に行った方がいいって言ったからか……」

「違う違う。そんな言葉の結果じゃない。それどころか、蓮のことだけじゃない。ここ数日に起きてる事故も、都市伝説や怪談がバッドエンドになるのも。全部、社のせいなんだよね」

「……は？」

何を言ってるんだ、五百野さんは？

いくら何でも納得できない。

「何を——」

僕の声を閉ざすように、五百野さんが声を被せてくる。

喋る必要はない、と言わんばかりに。

「あのね。社には呪いがかかっているんだよ」

「それは君が——」

「私のかけた呪いじゃない。それは社が生まれた時からかかっている呪いなんだよ。私には干渉すらできない、強い呪い」

な、なんだよ、呪いって……！

しかも、生まれた時から！

いきなりそんなこと言われても、理解すらできない。

「社は、不幸だっと思って思ったことはない？」

僕の心中などおかまいなしに、五百野さんは矢継ぎ早に語る。

「人よりも不幸で、人よりも非運で、周囲を巻き込む怪我をする、とか——」

それは思い当たらないわけじゃない。

僕は人よりも少しは不幸なんじゃないかという自覚はある。

でも、大して気にはなっていない。

「まあ、自覚症状は薄いかもね？ 黒恵がバランサーになってるし」

「……僕には君の言ってることが、何ひとつわからない。もう少しわかるように言っ  
て欲しい」

「うーん、じゃあ、端的に言っちゃおう」

五百野さんは指を立てて、まるで授業でもする先生のようなポーズを取った。

「社は街のための人身御供になってるんだよ」

さらにとんでもないことを言い始める。

人身御供？

僕が？

そんな自覚、僕にはまったくない。

「もつと意味がわからないよ」

「社の不幸と、街の幸福てんげんって天秤てんびんになってるんだよね。社が不幸になればなるほど、この街は幸福になる。事故も起きないし、怪談や都市伝説すらハッピーってわけ。逆に幸福になれば……その逆。結果はご覧の通り」

「……今の僕が幸せだっていうの？」

「そりゃあね。三人とは仲良くしてるみたいだし、ちょっとエッチなことしてるみたいだし、少なくとも不幸ではないでしょ？」

言ってることが支離滅裂だと思う。

嘘だと、はっきりと言ってやりたい。

「男の子って単純だよ。女の子と仲良くできるだけで幸せになれるみたいだし」  
でも、なぜか。

僕の口はそう動いてはくれなかった。

「女神は言ってなかった？ この街を覆う結界について」

「……………」

「『福音機構』。それがこの街を覆う結界の名前。まあ、名前なんてどうでもいいんだ。ただ、社を不幸にすることで、この街は幸福になるってこと。そして、それでこの街は成り立ってる」

「……………」

「で、社が幸福になったことで、事故が起こりやすくなり——ううん、はっきり言えば、街は不幸に侵される。蓮が階段から落ちたのも、それが原因。この街の不幸が、すべて社のせいってわけ」

「…………嘘だ」

「嘘じゃない」

「なんでそんなことが!? 僕はただの高校生で——」

「そうだねー。でも、恨むなら血筋を恨んだ方がいいんじゃない? 御神木を崇める<sup>あが</sup>なんていう神社の跡取りになったことを」

「え……」

「社の不幸を溜<sup>た</sup>めることで得をする連中がいるんじゃない? 私はそこまで詳しく知らないけど」

すると、五百野さんは階段を上っていく。

「もうちょつと詳しい話は、上でやろ?」

その視線は、階段の上——。

つまり、御神木さまのところだ。

暗闇に浮かぶ五百野さんの赤がずっと消えていく。

「……僕は……」

少し悩んだ末に、僕は彼女を追いかけた。

暗い暗い闇<sup>やみ</sup>の中、迷わずに階段を上がっていく。

階段を上りきると、巨大な御神木さまの下に彼女は立っていた。

上がつてきた僕を見て、にこりと笑う。

「最初から話すけど、時間は大丈夫？」

「……大丈夫だよ」

「さて、じゃあ……。これはこの街の歴史ってことになるのかな」

そして、五百野さんにより、この街の歴史が語られる――。

「昔……と言っても十年とか二十年とかじゃなくて、千年以上前の話」

いつもの話し方とは違う、真面目な口調だ。

「不幸な神様がいたの」

「不幸な、神様？」

「そ。いわゆる疫病神って言われる類の神様」

神様。

以前の自分だったら鼻で笑っただろう。

そんな単語を、御神木さまや泉の女神さまが原因で、今はそれを笑い飛ばすことはできなかった。

それに彼女の真に迫った口調は、そうじゃなかったとしても信じたかもしれない。

「その不幸の神様は不幸を周囲に撒き散らすことで嫌われ……出雲を追いつけられた。それを受け入れたのが、この街の神様」

「まさか――」

僕の言葉を遮って、五百野さんは続ける。

「この街の神様はどうにかして、その不幸を撒き散らす性質を抑えたかったの。同情したのか、利用をしたかったのか、それは私の記憶にはないけど……」

「それで、どうなったの？」

「その後この街の神だけでは上手うまくいかなかった。色々な災害が発生したみたいだね。

記録に残っていないような災害も多いと思うよ」

「……不幸を抑えきれなかったの？」



「そういうことね」

そう語る五百野さんの目は無感情で、なんの感慨も湧いていないように見える。

「それで……どうなったの？」

「この街の神様は、自分の信者を使った」

「……使った？」

「自分の信者から少しずつ幸福を吸い取って……信者を不幸にして、不幸の神様の不幸を中和した。その吸い取った幸福を媒体に結界を張って、仮に不幸の神様の不幸が漏れても街中で留められるようにした」

それが女神さまが言っていた結界ということだろう。

不幸を、幸福で中和ということか？

「不幸、幸福。曖昧な概念だし、人の意識によっても変わってくる。人によつては、不幸に思えるかもしれないものを求めることはあっても、幸福を求める。不幸になりたいと願って、それが叶ったとしたらそれが幸福——だって思わない？ だから、人は幸福を求める」

「じゃあ、この街で事故が起こったりせず、怪談や都市伝説がおかしいのは……」

「全部、その結界の余波ってことね。多くの人は不幸な結末なんか見たくない。幸福な結末が見たい。パッドエンドなんて作り物でならまだしも、自分自身の結末がパッドエ

ンドになんてなつてほしくない。まあ、世の中変わり者が多いからそういう人もいるかもしれないけど……少数でしょ？」

皆が幸福でありたい。

自分も。

周囲も。

物語でさえ。

ハッピーエンドであつてほしいと願っている人が多いということだろう。

自分が幸福であつても、周囲が不幸であれば罪悪感が生じる人がほとんどだ。

「変な喩え<sup>たと</sup>えだけど、葬式やつてる隣で結婚式をやりたいと思うような人はいないわ」  
結界は人を幸福にするというものではなく。

すべての人を幸福というものに導く結界ということだろう。

そして今。

その結界が壊れようとしている、ということなのか。

「さて。さつきから話に出てるこの街の神様が——」

五百野さんは御神木さまに近づき、その幹に右手を添える。

「この御神木。結界を作ったことで……力がなくなつてほとんど寝っぱなしだけど」

「御神木さまが、この街の……」

「さて、ここでおかしいと思うてくれないと困るんだけど。どう？」

五百野さんがクイズでも出すかのように言ってくる。

「そう、だね。さっき、五百野さんは信者って言ったけど……この御神木さまや神社に、信者はいない」

何となく来てる人はいえると思うけど、それは信者というわけじゃない。

ただの参拝客に過ぎないはずだ。

「正解。少しずつとはいえ、幸福を吸い取って不幸にする神様なんて信仰するわけないじゃん？　神様は……人に救いをもたらすものよ」

「……」

「で、信者が少なくなれば、結果を維持するためにひとりひとりが吸い取られる幸福量はどんどん増えていく。それが最終的に、維持するのは神座木神社の跡継ぎ……今だと社に集中することになった」

「僕、に？」

「そう。社が不幸なのは……そのせいだよ。この結果は社ひとりを不幸に導かせ、この街の皆を幸福に導く結果」

今まで僕が人に比べて、少し不幸だと思ってたのは。

僕が不幸なのは。

その結界を維持するため？

「この結界の力が弱まると、不幸の神様の力を抑えられずに、この街の皆が不幸に導かれてしまうわけ」

五百野さんがパンと柏手かしわでを打った。

ほんやりと考えていた僕の意識が、現実の世界へと引き戻される。

「というわけで、昔話はお終しまい」

五百野さんは御神木さまから離れて、僕に近づいてくる。

呼吸が触れ合うほどすぐ近くに……。

「だから……社には今、選択肢がふたつ」

「選択肢？」

「自分を犠牲にして、街を幸せにしていきたい？」

つまり、このまま、ということだ。

「それとも、自分が幸せになって、街を——黒恵たちを不幸にしたい？」

僕が不幸になれば、街は幸せになる。

事故は起こらず怪談は変になるけど……悲しむような人はいなくなる。

だけど——僕が幸福になれば、街が不幸になる。

事故が起きて、怪談は元通り……。

「どんどんと社が幸せになった分、しわ寄せは周囲に行く。今日の蓮みたいに。ううん、彼女はまだ結果が残ってたから幸運だったかも」

ビクリとする。

命に別状がなかったとはいえ……それは結果がまだ働いているからかもしれない。

「結果が……なくなったら……」

「当然、皆不幸になる。あ、この街だけじゃすまないかも。元々は周囲に被害を出さないために結果を作ったわけだし。」

でも、でも。

もし、結果が働いてなかったら蓮ちゃんは……。

「もし、結果がなくなったら……。社がもっとこのまま幸せになってたら、蓮は死んだかも?」

「……五百野さん。君は、結果を破壊するために……僕を幸せにしようとしてるの?」

「違うよ。私は結果に干渉しない幸福を与えたかっただけ。社にハッピーエンドを見せたかっただけ。社だけのハッピーエンドを——」

「僕だけの、ハッピーエンド?」

「社」

五百野さんはさらに近づいてくる。

僕の肩に顎あごを乗せて、身体からだを密着みせさせてきた。

「実を言うかね。選択肢はふたつじゃない」

甘い声。

甘い匂におい。

委ゆだねてしまいそうなほど、怖い空気が纏まとわり付く。

でも、それを撥はね除のけることはできなかった。

五百野さんが小さく囁ささやく。

「社も街も幸せになれる世界があるんだよ」

と僕の耳に囁いた。

「え……?」

「素敵だんでしょう? 誰も不幸にならない。これが私の出した結論」

「誰も不幸にならない、世界?」

「社も幸福で、黒恵たちも幸福で、もちろん街の皆も幸福。そんな素晴らしい世界を、私は社に見せることができるの」

「そんな、ものが――」

信じちゃいけない。

そう思っているはずなのに。

彼女の言葉を信じたくなってしまうている。

「さあ」

耳から入る五百野さんの言葉は、僕の考えをねじ曲げるように甘く。

あらが抗うことができないほど、強烈で――。

「幸せになろう」

そして、五百野さんは僕の腕を掴んだ。



ある冬の日。

濃い霧に覆われた街は、曇天を張り付けていた。

僕は学校に向かっている。

なぜかわからないが、暗い天気とは正反対にとっても清々<sup>すがすが</sup>しい気持ちだった。

後ろからとつとつと、と軽快な足音が耳に届く。

「おう、社」

「いたっ！」

バンバンと背中を叩かれた。

横から制服姿の黒恵ちゃんがすっと出てくる。

「お、おはよう、黒恵ちゃん」

「ん、おはよう。……顔色悪くねーか？」

「え、そう？」

「ま、そこまで酷くはなさそうだけどな」

そして、黒恵ちゃんがちよつとだけ笑みを浮かべる。

「体調悪くなったらすぐに言えよ」

「うん。ありがとう」

黒恵ちゃんは優しい。

気が強くて、ちよつと乱暴だけど……でも、優しい僕の幼馴染み。

だけど、なんだろう。

少しだけ心に残る違和感がある。

大事なことを、忘れているような――。

「おい、時間少しヤバくね？」

そう言われて、僕はスマートフォンの時計を見る。

確かに少し危険な時間帯になっていた。

「ほら、走るぞ」

黒恵ちゃんが僕の腕を掴む。

ごく自然に。

まるでいつもやっていることみたいに。

「うん」

だから、僕も受け入れる。

そして、黒恵ちゃんに引っ張られるようにして、僕は走った。

今日も始まる。

幸せな一日が。

そして、一日が終わり。

また幸せな一日が始まる。

今日は十二月十八日。

次の日になっても。

日付が変わっていないことにも気付かないまま……。

幸せな世界は続くのだ。

この街を覆う結界は、神を妨げる。

しかし、存在の行き来が妨げられるだけで、意思だけであれば疎通は可能だった。もつとも、そもそもこの街に入ろうとする者などほとんどいなかったし、出る者もない。

この街は本来、祭神だけで完結していたのだ。

それが変わったのは、遥<sup>はる</sup>か昔。

それ以来、この街にいる女神は例外的な異物とも言える。

「やっぱり、ちよつかいかけてやがったか、あんた」

そして、神を阻む結界を挟み、女神の前にいるのは——出雲<sup>いずも</sup>の石柱。

この街に入ろうとしている、神である。

女神は、その石柱と対峙<sup>たいじ</sup>した。

「……で、何しに来た」

その神は声を出さない。

ただただ、自分の意思を女神に訴えるだけだ。

「余計な御世話だよ。別にこの現状を私は嫌だと思っちゃいないし。少し不便だとは思ってるし、社には悪いと思ってるけどね」

女神もまた自分の意思を出雲の神に投げた。

もし、この場に第三者の神がいれば、女神の意思には苛つきが垣間見えたことだろう。

「そりゃ、あんたはそれ——人に不幸を与えるのが役目だろうさ。私だって……………いや、それはどうでもいいし。第一、もう昔とは違うんだよ」

「ふん。じゃあ、あの五百野を生み出したのはやっぱりあんたか」

「…………え？」

その意思に動揺が混ざっているのがわかる。

「あんたじゃない？ 確かに、あんたにはあいつを生み出すほどの力をこの結界の中で発揮できないと思ってたからおかしいと思ってたけど…………！ じゃあ、誰があいつを生み出したって言うの？」

「なんで……!? そんなのおかしいじゃない！」  
 意思の苛つきは、すでに怒りに変わっていた。

「どうして、祭神が——神座かんざ木の神がそんなことをする必要があるってのよ！」  
 女神は我を忘れたかのように、その場から離れた。

# 第三章

3

Bokuto  
Kanojoto  
Kanojoto  
Kanojo

社はとても安らかな顔で眠っていた。

何も知らない者ならば、いい夢を見ているのだと誰もが思うはずだ。

事実、金恵の第一印象はそうだった。

確かにいい夢を見ているというのは間違っていないかもしれない。

彼が見ているのは作られた世界の中で過ぐす夢であり――。

その夢から社が起きることはない。

「パラレル世界だあ？」

黒恵がうさんくさそうに言う。

彼女の――いや、彼女たちの目の前には妖精姿の女神がいた。

社の目だけに見えるようにしていたものを、三人にも見えるようにしたのだ。

黒恵だけでなく、金恵にも銀花にも女神の姿が見えている。

しかし、ふたりはそちらには目を向けず、心配そうな表情で、眠る社を見ていた。

「もう二日も目が覚めてないところに、いきなり駄女神が妖精姿で現れて、社の家に来いとか言ってる」

ここは社の部屋だ。

黒恵、金恵、銀花は女神に呼び出され、ここにやってきている。

そして、社に起こっていることの説明を受けたが、黒恵たちはいまいち理解していない。

「で、何かと思ったらパラレル世界とか……もつとわかりやすく言ってくれ」

「だーかーらー、要するにここじゃない別の世界に精神だけ行っちゃったって言うんじゃない。なんでわからないのよ。人間はここまで物分かりが悪くないはずなんだけど……」

「うっせーな、偉そうに」

黒恵と女神が言い合っていると、金恵が真剣な顔でそれを止めた。

「喧嘩けんかとかやめてよ。今は社を目覚めさせることの方が先決でしょ」

普段のような穏やかさはなく、その表情には焦りが強い。

ただ、金恵も含めて、三人は話が飲み込めていないのだ。

もつとも、女神ですら社の状況に気付いたのはついさっきである。

女神は完全に五百野いほののことを侮っていたと言えた。

「……もういつかい、せつめい」

銀花が不満そうな表情で女神に要求する。

「んー。じゃあ、最初から話すけど」

そして、女神は社のお腹なかの上にあぐらを掻かいた。

それを三人は覗のぞき込むようにして待つ。

「最近、社が変なことを言ってたのはわかる？」

思い当たることがあるようで、三人は小さく頷うなずく。

覗きや事故のスキンシップ、そういったことは確かに多かった。

違和感を強く覚えていたのは社だろう。

ただ、三人にとっては自然な、偶然が起こす事故としか思えておらず、いずれ普通に戻るだろうと楽観視していた。

その油断すら作り出されていたものだ。

「私も気付けなかったのは、悔しいけど……社はその事故の度に、それが起こり得る世界に飛ばされてたのよ」

「起こり得る世界に？」

「世界の可能性は無限大。どんなことだって起こり得る。社の精神は何度か、その可能性の世界に飛んでいるの。無数に分かれたパラレル世界のひとつに、一瞬だけ飛んで、

ある程度経ったらまた戻る。それを繰り返してたのね……」

「なんで気付かなかったんだよ」

「仕方ないじゃない。この世界ではそれが起こってないんだから。というか、あんたたちだって、社がいつもと違っていたことぐらいわかるでしょ？ 妙に照れたりとか、恥ずかしがったりとか」

確かに黒恵たちからすると最近の社はおかしかった。

何かを警戒し、黒恵たちに申し訳なさそうな表情をして、気難しい顔のままだった。

「社は自分でも周りの人間もわからないように、パラレル世界へ飛んでいた。その度に、エロいことになってラッキースケベ状態になってたのね」

「なんで気付かなかったんだよ」

「あり得る世界に飛ばされてたからよ。あり得るから異常じゃないとしか思ってた。失態だったわ」

「毎度毎度、失態カマしてるじゃねーか」

そう指摘された女神は、不満そうな顔をしつつも反論をしなかった。

こうして社が眠ったままになってしまったのは対応できなかった自身の不備とでも言わんばかりに顔を俯うつむかせる。

「いつから、そんなことになってたの？」

金恵が社の顔を見ながら、心配そうに呟いた。

「社の過去を追ってみたけど、五百野が転校してきた日。その帰りに突風があったでしよう。そこね」

「突風って……ああ、あのわたしたち全員のスカートが捲れたあれか」

「……あんなにまえから？」

銀花が信じられないような面持ちになる。

確かにあれもまたエッチなことではあった。

女神は真面目な表情で頷く。

「あの辺りからずっと精神だけパラレル世界へ飛び続けてる」

「それで。原因はやっぱり五百野でいいのか？」

黒恵の口調はとても静かだ。

だが、もし社に意識があつたら身を震わせているだろう。

それは彼女が本気で怒っている証拠だ。

「どうやってるのはかは知らないけど、間違いないわね」

女神は社の身体を調べるように手を添える。

「でも、何のためにそんなことをやってたの？」

金恵の疑問はもつともだ。

社にラッキースケベを起こさせることに、何の意味があるのか理解できない。

「結界の破壊ね」

「また不思議用語が出てきたんだが」

女神は黒恵たちに結界の説明を軽くする。

この街に張られている結界が不幸を抑え、そして、社の幸福度合いがその効果を左右する、と。

この街で事故が起こっていなかったことや都市伝説の類は、その結界の副次的効果であるということも。

「それって……」

黒恵は思い出したこともあるのか、何か言いたげだった。

しかし、言葉が見つからないのか、口を噤む。

「……やしろは、ふこうじゃないといけないの？」

銀花が消え入りそうな声で囁く。

それが事実ならば、社は街のために常に不幸でなければならないということだ。

「……………」

女神は何も答えない。

追及を諦め、銀花は社の手をそっと握って、女神に向き直った。

「……げんいんも、りゆうも、どうでもいい。やしろはどうすれば、めがさめるの?」  
銀花が力ない声で尋ねる。

女神は少し迷ったような顔をしたが、すらすらと答え始めた。

「……社は今もどこかのパラレル世界に行っている。そして、自分自身がそれに気付いていない」

「気付いていない?」

黒恵の疑問に女神は首を縦に振る。

「普通に過ごしているはずだよ。何しろ、それはあり得た世界だからね。……世界に馴染んだ可能性がある」

「馴染む?」

「異常を異常と思ってないってことさ。だから、それを異常だと……世界に自分が馴染んでいないと思わせないといけない」

「……で、そのためにはどうすりゃいいんだ。ここで社にデコピンでもして、衝撃を与えりゃいいのか?」

「んなわけないでしょ。暴力で解決されるもんじゃないし」

「……わかってるよ」

黒恵は小さく舌打ちをして顔を逸らす。

彼女とて焦っているのだ。

どうかして早く目を覚まさせたいと。

ただ、それが自分の手に余ることで苛立<sup>いらだ</sup>っている。

「こんなことにならないために……あたしは、いつもやってたのに……！」

フロアリングからガッツと鈍い音が響いた。

黒恵が拳<sup>こぶし</sup>を叩<sup>たた</sup>きつけたのだ。

唇<sup>か</sup>を噛<sup>か</sup>んで、悔しそうな表情で。

「くそっ」

彼女は社の不幸を調整していた。

社に大きな不幸が訪れないよう、小出しに自分で不幸を与えるバランサー。

社を不幸から守るために、不可思議な存在に言われたことを信用し、それからずっと

社に不幸を与え続けてきた。

こうならないためだったのだと気付き、失望しているのだ。

「あたしは別に街の人間なんざどうでもよかったのに……。そのためにあたしは社を……ずっと……責めて……」

黒恵は社に不幸を与え続けてきたのは、社のためだと思っていた。

しかし、それが街のためだった。

それで齒<sup>はが</sup>噛みしているのだ。

「黒恵。それは違うわ」

「何が違うってんだ」

「社に与えられた不幸は彼を死に誘<sup>いざな</sup>うほどのものだったのよ。それを分散させて、死なさなかつただけで——」

「うっせえよ！」

「あんたね……いや、まあいいわ。話を元に戻すわ。後まで聞きなさい。目を覚ます方法はあるのよ」

「……てばやくおねがい」

「はいはい。要するに、あんたたちも社のいる世界に行きなさい——ってこと」  
その言葉に金恵が反応する。

「できるの？」

「できるわ。社がおかしいおかしいって言ってた時に、何があっても助けに行けるようマーキングしてあったから」

しかし、女神の表情は解決策を話しているようには見えない。

それほど難しそうな顔をしていた。

「なんでそんな顔してるんだよ……」

「悪いけど、私が行けるわけじゃないからね。そして、行くのはあんたたちだけ。で、あんたたちが戻ってこられるかどうか……それが、わからないからよ」

三人はその説明の続きを待つ。

「簡単に言えば、今いる社の世界に行くには、移動するのではなく取り込まれると言った方が正しい。その世界の異常を見つけて正さなければ……あんたたちは取り込まれたままになって、ここに戻って来られない。精神だけじゃなく、身体も。戻って来ない限り、行方不明になるってことね」

女神が三人を見回す。

「それでもいいの?」

まるで試すような……覚悟を見透かすような目線。

「愚問だな」

「珍しく黒恵と意見が合ったわ」

「……やしろがそこにいるなら、行くしかない」

まったく躊躇ちゆうちゆうせずに、彼女たちは答えた。

そんな様子に女神は一瞬呆気あつけに取られた後、楽しそうに苦笑する。

「頼もしいわね。オッケー、ならいいわ。先に準備してるから、さっさと来なさい」

「……来なさいって、どこにだよ」

「私の、泉よ」

そう言つて女神は妖精姿のまま、部屋の窓から飛び立った。

黒恵たちは社の家を出て、女神に言われたとおり公園へと走つて向かう。

特に準備についても言われていないのでそのまま直行だ。

息も絶え絶えになりながら公園に辿り着くと、夕方だというのに公園には人気がなく誰もいない。

木々が寂しさを醸し出しているようだった。夕日の差さない空のせいで、より一層強く感じられる。

だが、そんな公園の中央辺りから太い光の柱が上へ向かうように昇っているのが三人の目に見えた。

公園に入った瞬間に見えたその光柱に、公園の入り口近くにゐる人々は誰も気付かない。

もともと、人々のそんな様子に黒恵たちも気付かなかつたが。

三人は速度を落とさずに池の方へと走る。

遊歩道を進むと、池が見えてきた。

木々に囲まれた、女神の住まう池。

光の発生源はその水面だ。

「ようやく来たわね。こっちは準備万端よ」

池の縁に立つ黒恵たちに、ふわりと女神が近寄る。

「準備万端たって、どうすりゃいいんだよ」

息を整えながら黒恵が尋ねると、女神は池の方——光柱を指さした。

「飛び込みなさい」

「は？」

「これは今、社のいる世界へと繋がる門よ。もっとも現状では一方通行の、だけど」  
黒恵たちは光の柱を見据える。

池に巨大なライトが……というような光量ではない。

明らかに異常な、理屈など説明のしようもない、光の柱。

「この中に入れば、社のいる世界に行ける。それは保証するわ」

女神が少し早口に説明する。

「でも、向こうの社がこっちの社とまったく同じかどうかはわからない。向こうからこちへ戻ってくるには、少なくとも社を説得する必要があるわ」

「説得？」

「向こうの社は、おそらくどれだけ幸せを享受できる世界へ行ってる。その幸せを蹴って

まで、こっちに戻ってきたいと思わせないといけないってこと」

「……まるでこっちの世界じゃ幸せになれないみたいない方じゃねえか」

黒恵の指摘に、女神は反論をしようとして口を引き結んだ。

そして、その問いに答えずに女神は説明を続ける。

「あと、こっちから私の声は届かない。助言はできないわ。努力はするけど……」

「いらねえよ。お前の助言なんぞ。あたしは……あたしたち三人で社を取り返してくるだけだ」

黒恵は金恵と銀花を見る。

ふたりはそれぞれうなずいた。

「……了解。解決できたと思ったら、向こうの世界でのこの池に来なさい。帰りの門を繋げておくから」

女神の説明はそれで終わる。

「ひとつ聞かせろ、駄女神」

黒恵が陰呑けんのんな雰囲気けんのんで女神を睨にらんだ。

「何よ」

「お前を信用していいんだな？」

「どういう意味よ。ちゃんと門は繋がって——」

「ちげーよ。お前自身を、だ。流されるままに來ちまったけど、お前が社の敵じゃない  
っつー、保証はぶっちゃけねえんだよ」

黒恵もこんな質問に興味があるとは思っていない。

目を見たところで、嘘を言っているかどうかなどわからないのだから。

「ま、そうよね。信用してもらえないのも無理はないけど。今は信用しなさい。戻って  
きたら、全部説明してあげる」

黒恵はもう一度、女神を睨む。

「……ふん、わかった。今は従ってやるさ」

それで黒恵も踏ん切りが付いたようだった。

「……じゃ、行く」

銀花が一足早く走り出して、

「あ、ちょっと待ちなさい、銀花！」

「金恵！ てめえも待て！」

金恵と黒恵がそれに続く。

輝く池に吸い込まれるようにして、彼女たちはそこに飛び込んだ。

そして、ひとりの妖精だけが残る。

「……さて、次は——」

女神は一仕事終えたみたいに、薄らとそこから消えた。

「ふあっ！」

「うああ！」

「……こぼこぼ」

三者三様の悲鳴をあげる。

光柱の中に飛び込んだら、突然落ちるような感覚と共に、何かに纏わり付かれたかのように身体が重くなった。

彼女たちは腕きながら、どうにか自分たちの状況を確かめる。

「水……池!？」

そこで自分たちが水に飛び込んでいる状態だということ把握した。

しかも、慣れ親しんだいつもの池。

それを理解すれば焦りが安心に変わるのもすぐだった。

足が着く。

三人は揃って立ち上がるが、完全に濡れ鼠になっていた。

「くっそー。びしょ濡れだ」

「まさか飛び込んだ先が水だなんて……。泥じやなかったただけよかったところ」

「……さむい」

周囲には先程と違い、人がいる。

冬場に池で溺れかけたという姿に奇異の目を向けられながら、黒恵たちは愛想笑いを浮かべて池から上がった。

ひとま  
一先ず目立たない場所へ移動して、協議する。

「あの駄女神、姿が見えないけど、ホントにあたしらは別の世界に来たのか？」

「わからないね。風景、全然変わってないし、散歩してた人たちも見かけたことあるし」

「……きおんも変わらない……」

三人にはまったく同じ世界にしか思えなかった。

気温どころか時間も変わってそうにない。

太陽のあった位置までさっきと同じだ。

「……へくちっ」

銀花が小さなくしゃみをする。

それを見た黒恵が少し難しい顔をした。

あと少しすれば夜になる。

そうなれば風邪を引くかもしれない。

「……まずは家に戻ってみるか」

黒恵はそう提案し、ふたりは頷いた。

びしょ濡れのまま、人目を避けつつ家へと帰る。

鍵かぎも何も変わらない。

だというのに、黒恵には何故なぜか微かに他人の家なのではないかという感覚が湧わき上がった。

「ええい、ままよ」

鍵穴かぎあなに鍵を差し込み、回す。

鍵は呆気あつけなく開いた。

取っ手を掴つかみ、玄関を開ける。

「た、ただいま……」

すると、玄関のすぐ傍に黒恵の母親がいた。

二階から下りてきたところだった。

「あら、黒恵。お帰りなさい。あんた確か、さっき外出したばかりじゃなかった？」  
今日は女神に呼ばれて社の家に行くべく家を出た。

しかし、黒恵はそのことを母親に伝えていない。

金恵も、銀花も同じだ。

どうやら、この世界にもちゃんと黒恵がいるらしい。

状況を一瞬で理解した黒恵は、咄嗟とっさに言い訳を頭の中に思い浮かべ、早い口調でそれを言った。

「あ、いや。ちょっとドタキャンっていうか」

「というか、なんでびしょ濡れなのよ。それに後ろのふたりは……あら？」

母親が金恵と銀花に目を向ける。

近しい者にはわかるのだ。

三人はよく見れば似ているということが。

だが、母親の目には「初めて会った」という色が見て取れた。

娘に似ている。

だが、金髪と銀髪という大きな違いがある。

その上、元の黒恵がいる以上、説明もできない。

つまり、この世界には――。

「悪い。友達だよ。ほら、あがつて」

「う、うん。お邪魔します」

「……お、おじやします」

足早に靴を脱いで家へと上がり、部屋のある二階へと直行した。

たまたま扉の開いていた部屋——金恵の部屋だった場所を覗くと、金恵の部屋ではなかった。

自分たちが分裂した存在に過ぎないということを再認識させられたかのようで、その事実にも、金恵と銀花が複雑な顔をする。

「可能性だけでいえば、金恵だけの世界だってあるかもしれないねえんだ。いちいち、気落ちしてんな」

「黒恵に言われなくてもわかってるわよ」

「……ぎんかも、だいじょーぶ」

そんなやり取りをして、黒恵たちは黒恵の部屋へと入る。黒恵の部屋もまた、少し変化があった。

というよりも、最低限の物しか置いていない。社にゲームセンターで取ってもらったぬいぐるみたちが誰もいないのだ。

黒恵は訝しげな顔をして、着替えを取り出してその場で着替えた。金恵と銀花のための着替えも乱暴に投げる。

「黒恵のブラ、キッツいんですけど!？」

「うっせーな、ホルスタインなのが悪いんだろが！」

「……くろえのウエスト、だるだる」

「お前が全体的に小さいだけだ！」

なおも不満を言う金恵と銀花を視線で黙らせて、それでようやく落ち着いた。

キツそうな黒恵の服を着た金恵が机の椅子に、ぶかぶかな服を着ている銀花がベッドの縁に、黒恵は座布団を取り出して床に、三人はそれぞれ座る。

三人が向かい合う形になって、まず金恵が口火を切った。

「改めて確認するけど、この世界にはわたしと銀花がいないってことよね？」

「ちよっと考えたんだが、いないと断ずるのは早計かもな。単に家に来てないだけかもしれないねえし」

「わたしたちが分裂した後、ずぶ濡れで別の家に行ったっていうの？」

「可能性の話だ。あたしが出て行けって言った時に、本当に出て行っただって可能性があるだろうが。なんでこだわる」

すると銀花が横から口を出す。

「……だって……ここってやしろがしあわせだって、かんじるセカイで」

そこまで言われてようやく黒恵も察した。

「……やしろのしあわせに……ぎんかたちはひつようない、ってことかも、しれなく

て……」

少しずつその表情は泣きそうになっていく。

そして、銀花ほどではないが、金恵も似たような顔をしていた。

「ばーか。んなわけねーだろ」

「……バカって言った」

「そりや言うだろ。なんつーか……あたしがこういうのもなんだけど、社を信じてやれ  
つての」

「……ん」

まだ完全に納得したわけではないだろう。

ただ、自分たちの存在が、今は優先するべき事柄ではないということだけはふたりも  
わかつている。

「今は社を連れ戻すことが先決だものね」

少し調子を取り戻した金恵が拳こぶしを握った。

黒恵も銀花もそれに頷くうなず。

気を取り直した三人が、すぐに部屋を出ようとしたところで――。

「ただいまー」

と、帰ってくる少女の声が響いた。

とんとんととゆつくりと足音を立てて、二階に上つて来る。

男であれば黒恵には兄がいるが、今の声は確実に女性のものだ。まだ成人していない女子特有の声。

ここに帰ってくる女子は、黒恵たち以外にいない。

今、帰ってきた人間が誰なのか……三人は固唾を呑んで扉を睨んだ。

足音が止まり、扉が開いて姿を見せる。

「……やつぱりお前か」

黒恵が呟く。

黒恵たちの目の前にいるのは、五百野薔薇だった。

「あんたたちか」。靴があるから、おかしいと思つたけど……」

「元々、ここはあたしの家だ。おかしいなんて言われる筋合いはないな」

「まあ、確かに私の家じゃないね。もっとも、この世界だと別にあんたたちの家でもないんだけど」

「何を言つてんだか知らないけど、社を返してもらう。おい、金恵、銀花。行くぞ」  
だが、五百野は扉の前から退こうとしない。

「返すわけないでしょ。社は今、幸せを享受してるところなんだから」

「……はっ。悪いけどお前には荷が勝ちすぎてゐるな。社はあたしが――」

「あんたは不幸にするだけ、だけどね？」

それを聞いて黒恵は舌打ちした。

黒恵は大きな不幸を招かないように、小さな不幸を社に与えている。そのことを言っているのだろう。

「元々、この世界には金恵や銀花どころか、黒恵の存在すらないのよ。ここは、そういう世界だからね」

「あたしらの存在が社にとって邪魔だっていうのかよ」

「そうね。それにあんたたちは元々死ぬ運命だったんだから、これが正しいのよ」

「は？」

聞き捨てならない言葉が五百野の口から出た。

「何を言ってるんだ、お前……」

「言葉通りの意味よ。自分の親から聞いてないの？ 本来、三つ子全員が流産するはずだったのを、神座木かんざきの神がひとりだけどうにか助けたの」

「え……」 「……なに、それ」

金恵と銀花も絶句していた。

「信じるんじゃないよ。そんな与太話」

「人ひとりを生み出したまま維持するなんて、そんなことは神にすら難しい。だから金

恵や銀花は、その死んだ他の姉妹の魂を女神が復元したのね。もっともこの世界では、  
史実通りあなたたちは全員死んでる。私はちよつとだけ力を使ってこの世界を騙して、  
黒恵として生きてるけど」

そこまで言い切った五百野は三人を同情するように見る。

金恵と銀花が俯いて――。

「どうでもいいだろうが。そんなことよお」

黒恵があつさりと言う。

五百野は一瞬だけ眉を顰めた。上手いかなかったと言わんばかりに。

「死んだあの魂だの、難しいことはどうでもいい。あたしらは社と一緒に元の世界に戻る。それだけだ」

そして黒恵はポキポキと指を鳴らし始めた。

「退いてもらおうか。世話のかかる王子様が待ってるもんでな」

黒恵が一步踏み出すと、五百野は身を翻して玄関へと向かう。

「行けばいいじゃない。説得できるのならね！」

そんな捨て台詞を残して五百野の背中は見えなくなった。

「待ちやがれ！……って、おい！ お前らも行かず！」

金恵と銀花も黒恵の言葉に慌ててついていく。

その後ろにつきながら金恵が漏らした。

「やっぱり、あんたって凄<sup>すご</sup>いわ」

銀花も同意するように頷く。

「……あんなこと言われて、気にしないの？」

黒恵は首を振った。

「どうでもいいってことはねーけど、今は社のことの方が優先だろう」

「ん、そうね」

「……うん」

そして、黒恵たちは玄関から家を出る。靴が濡<sup>ぬ</sup>れたまま嫌な音を立てたが、そんなことを言っていられない。

「とりあえず、社の家に行きゃいいか」

向かうのは、神座木の神社だ。

「……ここの階段、毎度毎度しんどいんだよな」

「そうね……。結構急だし」

「……はう」

神座木神社への階段を上る三人。

来慣れているとはいえ、その足取りは重い。

鳥居を潜り、境内まで来るとすでに日は落ちつつある。

三人が周辺を少し探ると、目的の人物は呆気なく見つかった。

珍しく砂利の上を箒で掃き、境内の掃除をしている。

すでに学校から帰ってきたからか、私服に着替えていた。

だが、そんなことよりもその隣に——制服姿の五百野がいたことの方が衝撃的だった。

三人の顔に緊張が走る。

「あいつもうここまで来てたのか……!」

黒恵が焦ったように言う。

そして、ふたりの会話に耳を澄ませた。

「社、今日、楽しかった?」

「うん。楽しかったよ、黒恵ちゃん。でも、なんでそんな当たり前のこと」

「……社にとっては当たり前じゃないから」

「変な黒恵ちゃん」

仲睦まじく語り合っていた。

社は黒恵たちに背中を向けている。だが、社の穏やかそうな表情が三人には容易に想像できた。

「……なんであいつ、五百野のことをあたしの名前で呼んでるんだ？」

その上、社は五百野を黒恵だと思い込んでいる。

「おい、お前らの目にあいつはあたしに見えるか？」

「全然。あっちの方が美人よ」

「……らんぼうそうな女にみえない」

「正確な情報ありがとうよ……。どうせ、あたしは美人じゃねーよ」

歯ぎしりしながら拳を握るだけに留めた。

自分だけの幻ではないという確信をする。

三人の目には社が黒恵と言った人物が五百野に見えているのだ。

「考えてても仕方ねえ」

砂利を踏みならして黒恵は社に近づいていく。金恵と銀花も遅れて、その後についていった。

その音でまず、五百野が気付く。

そして、不敵な笑みを浮かべた。

「……あら。思ったよりも遅かったじゃない」

「こっちゃお前みたいにトンデモ超能力は使えないんでな」

「ちよっと早すぎるわよ」

「……ずるい」

「こっちだって、この世界じゃホイホイ使えないのよ」

さらに挟んで会話したことで、社も気付いた。

振り返った社は、驚愕きょうがくの表情を浮かべる。

それはまるで意識を取り戻したかのように。

「えっ、あれ？ 黒恵ちゃんかふたり？ っていうか、金恵ちゃんに、それに銀花ちゃんも……？」

混乱した様子の社は、今度は五百野に顔を戻した。

今さっきまで黒恵として見ていた五百野を。

「五百野、さん？ え、なんで……」

社自身もまた気付く。

今まで話していた相手が、五百野だということに。

そんな社の様子に、五百野が「はあ」と怠だるそうに溜息ためいきを吐く。

「気付かれちゃったかあ。まあ、そんなに深度の高い認識阻害じゃなかったから仕方ないか。この世界を作るだけで結構手一杯だったし」

「ふん、よくわからん力使いやがって。社は返してもらう」

黒恵が後ろから社の首に手を回し、自分の身体からだに抱き込んだ。もう渡さないと言わんばかりに。

「できるなら、どうぞご自由に」

余裕の表情で——まるで出来もしないことに挑む挑戦者を嘲笑あざわらうかのような表情で五百野は神社に上がる階段に座り込む。

「おい、とっとと帰るぞ」

黒恵は社の身体を回して、顔を見合わせた。

だが、社は浮かない顔をしている。

それは、まるで家に帰りたくないと思っている幼子のようなのだ。

「戻れないよ……」

社が小さく呟く。

「な、なんで、社!？」

「……やしろ、もどろうよ」

金恵と銀花も不安そうな表情で社に迫った。

しかし、社は躊躇ためらうように首を振る。

「帰れるわけないよねー」

五百野はそんな様子に、茶々を入れた。

くすくすと楽しそうに笑っている。

五百野は知っているのだ。

社が帰れない理由を。

「黙ってるよ、五百野。あたしらは社に聞いてるんだ」

「黙らな―い。この世界に来たのは、社の意思でもあるし？ その社の意思を私は守らなきゃいけないし」

「……………んだと？」

社が目を伏せる。

「ごめん、黒恵ちゃん……。金恵ちゃんも、銀花ちゃんも……」

「……………なんで？ やしろ……」

今にも泣きそうな銀花に迫られても、それでも社は堪えるような表情だ。

戻りたくても戻れない。

それがありありとわかる。

「僕のせいで街が、滅ぶから……」

そして、そんな言葉を口にした。

黒恵たちは三者三様の表情を浮かべる。

だが、共通していたのは絶句、というものだろうか。

「あの街の結界を維持するために、僕は不幸じゃないといけなくて……」

とつとつ  
訥々と、語る社。

「自分があの街で幸せになつたら、滅ぶんだ。人を巻き込むような不幸を撒き散らし、皆が蓮ちゃんみたいに不幸になる」

握る筈に力が籠もった。

信じたくないという思いはあるのだろう。

「僕が幸せになればなるほど街は不幸になって、滅びへと向かっていく。でも、不幸であればあるほど、黒恵ちゃんを、金恵ちゃんと、銀花ちゃんを、巻き込んで……」

「そんなこと——」

金恵が否定する前に、

「でも、現に蓮ちゃんは巻き込まれたから」

社はそれを口にする。

怪我をした蓮の姿を忘れるはずもない。

それは黒恵たちとて同じことだ。

「街に事故が起こり始めて、まだ死人は出てないけど……それでもいつかは死人が出る。そんな自分が……そっちに戻るわけにはいかないよ」

「じゃあ、社はずっとこっちにいるの？」

金恵の表情は、普段からは考えられないほどに沈痛だ。

そんな金恵の言葉に、社はゆっくりと――うなず頷く。

「きつと、皆に迷惑をかけないように、ここで過ごすのが……僕にとっての一番の選択肢だから」

パシン、と。

小さく、乾いた音が響く。

社が呆然とした顔をしていた。ぼうぜん

そして、自身の頬が叩かれたことを自覚し、叩かれた頬に手を添える。

デコピンでも。

けんこつ拳骨でもない。

平手打ち。

それは今まで生きてきた中で、初めての行動だった。

「目を覚ませ」

絞り出すような黒恵の声。

怒った声でもない。呆れた声でもない。あき

ただただ、願うような声。

「ちよ、ちよつと黒恵……！」

「……くろえ、らんぼーは」

「お前らはちよつと黙ってる。こういう時は、あたしの役目だ」

黒恵は真正面から社を見据える。

それは怒った顔に見えるかもしれない。



だが、人によつては泣きそうな顔に見えたかもしれない。

「お前を意図的に幸福にしてるのは、その女だ」

黒恵はちらりと五百野に目を向ける。

五百野は先程とは違い、苦々しい顔をしていた。

黒恵はすぐに視線を戻して、再び社に向き直る。

「五百野にそれを止めさせれば、それでいいだろう」

「で、でも、そうだったとしても、それを防ぐ手立ては……！」

社が反論しようとしたところに、

「……だったら、あたしが不幸にしてやる」

黒恵が突如、そんなことを言い始めた。

「元々、あたしはガキの頃に誓ったんだよ。お前の不幸はあたしが背負うって」

黒恵は興奮したように続ける。

「ずっとお前を不幸にし続けてやる！ お前が泣こうが喚こうが……！」

喉のどの奥から、擦れたような声で、黒恵は叫ぶ。

滅茶苦茶めちゃくちやな言い分だった。

「でも！」

黒恵は社の肩を掴む。

「あたしも、金恵も、銀花も！　ずっと一緒に、ずっと傍にいる！　お前が不幸だろうが関係ねえ！　巻き込まれようと関係ねえ！　約束してやる！　ずっと、ずっと！　一緒にいるから！　離れたりしねえから」

「黒恵、ちゃん……」

「だから、それ以外には目を瞑れ！」

少し静かな時間が続き。

社が嬉し<sup>うれ</sup>そうに、小さく笑った。

「めちやくちやだよ、黒恵ちゃん」

「あたりめーだろ。あたしは別に矛盾だの食い違いだの、気にしねーから」  
黒恵は社の腕を掴む。

「ほら、帰るぞ！」

そして、引っ張るようにして走り出した。

「うん！」

社が頷く。

「行こう！」

「……もどる」

金恵と銀花もそれに続いた。

「ちょ、ちよっと！」

慌てたのは五百野だ。

この世界に社を繋ぎ止めておくために、様々な力や策を弄したというのに。

凄まじく呆気なく。

あのピンタ一発で、すべてが変わってしまったのだ。

必死に作り上げた巨大なドミノを、一枚目から崩された。もはや、それを止めることすらできない。

すぐに立ち上がって、黒恵たちを追いかける。

「社！ ちよっと、待ってよ！ いいの!? そっちの世界に戻っても幸福なんて何もないのに！」

社の背中に、真に迫った声で問う。

だが、社は止まらない。

黒恵に引つ張られているが、彼自身にも止まる気がないのだ。

「ごめん、五百野さん！ 僕は……思い出したんだ！」

「何をよ！」

「何度も何度も忘れそうになるけど、僕の望みは『みんなで幸せになりたい』であって、僕ひとりが幸せになりたいわけでも、黒恵ちゃんと金恵ちゃんと銀花ちゃんを、不

幸にしないわけでもないんだ！」

社は少しずつ心を削られていた。

『みんなで幸せになりたい』

その想いが、いつの間にか変わっていた。

蓮が怪我をしたことで。

怪談や都市伝説が変化したことで。

街が危険になり、滅ぶかもしれないと言われたことで。

少しずつそれが認められず。

妥協をし始めていた。

自分自身と黒恵たちが別々にならなければ、幸せにはなることができないと思い込んでいたのだ。

しかし。

『社と黒恵と金恵と銀花が幸せになる』

それが、社の幸せではない。

『一緒に幸せになる』

それが、社の本心なのだ。

三人と別れて、それが成し得るわけがない。

「いいの、社!? このままじゃ——」

「五百野の言葉に耳を貸すな、社!」

黒恵たちは懸命に走る。

目的地は女神に指示されたあの場所だ。

五百野も懸命に走るが、四人には追いつけない。

必死に訴えかけるが、四人はまったく止まろうとしなかった。

「見えたよ!」

金恵が叫ぶ。

社たちの目には光柱が浮かび上がっているのが見えていた。

それを周囲の人たちは誰も<sup>だれ</sup>気にしない。

四人にしか見えないのだろう。

公園の入り口を突っ切って中へと入り、遊歩道をひた走り、池へと向かう。林の中を突っ切ると、池の水面は黒恵たちが入った時のように光っていた。

女神が帰り道を繋げているのだろう。

「飛び込むぞ!」

黒恵が叫ぶ。

だが突然、黒恵の腕に負荷がかかった。

「待って、黒恵ちゃん」

社が止まったのだ。

「何を待つんだよ！ もうあいつが追いついてくるぞ！」

すでに追いついてきていた。

制服姿の五百野が汗を流しながら、社を取り戻すべく走ってくる。

「社……！」

五百野がまるで捨てられるかと思っているかのような表情を浮かべた。

「ごめんね、五百野さん……！」

「待って、社……！」

「僕は、僕だけを幸せにするこの世界を否定する！」

「社お！」

五百野が叫ぶ。

だが、その足は縫い付けられたかのように動かない。

「お待たせ、黒恵ちゃん。金恵ちゃんに、銀花ちゃんも」

社が申し訳なさそうに言う。

「ま、いいさ」

「さ、帰ろう」

「……ぎんかたちのせかいに」

そして、四人はその光の柱に飛び込んだ。

## 間章

結界はすでに破壊寸前だった。

媒体となっていた社の魂が、異世界に囚われ、結界を保てていないのだ。

「入るな……！ 入ってくるんじゃない！」

結界はまだ完全に壊れきっていない。

まだ神を入れないだけの効力は保っている。

だが、もはや街は災害や事故に見舞われ、神が放つ不幸を防ぎ切れていない。

もし、結界が完全に破壊されれば、その不幸を街が一身に浴び、大災害が起こるだろう。

それを微力ながら女神は抑えていた。

女神として、力を持った神である。

いや――。

だった。

だが、すでにほとんどの力は失われ、池で小さな願いを叶えるのが関の山だった。

金恵や銀花ぎんかを生み出したのには、大した力を使っていない。

彼女たちは元々、生まれるべき人だったのだから。

「くう……」

それでも女神には不幸を撒き散らす——厄神を抑えきれない。

まだ結界は持つだろう。

だが、二日後には壊れ、厄神はこの街に入り込む公算が大きい。

無理矢理幸福にさせられていたとも言える街は一転、不幸が舞い降りることになる。

その不幸は容易たやすく人の命を奪うだろう。

女神にとって、この街の人間は等しく守るべきものだ。

本来は、この街の神である祭神の役目。

だが、彼女には彼の代わりにこの街を助ける理由があった。

女神自身にとっては義務とも思っている。

「……アト……スコシ……」

もし、人類が今の意思を感じ取ったら、身体からだの震えを抑えきれないだろう。

そんな恐怖を伴う意思が、結界内へと入り込んできた。

意思がここまで伝わる。

その意味とは、つまり結界の効力が薄れているということだ。

撒き散らされる不幸は、もはや冗談かと思うほど多く、街中に災害や事故をもたらしている。

女神の力で、どうにか死人こそ出ていないものの、重傷の者が出始めていた。だが、このままでは最悪の事態も近い。

「……ム？」

厄神の戸惑いを女神は感じ取る。

その意思も少し薄れた。

「結界が……」

厄神の進行が明らかに遅くなっている。

結界が力を取り戻しているのだ。

弱い力で、今にも破られそうな結界ではあるが、最後の力を振り絞るかのように動いている。

「戻ってきたね……！」

女神は少しだけ安心したような意思を纏まとわせて、急いで地上へと戻った。

# 第 四 章

4

Bokuto  
Kanojeto  
Kanojeto  
Kanojo

落ちるような感覚。

光の中に飛び込んで、まずやってきたのはそんな感覚だ。

次いで、身体に重石おもしがのし掛かったかのように重くなる。

それが水だとわかったのは、すぐだった。

「ぶあっ！」

おは  
溺れてしまう。

身体がどの向きを向いているのかわからない。

そんなふうに変乱している最中、突然僕の身体が上に向かって引っ張られる。

「足が着くだろ」

「大丈夫、社やしろ？」

黒恵ちゃんくろえと金恵ちゃんかなえに支えられて僕の身体は立たされていた。

ここ、あの公園の池だったんだ。

そりゃ、足も着くはずだ。

「ご、ごめん、黒恵ちゃん、金恵ちゃん。ふたりとも冷静だね……」

「……なれただけ。くろえも、かなえも、さいしょはおぼれた」

銀花<sup>ぎんか</sup>ちゃんがしれっとしたように言う。

「言うんじゃねえよ！」

「あーん、もうまたびしょ濡<sup>ぬ</sup>れだしー」

僕はそんなやり取りをしながら、陸へと上がる。

「ようやく戻ってきたねー」

陸に上がると、妖精<sup>ようせい</sup>姿の女神さまがいた。ほのかな光を羽から振り撒<sup>ふ</sup>いている。

口調は軽めだけど、いつも通り……とは言えない、少し緊迫したような表情だ。

「毎度毎度、池に落ちるのどうにかならねえのかよ」

「仕方ないでしょ。空中に浮けない人間が悪い」

「無茶言うな」

そんなやり取りを見て、ちよつと違和感を抱く。

「……めがみさま、ぎんかたちにも見られるようになったから」

「そうだったんだ」

女神さまは少しだけ渋い顔をした。

「複数人の網膜に干渉するのは面倒だから、できれば止<sup>や</sup>めたいんだけどね」

ということらしい。

「どうでもいいが、一旦<sup>いったん</sup>帰るぞ。一日に二度も池に落ちるなんて、マジあり得ねえ」

「そうね。早く着替えなきゃ」

黒恵ちゃんを先導しつつ、人目を避けて僕らは黒恵ちゃんの家へと向かった。

その帰り道、強烈なブレーキ音が響き渡る。

ブレーキ<sup>むな</sup>虚しく、ドン！ と大きな音を立てて、その車はガードレールをへこませてしまっていた。

周囲の人たちがざわつき、そして何人かの目撃者は慌ただしく警察や救急に電話をかけている。

道路に残ったタイヤ痕<sup>こん</sup>。

その痕跡<sup>あと</sup>を辿ると道路は黒く濡れていた。

「もしかして、あれオイル？」

金恵ちゃんが言う。

確かに黒いし、それっぽい。

もつとも、暗くてよくわからないけど……。

それからすぐに救急車とパトカーのサイレンが鳴り響く。

「やっぱり、この事故って……」

「……行くぞ」

黒恵ちゃんが僕の言葉を遮って、僕の腕を引っ張ってきた。だけど、その先でも異変は起こる。

「火事だー!」「なんだ、アレ!?」「何が燃えてるの!?」

視線を奥に向けると、ビルに火と煙がもうもうとしていた。

そこから多くの人たちが、こちらへと逃げてくる。

そのうち、消防車のサイレンが聞こえてきた。

「……………」

黒恵ちゃんたちは何も言わない。

女神さまも一言も語ろうとしない。

でも、これって……!

「崩れるぞ!」「危ない! 早く、資材を固定しろ!」「ロープロープ!」

さらに別の場所——建設現場に飛び交う怒号。

次いで鉄骨が、組み立てられた鉄骨の中を落ちる音が響く。

「大丈夫か!」「怪<sup>け</sup>我<sup>が</sup>はないな!?」「歪<sup>ゆが</sup>みがないかチェック、足場の安全確認を最優

先!

すべてが自分のせいなのではないかと思ってしまう。

「いきなり土砂崩れが起きたらしいぜ。今、救急車が――」

僕の幸福が、皆を、この街を巻き込んでいるんじゃないかと。

「ね、ねえ、黒恵ちゃん……!」

「いいから黙ってろ!」

「でも、この事故は僕の幸福が――!」

「そう」

僕と黒恵ちゃんの会話に差し込まれる、底冷えするような声。

どこか遠くから聞こえたようなその声は、とても近い場所からのものだった。

「五百野<sup>いはの</sup>さん……」

その姿は制服じゃなく、いつもの赤いコートだ。

全身からだただならぬ雰囲気漂っている。

「お前もこっちに戻ってきたのか。ずぶ濡れじゃねえんだな」

「あんたたちと一緒にしないで」

黒恵ちゃんと五百野さんが一触即発の様相を見せている。

そして、五百野さんは僕を指さした。

「社が言おうとしている通り、今こうして事故が起こっているのは社のせいだよ。社が結界を抑えられていないから」

「ふざけたこと言ってんじゃねえ！」

「事実なんだから仕方ないじゃない」

黒恵ちゃんの言葉にまったく怯むことなく、五百野さんが言う。

「いいの？ 社。このままじゃ遠からず、誰か死ぬよ？ ううん、ここの住民がひとり残らず死んで、ゴーストタウンになるかも」

そう言われて、心に何かが刺さった気がする。

黒恵ちゃんと金恵ちゃんと銀花ちゃんと、ただ……ただ、一緒にいたい。

そう思ったのは確かだけど、こうして目の当たりになるとやはりキツイ。

「社が不幸にならないと、結界は維持できない。不幸の神様の力を、結界は遮断できないから」

そして、五百野さんは僕たちから視線を逸らした。

その先は——女神さまだ。

「ねえ？ 元凶の、不幸の神様」

突き付けるように、責めるように彼女は言い放った。

「……え、女神さま？」

女神さまを見る。

妖精姿の女神さまは、五百野さんを鋭い目つきで睨<sup>にら</sup>んでいた。

「社に言った不幸の神様はその女神を自称してる神様だよ。その人の力を抑えるために結界があるの。だから、まあ、社のせいって言うよりも女神さまのせいって言ってもいいかもね」

「あんたっ……！」

「事実でしょ。ああ、この街を救う方法はもうひとつあるよ。その女神さま——不幸の神様をこの街から追い出すこと」

いきなりの事実、僕は頭の中を整理するのが精一杯だった。

「女神さま……？」

僕は恐る恐る呼び掛ける。

女神さまは、突き付けられた言葉に動揺しているのか、辛<sup>つら</sup>そうな顔をしていた。だが、

「私は、もう、不幸の神なんかじゃない！」

とだけ、叫んだ。

金恵ちゃんと銀花ちゃんが、そろりそろりと怯えたような顔で女神さまを見る。ふたりは女神さまに生み出された存在だからだろうか。気になるのかもしれない。

「あー、そうだよ。元々、私は不幸の神だった。災厄を振り撒いてた。でも、もう違う。もう、私はあの池の女神だ！」

「どうということなんですか」

「私は人に与えるべき不幸を制御できなかったせいで出雲を追われた。それは確かだよ。行く先々に拒まれて、私はずっと彷徨っていた」

僕が問うと、女神さまはすつと神座木神社がある方——御神木さまの方を見た。

「でも、ここの祭神は私を受け入れてくれたんだ。しかも、私の不幸をどうにかしようとしてくれた。おかげであいつは力を使い果たして眠ることになったけど、私はこうして池で願いを叶えてるんだよ！」

僕の右肩の上で女神さまは続けて語った。

「千年以上、浄化を続けたおかげで私はこうして存在できるんだよ。もう不幸なんて撒き散らしていない。恩返しするように、ささやかだけど願いも叶えてきた」  
そういうことだったのか。

だけど、そこで五百野さんが薄く笑う。

「不幸を撒き散らしてない？　じゃあ、なんで結界——『福音機構』を維持してるの

よ？　これは貴女あなたの不幸を抑えるためのものでしょ!？」

鋭く、責めるように指摘した。

だが、女神さまは首を横に振る。

「何を勘違いしてるのよ。昔の結界と今の結界は、そもそも用途が違っている。昔の結界は私の不幸を抑えるためのものだった。でも、今の結界はこの街にあいづを入れさせないための結界よ。この街に災厄を振り撒こうとしている神様のね!」

「――!」

それは五百野さんにとって意外な答えだったのか、それとも真実を突き付けられて驚いているのか……。

こう言っではなんだけど、彼女にしては間の抜けた顔だった。

「街への幸福効果は副次的なものよ。もっとも……入ろうとしているヤツを呼び寄せてるのは私だから……私のせいというのは否定しないけどね。でも、私はもう不幸の神じゃない。決して。祭神の名誉のためにもそれは否定する」

そして、女神さまは黒恵ちゃんたちに向き直る。

「黒恵」

「……んだよ」

「金恵」

「はい」

「銀花」

「……ん」

三人に呼び掛け、

「お前たちは社の不幸を、一生支える気概はあるか？」

と、そんなことを言い放った。

「当たり前だろ。十年以上前からそう決めてる」

「もちろん。迷う必要すらないわ」

「……もんだいなし」

「即答か。なら、私から言うことは何もない」

女神さまは安心したような顔になる。

それから空を見上げて、キッと睨み付けた。

「女神さま、何考えてるんですか？」

「結果はもう意味を成さないからね。直接、抑えに行く。ま、さっさとお帰り願ってすぐに戻ってくるわよ」

言っていることは威勢がいいが、それでも僕にはそれが強がりになしか見えなかった。

この街全体を不幸に陥れようとしている神様なんて、僕たちにはどうしようもないじ

やないか。お手伝いすることもできない。

「あんたは引き続き、不幸になるかもしれないけど……ま、それは黒恵と金恵と銀花が支えてくれるっていうんだから、それで満足しなさいよ。色男」

そんな軽口を叩いて。

「それでも満足いかなかったら、自分のところの神様をお願いするんだね。いい男だよ、あいつはね！」

止める間もなく。

女神さまは空へと旅立っていった。

「くっ！」

そして、五百野さんもまた消える。

追いかけたのか、別の何かがあるのか。

それはわからないけど……。

「何だか……」

黒恵ちゃんは、納得をしていないのか、苦虫を噛みつぶしたような顔をしていた。

一先ず着替えるのこともあり、黒恵ちゃんの家へと戻る。

その帰り道の途中、あからさまな事故は減っていた。

だけど、それでも小火や接触事故など小さな不幸は残っている。

「まだこの状況は終わらないってことかよ」

着替え終わった黒恵ちゃんたちと共に、部屋の中で僕らは話し合う。

「まあ、大事故や大規模火災は起こってないみたいだけどね」

金恵ちゃんがスマホを操作してニュースをチェックしているようだった。

女神さまのおかげで抑えられているということだろう。

女神さまが何をしているのかはわからない。

その上、外から来る神様とか、そんなことを言われても人知の及ばない話に僕らは何もできないのだ。

「……やしろ」

銀花ちゃんが不安そうな表情で僕の顔を覗き込んでくる。

でも、これでひとまず、すべてが終わったと言ってもいい状態だ。

色々な謎も解けたし。

あとは……女神さまが外の神様を抑えることを祈るだけ？

僕らに何もできないんだろうか？

何かをしてもいいのだろうか？

「少なくとも、昔みたいに事故も起こらず、怪談すらハッピーエンドなんて……無理な

んじゃないのか」

「まあ、ね。無理だと思う」

「……むりだし、むちやがある」

今更ながら、僕もそう思う。

街にあった幸せを僕らは認識できなかったけど……。

あれはきつと、おかしいな幸せだったのだ。

かといって、今の状態が正しいのかどうかなんて……わからないのだけど。

でも、女神さまはきつと日常に戻れと言うのだろう。

そして、いつもと同じように、次の日の朝がやってきた。

空は未だに曇天のままだ。いま

冬だというのに、上空では小さく雷鳴が嘶いいている。

それが、まだこの街の事件が終わっていないということを感じさせた。

「雨は降ってないんだけどねー」

金恵ちゃんが不安そうに天を見上げた。

「……きつと、そのうち晴れる」

銀花ちゃんがひっそりと眩つばやく。

そうなるといいな……と、祈ることしかできない。

僕らの手に負えるものではないし……。

「お、蓮れんのヤツ。今日から復帰するらしいな」

「あ、ホントに？」

「ほれ」

そう言って黒恵ちゃんがスマホを見せてくれる。

『蓮』

ふっかー………つ！

〇(・ω・)〇  
『』

実際に姿を見ていないのに、元氣そうなようすが容易に想像できるね。

「蓮が戻ってくれば、日常に戻ってきたって感じになるね」

「ウザいけどな」

「……くろえ、ひどい」

「ダメだよ、そんなこと言っちゃ……」

そんな会話をしながら、僕は登校した。

教室に入ると、真つ先に佐藤君に心配された。

「おす、休んでたけど大丈夫か？」

そういえば僕、休んでたんだった……。向こうの世界でも普通に学校には通っていた記憶があるけど。

「大丈夫だよ、ありがとう。そういえば、佐藤君ももう絆創膏、なくなってるね」

「そりゃ、大した怪我じゃなかったしな」

確かに治らない方が問題だよな。

そして、僕は自分の席に座った。

「おーっす。杜っち」

ホームルームが始まる前に、教室に蓮ちゃんがやってくる。

見るからに元気そうだった。白衣のはためき具合に、とてもキレがある。

「蓮ちゃん、おはよう。元気そうでよかったよ」

「そんな風邪なんかにやられる私じゃないっさー」

「いやいや、階段から落ちたじゃない……」

「おお、そんなこともあったわねー」

蓮ちゃんにとっては階段から落ちたことよりも、風邪の方が辛いのか……。蓮ちゃんらしいような気がするけど。

「もう痛みもないし、体調もばっちりだし、もういつも通りの私だわさ」

「そうみたいだね。安心したよ」

「というわけで時間も経ったことだし！ 社っちさ、そろそろ御神木の件、考えてくれないかなあ？」

「復帰するなり、それなの!?」

まあ、相当緩くなってるけど。

「それはともかく、今日はあのイホノっちはいないの？」

「まだ来てないよ」

来るかどうかはわからないけど……。

女神さまが消えたと同時にいなくなっちゃったし。

どこかに行ったんだと思うけど……居場所はわからない。

「どうして？」

「んー。私が階段から落ちた時、かばってくれたような気がするのよねー。一瞬だったから、気のせいかも」

「そうなの!?」

「かばってくれなかったら、ヤバかった気がするかな。まあ、私の夢って可能性はあるし、確信はないんだけどね。だから、聞きたかったんだ」

「あの……一応聞いておきたいんだけど、彼女が蓮ちゃんを落としたんじゃないって？」

「いや私、足を滑らせて落ちただけだし。落として、下でかばうってどんな自作自演よ」

蓮ちゃんが落ちた時、五百野さんが現場にいたというのは確かに聞いた。

彼女の僕たちへの対応から落としたのかもしれないって思っても、かばったとは思っていなかった。

「五百野さん……結局、何だったんだろう」

「彼女の正体が気になるの？」

「う、うん。まあ。蓮ちゃんも、気になる？」

「気になるっていうか……。私には正体なんてわからないけど、気になるキーワードだったら名前の中にあるじゃない」

「名前？」

五百野しやうび薔薇。イホノシヨウビ。

「……並べ替えるの？」

「三十点つてところかな。並べ替えはするけど、日本語だけじゃないってこと。ま、頭

使って考えてみなさい。答えが出れば、社っちにはわかるんじゃない?」

そんな話をして蓮ちゃんは帰っていった。

うーん……ローマ字にでも直して並べ替える?

I H O N O S H O U B I。

O N O……。小野<sup>おの</sup>?

黒恵ちゃんたちの名字?

残るのは、I・H・S・H・O・U・B・I。

……どうやっても、意味のある単語にならない。使わないアルファベットがあるのか、単にローマ字に直すだけじゃダメなのか。

あ、薔薇をB A R Aにすれば残るのは、I・H・B・A・R・A。

これもダメだなあ。

もしかして、薔薇はローマ字じゃなくて――。

「はい、それじゃホームルーム始めますよー」

それから程なくして担任の先生が来て、ホームルームが始まる。

「五百野さんは欠席、と。電話もかかってこないけど、大丈夫かしら……」

先生は心配そうな表情を浮かべた。

学校が終わって家に帰ると、昨日と同じように父さんと母さんが出迎えてくれた。

「昨日は家で寝てると思ったたら、突然ずぶ濡れぬになって帰ってきたからな。今日は大丈夫らしい」

父さんがホッとしたように言う。

「そ、そうそう起こらないから、そんなこと……」

「お前は生まれてこのかたちよつと運が悪いし、何が起こってもおかしくないんだぞ。気をつけろよ」

「う、うん」

「おーい、社。ちよつと手伝ってもらえるー?」

すると、母さんの声が僕に届いた。

「あ、はーい」

「ちよつと二階の方、掃除しておいてくれないかしら。明日からお客様が来るのよ」

「了解。やっておくね」

そんないつも通りのことをやって。

いつも通り、夕食を食べて。

父さんも母さんも、いつも通りだ。

何も変わらない。

まだ天気は回復しないけど……きっとこれもいつかは終わる。  
でも。

その『いつか』って？

「ねえ、父さん」

「ん？」

夕食を終えて、母さんが食器を洗う音が静かに響く中、僕は父さんに向き直った。

「父さんは御神木さまにどんなお願いを叶<sup>かな</sup>えてもらったの？」

「おいおい、それは秘密だと言ってあるだろ」

「今回は本気で教えてほしいんだけど……」

そう言っても父さんは顰<sup>しか</sup>めつ面<sup>つら</sup>になるだけで。少し悩んでいるような気もする。

「いいじゃない、お父さん。言ってあげれば」

意外なことに母さんが助け船を出してくれた。

「母さん知ってるの？ 父さんの願<sup>ねが</sup>い事」

「ええ、知ってるわよ。家族に関<sup>かか</sup>わることですもの。父さんが言わないのは、ただ恥<sup>は</sup>ず

かしがってるだけだしね」

「おいおい、母さん。それは言わない約束だろう」

「あら？　そうだったかしら？」

父さんは深く溜息ためいきを吐いて頭を搔かく。

そして、ぼそっと口に出した。

「家族がずっと無事に過ごせますように、だ」

父さんの顔が少しずつ赤くなる。

「あんまり言うようなことじゃないだろう。お願いしたのは……お前が幼稚園こどもの頃ころだったな」

「ちよ、ちよつと意外だったな」

「でも、お願い事はちゃんと叶かなっただろ？　オレたちは健康に過ごせているんだからな」

「あはは……。どうなんだろう？」

明確なお願ひ事じゃない。

それに叶わなくても、今と変わっていないかもしれない。

でも……。

「なんだ、社。お前はまだ信じないのか。神社の息子だったのに――」

「ううん。信じるよ」

不幸だった僕がこうして生きている。

黒恵ちゃんに助けられたこともあるんだろうけど。

「今は、僕はもう信じてるから」

「そうか。ようやく自覚が出てきたようだなによりだ」

僕は部屋に戻って、窓から御神木さまを見る。

月も星も、雲が覆ってしまい、御神木さまは暗くてほとんど見えない。時折、雷鳴に照らされてその影が見えるぐらいだ。

「女神さまは……大丈夫なのか」

もう、ずっと雲が晴れていない。

女神さまが行ってから、さらに雲は濃くなったような気がする。

この天気がそもそもそのせいなのかどうか……こじつけかもしれないけど。  
まだ終わっていないんだ。

僕はスマホを取り出して、

『【社】

みんな、いる?』

黒恵ちゃんたちに向けてメッセージを送った。

『【黒恵】

ん? どうした?』

「【金恵】

いるよー  
(°▽°)/」

「【銀花】

にゃー」

銀花ちゃんはいつも通り、スタンプ絵を貼はっている。可愛かわいらしい寝ている白猫の絵だった。

「【社】

今からうちに来られないかな？」

「【黒恵】

別にいいけど」

「【金恵】

いくー  
ε=ε(°▽°)/」

「【銀花】

ダッシュで行く」

特に理由も聞かれなかった。

……いいのかな？

いや、きっと僕を信用してくれたんだ。

そして、幾ばくもしないうちに皆、家に来てくれた。

「こんばんはー。どーしたの、社」

金恵ちゃんが優しく微笑<sup>ほほえ</sup>んでくる。

「御神木さまのところにっこうと思うんだ」

「そのためにあたしらを呼び出したのか？」

黒恵ちゃんが眉<sup>まゆ</sup>を顰<sup>しか</sup>めた。

銀花ちゃんも首を傾<sup>かし</sup>げている。

「……やしろ、どうしてぎんかたちを？ それに、入っくいいの？」

「付いてきてほしかったんだ。それにきつと黒恵ちゃんにも、金恵ちゃんにも、銀花ちゃんにも関係のあることだから……」

そして僕は裏山の方へ足を向ける。

アーチ状の葉っぱのある階段を上って、広場に出た。

御神木さまはいつも通り、鎮座している。

その裏に、少しだけ深紅の赤が見えた。

「なんで、君がここに……？」

「ようやく……来た」

木の裏から赤いコート——五百野さんが出てくる。

闇夜に映える白い髪が、ここぞとばかりに主張していた。

暗くてよくわからないけど、少し疲れたような表情をしているように見える。

「何でいるんだっての」

黒恵ちゃんが彼女に鋭い目を向けた。

だけど、五百野さんは心ここにあらずといった様子だ。

「しあわせに、しなきゃ……しあわせに、しなきゃ……しあわせに、しなきゃ……」  
病的で。

よくよく見れば、目がうつろになっている。

今まではどこか人を弄ぶもてあそような、そんな瞳ひとみをしていたのに、今はそんな余裕が欠片かけらも

見えない。

「なんで……幸せになるのを拒否するの？」

小さな声。

聞き逃してしまいそうな声だったけど、僕の耳はどうか彼女の言葉を捉とらえた。

「五百野さん……」

「ねえ、なんで……。私は社を幸せにしたいだけなのに……」

彼女は本心で言っている。

三猿の時も。

ラッキースケベみたいなたく体験をさせられたのも。

妙な世界に行ったのも。

全部、彼女の心の底からの善意なんだ。

「簡単だよ、五百野さん」

「……？」

「一瞬だけ忘れてしまったけど、僕の幸せは黒恵ちゃんと、そして金恵ちゃんと、銀花ちゃんたちと一緒にいることだから。その上で彼女たちが幸せであること。少なくとも離れたら、それはできない」

彼女たちは言ってくれた。

「皆、僕の不幸を許容してくれると言ってくれたんだ。たとえば、周りから見えて幸せに見えるなくても、僕たちが幸せならそれでいい」

五百野さんは呆けた顔をしていた。

僕の言葉を、咀嚼して理解しようとしているみたいに。

「黒恵ちゃんは僕の不幸を支えてくれる」

黒恵ちゃんを見る。

難しい顔をして目を逸らしちゃったけど、これは彼女なりの照れ隠しなのだと、ようやく理解ができるようになった。

「金恵ちゃんは未来の幸せを与えてくれる」

こうなりたかったという黒恵ちゃんの思いを具現化した金恵ちゃん。

でも、そんなの関係なく、彼女は僕を受け入れてくれている。

金恵ちゃんを見ると、いつも通りニツコリと向日葵ひまわりのような笑みを浮かべてくれた。

「銀花ちゃんは、過去の幸せを取り戻してくれる」

本来なるべきだったという黒恵ちゃんの過去を具現化した銀花ちゃん。

彼女を見ているだけで、僕は昔を思い出せる。

銀花ちゃんを見れば、彼女は穏やかな笑顔を向けてくれた。

「街は……どうでもいいの？　幸せじゃなくなるんだよ！」

五百野さんが叫ぶ。

確かにそれに関しては心苦しくて仕方ない。

でも――。

答え倦あぐねていると、黒恵ちゃんが一步前に出た。

「五百野」

「何よ」

「前々から色々と考えてたんだよ。でも、答えは案外簡単だった」

「だから、何よ！」

「簡単なことだ」

黒恵ちゃんは冷静な顔で、

「幸福や不幸なんてものを、ひとりの肩に押しつけるな」

と、五百野さんを咎めるように言った。

「仮に、交通事故が起こったとしても、社の責任になることなんてあり得ねえんだよ。ただの不注意でしかない」

「で、でも！」

「連は階段から落ちたのは、ただの不注意だったって言ってたぜ。見舞いに行ったときにな」

「……っ！」

「誰かの不幸で事故が起こっても、それが全部社に結びつくわけねーだろ。事故や災害には全部理由があるけど、それが社の責任だなんてちゃんちゃらおかしい」

「神様の力を信じてないの……!？」

「さーな。でも、この街が不幸に見舞われても、お互いが注意しながら生きていければいい。その理由になるもんを、普段から注意してればいいだけだ。これまでの街の人たちはあたしらも含めて、事故が起こらないからって油断してたのかもしれない」

「だからって……!」

「誰かの責任にしたいと思うことはあるかもしれないよ。でも、それを社ひとりのせいにするのを、あたしは絶対に許さない。第一、社を不幸にして街が幸せになるとして、誰かひとりを犠牲にして得る幸せなんてまっぴらごめんだ!」

黒恵ちゃんが吠えるようにそう叫ぶ。

「わたしは他人の不幸じゃ、御飯を美味しく食べられないしね」

今度は金恵ちゃんが前に出た。

「……いっしょにゴハンを食べて、しあわせになれば、ゴハンはもっとおいしくなるとおもう」

次に銀花ちゃんが。

皆が、僕との幸せを願ってくれていた。

だけど。

「納得なんかできるもんかつ!」

五百野さんが叫び、その手を構えるように前に出す。

「あぐっ！」

黒恵ちゃんが突然苦しみだして、膝ひざをついた。

「あうっ！」「……ぐ」

金恵ちゃんと銀花ちゃんも同様に。

「五百野さん、何を——！」

「もう関係ない。社。私と幸せになるの。一緒にいれば幸せなんですよ？ この三人はちゃんと貴方あなたの傍に置いてあげる。幸せの概念を変えてやれば、一緒にいるだけで幸せって思うようにすれば大丈夫でしょ!？」

その瞳は普通じゃなかった。

どこかおかしいようにも見える。

でも、それ以上に彼女は悲しそうに見えたし。

そして——泣いていた。

止め処なく涙を頬ほおへと流している。

「なんで、なんで、こんな……！」

「ふん、あたしらの幸せを変えられるってんならしてみろよ……！」

「あなたのそんな力に、絶対に負けない」

「……ぎんかたちのおもい、なめるな、このやろう」

三人はいつの間にか立ち上がった。

そして、ぎこちなく一斉に飛びつく。

「なんで……!」

「もうあたしらの幸せを変えられないってわかってんだろ」

「なんとなく、わたしたちの心を覗<sup>のぞ</sup>かれたような感覚があったけど」

「……ぎんかたちのおもいを、あなたは知った」

今度は五百野さんが膝を折った。

「こんなじゃ、無理よ……。社はもう、絶対に私を選んだりしない……!」

彼女の涙は止まらない。

「私だって、社と……幸せになりたかった……!」

その言葉は僕の心に強く刺さった。

「あー、いってー」

黒恵ちゃんたちは五百野さんの力から解放されたようで、安心したような表情に戻る。ちよつと疲れた顔をしていたけど、もう問題はなさそうだ。

「五百野さん」

僕は五百野さんに一歩踏み出す。

「ちっ、近づかないでッ！」

拒否されたけど、僕は気にせず彼女に近づいた。

そして、僕は彼女に抱き付く。背中を擦きすって、彼女の心を落ち着けるように。

「大丈夫だよ。別に何もしない」

「や、社？」

「ごめんね。僕は君のことを勘違いしてた。五百野さん。いや——」

この子は、五百野薔薇なんて名前じゃない。

彼女の名前は——。

「白恵しろえちゃん」

小野白恵。

それが彼女の名前だ。

「な、なんでそれを——」

「気付けなくてごめん。でも、さすがに複雑すぎだったかな」

なんでこんな名前にしたのかはわからないけど。

五百野はそのままローマ字に、IHONO。

そして、薔薇はSYOUBIでもBARAでもなく、ROSE。

これでようやく意味のある言葉——いや、名前にできる。

ONOを抜いて、残ったI・H・R・O・S・Eを並び替えると、ONOSHIR  
OEになる。

小野白恵になるのだ。

「僕が君を黒恵ちゃんに似てると思ったのは間違いじゃなかった。気付くのが遅れたけど……」

「わ、私は……」

「君は……きつとあの外から来る災いの神に、幸せって概念を塗り替えられただけなんだ。だから、黒恵ちゃんたちが感じていた幸せが……それが幸せだよ」

僕に彼女たちの思いが見えていたわけじゃない。

でも、どう思ってくれていたか、これまで一緒に過ごしてきたこととなくはわかるようになった。

「社……」

「白恵ちゃんがどういう経緯で生まれたのかまではわからない。でも、君は僕を幸せにするって名目で、不幸せにするよう騙だまされただけなんだ」

「あ、う……」

「でも、もう大丈夫だよ。そんなことをする必要はないから。君の幸せも、僕の幸せだから……」

白恵ちゃんはすでに大人しくなっている。

でも、ちゃんと僕の言葉を聞いてくれていた。

「君が幸せを願うなら、僕もそれに応えたい。きっと、皆で幸せになれるはずだ。白恵ちゃんもいれば、もつともつと僕らは幸せになれる」

「社と……幸せになれる？」

白恵ちゃんは僕の目を見る。

「うん。なれる。僕の方だけじゃ無理だけど、白恵ちゃんも協力してくれれば。それに黒恵ちゃんも金恵ちゃんも銀花ちゃんもいるからね」

「あははっ。社のハーレムだね」

「う……あはははは……」

白恵ちゃんは気付けば笑みを浮かべていた。

今までのような、人を馬鹿にしたような顔でも、作り笑顔でもない。

彼女の本来の、可愛らしい笑顔だ。

黒恵ちゃんの幼稚園の頃を思い出した。

「……私も、思い出したよ」

彼女は僕の手から離れる。

そして、落ち着いたところで御神木さまが光り始め、あっという間に僕らの世界は白に染まった。

僕の視界には御神木さまと、黒恵ちゃん金恵ちゃん銀花ちゃん、そして、白恵ちゃんがいる。

「社」

声が聞こえる。

威厳のある声だった。

そして、聞き覚えのある声。

「御神木さま……？」

「ああ、そうだ。姿を見せられずにすまないな。ずっと、話をしたいと思っていた」

白恵ちゃんが天を仰ぐ。

「……祭神さま」

そして、彼女は小さく呟いた。

「すまなかったな、社。元々、白恵は黒恵の魂の欠片かけらを使って、お前のサポートをするべく、生み出したんだが……それを厄神に介入されてしまったんだ。社にも、そして、白恵にも迷惑をかけた」

「ううん。今だから言えるけど……結界が弱くなってたからね」

白恵ちゃんも祭神さまに自然と対応している。

驚くようなことだけど、でも、そこまであまり驚かなかった。

「元々、結界はお前が生まれるまで維持していた程度で、人身御供で不幸にする者など必要なかった」

……ということは、僕が生まれた時に何かが起こったってことだろうか？

「察しがよくて助かる。あの頃、とある神のひとり——厄神が、あの泉の女神にちよつかいを出しにきた。入れさせないために結界の強化を必要としたんだ。それがし 某にはまだ大し

た力もなく媒体が必要だった」

それが、僕不幸……。

「そうだ。お前には悪いことをしたと思ってる。白恵はその不幸をサポートさせるために生み出したんだがな。ただ、結界の外からその入ろうとしている神に茶々を入れられてな。結果的に黒恵本人に頼むことになったが」

それで白恵ちゃんがあんなねじ曲がってたんですか。

「そういうことだ。本当にすまなかったな」

女神さまもそうだけど、神様つてもしかして脇甘いんですかね……。

「手厳しいな。否定はしない。そもそも神と言っても、人の願望から生み出されたみた

いなものだからな。神というのは人の想いで醸成するものだ」

じゃあ、女神さまが不幸の神様だったってことは……。

「人の不幸を願う者の想いが象られたということだ。浄化にはとても時間もかかった。それこそ千年近い時間がな……。それで、社」

なんですか？

「某が願いを叶えるという言い伝え、覚えているか？ お前はあんまり信じていなかったようだが」

まあ、昔は正直……。

でも、今は信じてます。

「本来ならばもう少し、経ってからなのだがな。願いを言うといい。多少戻った力でちよつとした願いなら叶えられる」

ならば、僕の願いはひとつだけだ。

「女神さまのところにやってあげてください」

「……なんだと？」

「女神さまは今、この街に入ってくる神様と戦ってるんでしょう？ だったら援護に行ってください」

「だが。それでは、この街の福音機構は維持できない。この街に、某は一時の不幸に耐

えてくれと押しつけてしまった。この街を不幸に晒すのは……」

「そんなものなくても、人は生きていけます。もちろん、僕も。支えてくれる人がいるから……」

すると、祭神さまは憑き物が落ちたような声を出す。

「ありがとう、社」

「いえ。でも、ちゃんと戻ってきてくださいね。祀る神様がいない神社っていうのも変です」

「ああ、必ず戻ろう。某は気兼ねなく、彼女の下へ行く。さらば、だ。社」

御神木さまが光り、その光が柱となって上空へと伸びていく。

そして、光はすぐに収まり、視界はフェードするように元の風景を取り戻した。

御神木さまは……心なしか存在感が薄れた気がする。

僕らだけが、残された。

「さて、と。私は戻らないとね」

白恵ちゃんが、小さく呟く。

「白恵ちゃん？」

「元々、私は黒恵の魂の欠片から生まれた存在だからね。元に戻った方がいいと思うんだ」

「え。それって」

「黒恵の中に戻るってこと」

あっけらかんと言う。

「そのまま存在できないの？」

「私は黒恵や銀花みたいに、元々の魂がある人間じゃないから。仕方ないんだ」

……白恵ちゃんが少しずつ薄れていく。

「おい、あたしはお前に戻っていい、なんて言っていないんだが」

「えー。同族嫌悪？」

「勝手に同族にするんじゃないよ」

「あはは、ごめんね。でも、もう厄神の介入もないし……魂が離れる理由もない。元に戻るしかないんだよ」

「やれやれだな」

黒恵ちゃんは溜息ためいきを吐く。

「ま、いいさ。お前も騙されてただけで、社を幸せにするって気はあったみたいだしな。あたしの不幸と逆でさ。お前は……あたしがあの日、誓った時に忘れてったあたしの忘れ物だ」

「そうだよ。あなたが社を不幸にすると誓って、そして諦めた時の想いが、私だから」

そして、彼女はどんどんと薄れていく。

「銀花」

「……ん」

「あんまり、社を困らせたらダメだよ？　控えめにアプローチするの。その方がきっと社が喜ぶから」

「……ぎんかも、さいきん、そう思ってた」

銀花ちゃんは笑って頷いた。

「金恵。あなたは、今のままでいいんじゃないかな。積極的過ぎるのは、時と場所を考えてね」

「貴女あなたにそんなこと言われるなんて。でも、わたしとしてはもっと積極的にいきたいんだだけだな」

「その身体からだがあれば充分じゃない？」

「……その言い方もどうなのよ」

呆れた顔あきをして、だけどクスクスと金恵ちゃんは笑っている。

「で、黒恵」

「なんだよ」

「もう社を不幸にする必要なんてきつとないから。女神と祭神さまが全部、解決してく

れるから」

「……ま、お前ももう社を幸せにする必要はないぞ。あたしが全部、引き継いでやる」

「黒恵に任せるのは少し不安だけど」

「殴るぞ、お前」

「ま、お願いね」

そして、白恵ちゃんは僕に向き直った。

「それじゃ、社。別れを言うのも、またねって言うのも違うけど……あ、うん。これが一番相応<sup>ふさわ</sup>しい言葉かな？」

「……………」

「皆で、幸せになってね」

そう言い残して、白恵ちゃんは霧のようになって消えていった。

そこには何も残らなかったけど。僕らの心には、強く残ったのだと思う。

「終わったな」

「……おわった」

黒恵ちゃんと銀花ちゃんがしみじみと言う。

「さ、全部終わったのなら帰りましよ」

金恵ちゃんが腕を伸ばして、普段と同じように——まるで学校帰りのように言う。

「そうだね」

この街の異常はすべて終わる。

きっと、事故だって起こるし、災害だって襲ってくるだろう。

でも、加護なんてものがなくてもみんなは生きていける。

不幸は支え合って生きていくと決めたのだから。

そして、御神木さまから祭神はいなくなり、この街の幸福な加護も消えた。



## 間章

「……まったく。あんた、何で来たのよ」

「跡継ぎの社やしろが行けと言ったからな。彼を見守る神としては行かざるをえまい」

「せっかくお互い、力が戻ってきたのに。厄神いずもを出雲に追い返すのだけで空っぽよ。また長い時間、眠ることになるし」

「もう構わないだろう。某はお前の厄はらを祓うために信者たちを不幸にするという過ちを犯した。あの時はそうする他ほか、なかったがな」

「私を見捨てればよかったのさ」

「出雲を追い払われて、涙目で逃げてきたお前を追い出すことなどできない」

「だ、誰だれが涙目だったの！ 泣いてねーし！」

「とにかく、某は後悔していない。千年以上寝たことも……、これからまた長い間、眠ることもな」

「この街の住民たちは大丈夫なのかい」

「大丈夫だろう。本来の街に戻るだけだ。もう幸不幸ゆがが歪むことはない。元々、幸福にあぐらを掻かいている者たちでもないしな」

「信用してるな」

「社の人となりはずっと見てきたからな。あいつなら大丈夫だろう」

「ふーん？」

「それに黒<sup>くろ</sup>恵<sup>ゑ</sup>たちもいる。彼女には以前、社を頼んだからな。厄神の力から守ってくれたんだ。彼らがいれば、きっとこの街がおかしくなることはないだろう」

「ま、あんたがそれでいいならいいけどね」

「……さて、お前はこれからどうする？」

「何がよ」

「不幸は完全に祓<sup>はら</sup>われている。力がないとはいええ、もうお前は自由だ。どこに行くのもいい」

「……嫌<sup>きら</sup>よ。別に力がなくなたって困らないけど……眠るあんたを置いては行けないし」

「気にしなくてもいいがな」

「まったく。神座<sup>かんざ</sup>木の神は跡継ぎと同じで察<sup>さつ</sup>しが悪いね」

「社と一緒にされるとはな」

「一緒に眠ってやるって言ってんのよ。拒否は許さないから」



# 【エピローグ】

epilogue

● ● ● ●

Bokuto  
Kanojoto  
Kanojoto  
Kanojo

夜。

空を覆っていた灰色の雲は、穴が空くように散って星々を僕の目に映している。

そんな空に、天を覆わんばかりの流れ星が流れた。

ニュースでもやらなかった、突発的な季節外れの流星。

その光は御神木さまのところへと集まった。

世間ではなんだったのか、という話で持ちきりだったが、幸いなことに御神木さまとの関連性はあまり取りざたされていない。

そして、その日から事故や災害はめっきりと減った。

もちろん、以前のようにまったく起こらないようなことにはなっていないが……蓮れんちゃんいお曰く、

「ま、事故なんて起こって欲しくないけど……ひとつの街で起こる割合としてはこんなもんじゃないの?」

ということだった。

そんな蓮ちゃんは、これまでのこの街の謎を解明するべく頑張っている。

あと、流星群と御神木さまについてはしっかり見ていたらしい。

「社やしろっち。御神木さまのところに行かせてよおー」

「ちゃ、ちゃんと一年毎いちねんごとに公開するよう父さんに提案してるから……」

「で、いつー?」

「い、いつか」

蓮ちゃんはおも不満そうな顔をしたが、ひとまずは納得したようだった。

あれから僕は御神木さまの公開を提案していた。

父さんも「考えてみる」と言って、色々と悩んでいるようだけど、手応てごたえは悪くな

い。別に信者を増やそうとか思ってるわけじゃないけど……。

秘密にするよりは、皆に知って欲しい気がしたのだ。

そして、その夜。

僕は御神木さまと女神さまが寄り添っている夢を見た。



ここ数日、灰色で塗り潰されていた空はようやく本来の色を取り戻したかのように鮮やかな青色を見せていた。

重苦しい雰囲気もなく、今日は過ごしやすい気候だ。心なしか気温も少し暖かい。ようやく晴れ晴れとした気分では登校した。

「なんだ、お前もあの夢見たのか」

「うん」

昨日見た夢を、黒恵ちゃんも見ていたらしい。

いつもと同じ朝のホームルーム前、ちよっと昨日見た夢の話をしたら、

「あたしも見たぞ」

と、不思議な顔をされた。

金恵ちゃんかなえと銀花ちゃんぎんかもだ。

「全員が見たつてことは、何かしらのメッセージかな？」

金恵ちゃんがちよっと夢見がちに言う。

「ま、無事ならなんでもいいさ。死んでるつても夢見が悪いしな」

「そうだね」

「……ころしても、しにそうにない。というか、かみさまってしぬの？」

「あ、あはは……」

金恵ちゃんや銀花ちゃんと話しながら、少しだけ外を見る。

「おーい、社っち。何黄昏なまぐれてんのー」

蓮ちゃんの声が耳に届く。

「やっほー」

「あ、蓮ちゃん」

「都市伝説、普通になっちゃったわねー。都市伝説がフツーってのもおかしい話だけど」

「はは……」

あれ以来、もう大きな事故や災害は起きていない。

そして、都市伝説や怪談も他の街と変わらない内容になっている。

小さな事故は起きているし、怪我けがをしている人も多いけど。

たぶん、これが正しい姿なんだと思う。僕ひとりで背負うことはない。

注意を喚起して、危なそうなものを発見したら知らせる。

そのぐらいのスタンスでいい。

「ま、都市伝説はいくらでも出てくるからね。また探すわ」

「その方が蓮ちゃんらしいよ」

そう言うのと、蓮ちゃんはふふんと楽しそうに鼻を鳴らした。

「ま、そろそろクリスマスだし？ 何かひとつぐらい都市伝説でも出てこないもんかね」

「そんなポロツと出てくるようなものじゃ……」

でも、そっか。

二期ももうすぐ終わり。

クリスマスイブが近い。

「ねー、社。クリスマスイブ、わたしとデートしない？」

「えっ」

「ねーねーいいでしよいいでしょ」

金恵ちゃんがぴったりと身体からだに寄り添ってくる。

周りでクラスメイトたちが見てんですが……。

興味津々な視線を向けられている。

「懲りねーな、てめーも！ なに隙すきあらば独り占めしようとしてんだ！」

「何言ってるのよ。これは戦いよ？」

「協力プレイじゃない辺り、お前の欲深さがよくわかった」

相変わらず、黒恵ちゃんと金恵ちゃんの口喧嘩くちげんかは絶えない。

いきなり発火するからなあ。

「お前も毅然とした態度を取れ」

ピシッと音が鳴る。デコピンされた。額に鋭い痛みが走る。

「ちよっと!？」

「この程度じゃ痛いうちに入んねーよ」

痛いです。

「黒恵の感覚なんて当てにならないわよ！ 大丈夫、社？」

金恵ちゃんが僕の額を撫でてる。

なんだか気持ちいいけど、恥ずかしい……。

「だーかーらー、気安く触るなつての！ TPO弁えろ！」

「ちよっと！ 馬鹿力で腕押さえないでよ！」

取っ組み合いが始まってしまった……。

すると、いきなり腕が強烈な力で引っ張られる。

「うわっ」

「……ほっとく」

銀花ちゃんが僕の腕を掴んで教室の隅に移動しようと立ち上がる。

引っ張られているから、僕も立ち上がらざるを得ない。

「あーちよっと！」

「銀花、てめー離れるんじゃねーよ！」

だけど、銀花ちゃんは移動寸前で黒恵ちゃんの手に乗まった。

「まったく油断も隙もない」

「抜け駆けは禁止よ、銀花」

「……かなえ、せつとくりよくない」

今までとまったく同じ。

「まったく、あんたらは変わらないわね」

僕の不幸はまだまだ続いているのだけど。

僕はもうそれを不幸だとは思わない。

だって、彼女たちがいるんだから。

「ほら、授業始まっちゃうよ、三人とも」

「そうだな。席に戻るか」

「はい。また次の休み時間にね、社っちー」

「……ん」

そして、蓮ちゃんは自分の教室に戻って、三人はそれぞれ席に戻る。

それからすぐに先生がやってきた。

僕たちは昨日と同じような。

でも少し違う、一步を踏み出す。

今日もまた、昨日よりも一步だけハッピーエンドに近づけたらいいな。



## あとがき

社は突如、異世界へと転移した。

転移した世界でさまよい歩き、ついに飢えで行き倒れた社。

だが、そこを四姉妹に助けられる。その四姉妹はなぜか、長女金恵、次女黒恵、三女白恵、四女銀花と見知った顔だった。

社は食べ物を分けてもらい九死に一生を得る。

今まで気付かなかったが、社が家の外に目を向けるとそこは馬の牧場だった。サラブレッドもいる、ペガサスもいる、ユニコーンもいる。

この世界では様々な品種や神種による競馬が盛んらしい。

だが、彼女たちはこの馬たちを手放さないといけないという。借金で首が回らないのだ。

今度レースに出る馬が勝たなければ、親の残してくれた思い出のこの牧場が差し押さえられてしまう。

その上、この牧場を狙う悪い金持ちの企みのせいで、馬に乗ってくれる騎手までいなかった。

助けてくれたお礼に一念発起する社。

実は幼い時から乗馬が大の得意だったのだ。

さっそく馬に乗りうとするが、なんと馬具が何もついていない。

鞍くら（背に置いて、人や荷物をのせる道具）がない。

鞍あぶみ（馬の鞍の両脇りょうわきに取りつけて足をかけて使う道具）がない。

ハミ（馬の口にかませる金具）も手綱くつわ（轡くつわに結びつけ、乗り手が馬を操る綱）もない。

蹄鉄ていてつ（馬の蹄ひづめの損傷を防ぐために、その底に打ちつけるU字形の鉄）もないのだ。

なんとこの世界では、あらゆる馬具が発明されていなかったのだ。戦争も農耕もしてなかったからね。たぶん、それが原因だね。しょうがないね。色々細かいところには目を瞑つぶろう。

社はさっそく町の人に頼み込んで、鞍、鞍、ハミと手綱、蹄鉄を作ってもらう。

そして、馬に装着させ、騎乗。

馬具を付けていない馬など、社の天才的騎乗技術の前では敵ではなかった。

それから社は馬具のアドバンテージを利用し、あらゆるレースで無双するのだった。

社は大金を稼ぎ、どうにか牧場の倒産を防ぐことに成功する。

四姉妹にとっても感謝され、元の世界に帰る方法がわかるまで一緒に住むことになった。

牧場が建て直されて数日後、ある馬を勝たせて欲しいという依頼が舞い込んだ。

その馬は社が元いた世界にいた馬だった。

すでに亡くなっているが、無敗でダービーを勝った馬の魂が入っているらしい。向この世界での名前は忘れてしまっているが、ここではパーフェクトと名付けられている。

実はこの世界の馬たちは社がいた世界で亡くなった馬の魂が行き着く場所だったのだ。

だからあの三冠馬もいるし、スーパーカーもいるし、ビッグレッドだっているし、グレイゴーストだっているし、ビッグ・サイもいる、ザ・レッドテラーもいる。

ここではあらゆる伝説の馬たちが最強を決めるべく、しのぎを削っていた。

そして、最強の馬と最強の騎手にはこの世界が願いを叶えてくれるという伝説があった。

社は元の世界に帰るべく、預けられた馬と共に人馬最強を目指すことになる。

しかし、この無敗のダービー馬であるパーフェクト。強い強いが足をかばうように

走っており、全力を出せていなかった。

社と四姉妹が甲斐甲斐しく世話を焼くが、それでもまだ怖がつている。足が壊れてしまふのを恐れているのだ。この世界ではいくら走っても神の力ご都合主義で骨折しないのだが、やはり向こうの世界での恐怖が忘れられないらしい。

苦戦しながらも、最強を決めるレースまでどうにか辿り着いた社とパーフェクト。

相手にはスレイプニル、赤兎馬せきとば、松風に黒王号までいる。伝説の名馬どころか、名だたる神話生物やフィクションの馬まで混ざって、最強を決めるに相応しいメンバーだった。

伝説とも言える馬たちを前に、スタートしてもやはり足をかばうパーフェクト。三本足で走っているようなものだった。見る見るうちに最後方に置かれてしまう。

社は訴えかける。

全力で走りたくはないのか、と。

向こうの世界では、ずっと足をかばいながら走ってきたのだ。

あの世界ではそれでも勝てた。

しかし、ここでの相手は伝説や神話の馬たちだ。

全力を出さずして勝てるわけがない。

社の想いに応えたいおもパーフェクトは勇気を出して、その一步を踏み出す。

一完歩、一完歩。

少しずつ差が縮まっていく。

走りながら、パーフェクトは思い出していた。

走る喜びと。

そして、自分自身の真の名前を。

幻の馬と謳うたわれた彼が、向こうの世界ではついで出すことのできなかった全力で、

今、神話の馬たちへと立ち向かう——！

なんていう話を妄想しつつ、お久しぶりです、田尾典丈たのおりたけです。

色んなプロットを混ぜ合わせて、本作の登場人物を交えて競馬をネタにしてみたら、こんな感じになりました。紙面の無駄遣い、本当に申し訳ありません。

さて、これで三巻目となりました。

前巻から引き続き買っていた方、本当にありがとうございます。

ただ、読んだ方はおそらく察しているかと思いますが、最終巻となっております。

ネタ的には限界でした。

書くのも、というよりもネタ出しの方がしんどかったです。

結界云々の話については最初から考えていたことなのに

なぜなのか。

そして、むしろあとがきが6Pなんていうのも書くネタがない。

競馬ネタをあとがきに書く時は決まって、本気でネタがない時です。

ちなみに、パーフェクトにはもちろん元ネタがあります。もし、お暇があれば調べてみてください。

それでは、最後に謝辞を。

やっぱり、みんな可愛い（確信）。黒恵も金恵も銀花も白恵も全員可愛いです。女神さまも蓮れんもちろん、全員が可愛い。ヤバイ。ラフの段階から口絵も挿絵も素晴らしさが漂ってましたが、完成版を見るとテンションが最高潮になりますね。エッチな絵、大好きです！ ピロ水先生、ありがとうございます！

編集K様。この巻でも色々のご迷惑をおかけしてしましまして申し訳ないです。ちゃんとチェックはしているんですけどね……。三巻まで出せたのも編集さんのおかげです！

また、この本を出版するにあたって関わったすべての皆様へ、厚く御礼申し上げます。

そして、最後に。この本を読んでくださった読者の皆様にこの上ない感謝を。

またどこかでお会いできれば幸いです！



## 僕と彼女とカノジョとかのじょ 3

---

発 行 2014 年 8 月 1 日 電子書籍版 ver.1.0

著 者 田尾典文

イラスト ビロ水

発 行 者 永田勝治

発 行 所 株式会社オーバーラップ

<http://over-lap.co.jp/bunko/>

©2014 Noritake Tao

本作品の一部あるいは全部を無断で複写複製、放送、データ配信などを行うことは  
法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。